永観堂ホームページ

みかえり法話集　第2部

浄土宗西山禅林寺派
総本山　永観堂禅林寺

目次

永観堂禅林寺　ご本尊　みかえり阿弥陀如来さま 5
＊＊＊　みかえり法話集　＊＊＊ 5
1　「恩」に目覚めて生きる（2014/6/01）..... 5
2　「不思議」を感じ、「あたりまえ」とは言わない（2014/7/01）..... 6
3　道林禅師と白居易の問答（2014/8/01）..... 6
4　家庭は心と心が触れあうところ（2014/9/01）..... 7
5　正しいということ（2014/10/01）..... 8
6　憎しみを超えて（2015/1/01）..... 9
7　仏も衆生も おや子のごとく なるゆへに 親縁となづく（2015/2/01）..... 9
8　「しあわせノート」（2015/3/01）..... 10
9　「親より先に死ぬのは親不孝だよ」と言われたら？（2015/4/01）..... 11
10　仏さまのねがい：世の中は平和で穏やかでありますように（上）（2015/5/01）..... 12
11　仏さまのねがい：世の中は平和で穏やかでありますように（下）（2015/6/01）..... 12
12　青色青光　黄色黄光（2015/7/01）..... 13
13　「はたらき」となって（2015/8/01）..... 14
14　彼岸花におもう（2015/09/01）..... 15
15　パンタカのお話（2015/10/01）..... 16
16　二度とない人生だから（2015/11/01）..... 17
17　「願いごと」「願」について（2016/2/01）..... 18
18　和顔愛語 先意承問　（2016/3/01）..... 18
19　物を受くるに心をもってす　法を受くるに体をもってす（2016/4/01）..... 19

20　仏教ボランティア（2016/5/01）.....20
21　念仏は幸福の大道なり　(2016/6/01) 21
22　「忍辱（にんにく）」...　耐える、ということ　(2016/07/01).....22
23　今が一番幸せ（2017/2/01）.....22
24　感動とは　感じたら　動くこと（2017/3/01).....23
25　健康ってどんな状態をいうのでしょうか（2017/4/01）.....23
26　食事のときに「いただきます」っていいますか（2017/5/01）.....24
27　信仰心(2017/6/01) 25
28　受け難き人身を受けて、遇い難き本願に遇いて･･･ 法然上人『一紙小消息』(2017/7/01) 25
29　命の平等（2017/8/01）.....26
30　法然上人のお歌（2017/9/01）.....27
31　管見（2017/10/01）.....27
32　無罣礙（むけいげ：こだわりなく平安なこと）(2019/11/01) 28
33　悲心（2019/12/01）.....29
34　「ありがたし」小考（2020/1/01）.....30
35　仏教の心の世界（2020/2/01）.....31
36　諸法実相（しょほうじっそう）（2020/3/01）.....32
37　不失花（失せざる花）(2020/4/01).....33
38　南無佛(2020/5/01) 34
39　自灯明・法灯明（2020/6/01）.....35
40　没蹤跡（もっしょうせき）（2020/7/01）.....36
41　至道無難　唯嫌揀択（しどうぶなん　ゆいけんけんじゃく）（2020/8/01）.....38
42　吹毛剣（すいもうのけん）（2020/9/01）.....39
43　遊（ゆう、遊び）（2020/10/01）.....40
44　経霜楓葉紅（霜を経て楓葉紅なり）（2020/11/01）.....42
45　信と偽（2020/12/01）.....43
46　十牛図（2021/1/01）.....44
47　少欲知足（欲少くして足ることを知る）（2021/2/01）.....46
48　必得往生（ひっとくおうじょう）(2021/3/01) 47

49　縁起（2021/4/01）……48
50　不過三毒と「いただきます」（2021/5/01）……50
51　蟹（せき）と蟹（にい）？（2021/6/01）……51
52　咫尺千里（しせきせんり）（2021/7/01）……52
53　智目行足（ちもくぎょうそく）(2021/8/01)……53
54　忍辱（にんにく）（2021/9/01）……54
55　豈容不去（あに去らざるべけんや）（2021/10/01）……56
56　四弘誓願（しぐせいがん）（2021/11/01）……57
57　真是諸仏子（まことにこれ諸仏の子なり）（2021/12/01）……58
58　福楽（2022/1/01）……59
59　福分け（2022/2/01）……61
60　柳緑花紅(やなぎはみどり　はなはくれない)（2022/3/01）……62
61　古今無二路（古今に二路なし）(2022/4/01)……63
62　久遠（くおん）（2022/5/01）……64
63　徳不孤　必有隣（とくはこならず　かならずとなりあり）（2022/6/01）……66
64　獅子吼(ししく)（2022/7/01）……67
65　随喜（ずいき）(2022/8/01)……68
66　念々不捨者（ねんねんふしゃしゃ）(2022/9/01)……69
67　悉有仏性（しつうぶっしょう）（2022/10/01）……70
68　真味只是淡（しんみただこれたん）(2022/11/01)……72
69　如愚如魯（にょぐにょろ）（2022/12/01）……73
70　五色雲（ごしきうん）（2023/1/01）……75
71　主人公（2023/2/01）……76
72　冷暖自知（2023/3/01）……77
73　安寧(2023/4/01)……78
74　娑婆に生きる(2023/5/01)……80
75　欣求浄土(2023/6/01)……81
76　夏雲多奇峰（2023/7/01）……82
77　共に生きる（2023/8/01）……84
78　厭離穢土（2023/9/01）……85

79　回光返照（2023/10/01）..... 86
80　施無畏（2023/11/01）..... 88
81　冬日可愛（冬日愛すべし）（2023/12/01）..... 89
82　誓願を立てる（2024/1/01）..... 90
83　好時節（2024/2/01）..... 91
84　心不可得（2024/3/01）..... 93
85　三心四修（2024/4/01）..... 94
86　魚化龍（うおりゅうとかす）(2024/5/01)..... 95
87　忘筌(筌を忘る)（2024/6/01）..... 97
88　暢（ちょう）（2024/7/01）..... 98
89　愚痴に還る（2024/8/01）..... 99
90　竹一竿（2024/9/01）..... 100
91　諸法無我（2024/10/01）..... 102
92　如是我聞（是の如く我は聞きけり）(2024/11/01)..... 103
93　三輪清浄（2024/12/01）..... 104
94　乾坤輝く（2025/1/01）..... 105
95　日々是好日（にちにちこれこうにち）（2025/2/01)..... 106
96　倶会一処（くえいっしょ）　(2025/3/01)..... 108
97　念彼観音力（ねんぴかんのんりき）（2025/4/01）..... 109
98　自帰依（じきえ）（2025/5/01)..... 110
99　欣求浄土（2025/6/01）..... 112
100　処処全真(2025/7/01)..... 113

永観堂禅林寺　ご本尊　みかえり阿弥陀如来さま

自分よりおくれる者たちを待つ姿勢
自分自身の位置をかえりみる姿勢
愛や情けをかける姿勢
思いやり深く周囲をみつめる姿勢
衆生とともに正しく前へ進むためのリーダーの把握のふりむき

真正面からおびただしい人々の心を濃く受けとめても、なお正面にまわれない人びとのことを案じて、横をみかえらずにはいられない阿弥陀仏のみ心

＊＊＊　みかえり法話集　＊＊＊

1 「恩」に目覚めて生きる (2014/6/01)

お釈迦様が説かれた教えは八万四千の法門と言われるほど膨大で多岐にわたりますが、仏教の説くところを突き詰めてたった一文字の漢字で表すとすれば何という字になるでしょうか。それは「恩」という字に極まると言われています。

「恩」という字は、「因」と「心」からできています。「因」とは原因の「因」です。つまり、自分が存在することの原因、自分のいのちを支えているものに心するということが「恩」だと言えます。

また「因」という字には「もとづく」とか「受け継ぐ」という意味もあります。自分のいのちの「もとづき」や「受け継ぎ」を考えてみたとき、両親・祖父母・曾祖父母・・・先祖代々から脈々と受け継ぎ、自分のいのちが今ここに存している、ということに気がつくのではないでしょうか。自分のいのちというのは、数え切れないご先祖の方々がこの世に人間として生きておられたことの証であり、その無数とも言えるいのちに我が身はもとづき、この世代を受け継いでいるのです。

また、今の自分のいのちを支えているのは、身近な人々をはじめまわりにある無数のいのち、そして水や空気、光など自分を取り巻く環境のありとあらゆるもののおかげでもあります。言い換えれば、私たち一人一人のいのちは皆、無量なるものから生きることを願われた「いのち」なのです。

目には見えない無数のいのちを「無量寿」と言い、いのちを支える無数のはたらきかけを「無量光」と呼びます。「無量寿」も「無量光」も語源は、それぞれ「アミターユス」「アミターバ」というサンスクリット語です。阿弥陀佛のアミダとは、計り知れないという意味の無量（アミタ）に由来しているのです。

阿弥陀佛は、生まれたときから今のこの瞬間に至るまで片時も離れずに「お前はお前でよい、しっかり生きてくれよ！」と、この私のことを願っていてくださったのであり、今現在もこれからも途切れることなく願っていてくださるということです。

自分のいのち自分の人生は、世界中の誰にも代わりは務まりません。この私にしか歩けない道なのです。ですから、どんな人のいのちも、一人一人どれも尊く素晴らしいものであり、それぞれの苦難の中を生きてこそ「いのち」が輝くのです。

無量なるいのちの佛である阿弥陀さまから、こんな私も願われていることをしっかりと心に留め、そのご恩に感謝して自分のいのちの使い道を考えてまいりたいものです。 合掌

2 「不思議」を感じ、「あたりまえ」とは言わない (2014/7/01)

日本にはたくさんの仏教宗派があり、読むお経は宗派によって違います。ところがそのお経を読むときに心構えとして唱えるとても短い偈文がありますが、この偈文だけはどの宗派も同じです。その偈文の内容は

「今般、この上なく深く妙なるみ教えに接することができました。この機会を逃すことなく、み仏の真実の教えを私は戴きます」という 意味です。

「この上なく深く妙なるみ教え」とは、お釈迦さまの説かれた教えのことです。

お釈迦さまは何を説かれたか、というと「真理の法則」を説かれました。

「真理の法則」とは「宇宙の法則」「天地(あめつち)の法則」とも言えます。私どもの身の回りにあるごく自然の、つまり、生きものであったり、天体であったり、人の心であったり。それらはあるおたがいの関係性の中で存在しあっている、というものです。その関係性は簡単に口では説明できませんから、古来、物のあり方を「不思議」と表現してきました。

良寛さんの詩に、

花、無心にして蝶を招き、 蝶、無心にして花を尋ぬ

花、開く時蝶来たり 蝶来たる時花開く

知らずして帝則に従う （一部略）

というのがあります。花と蝶が打ち合わせをしたわけではないのに、絶妙のタイミングでこの世で出あい、そして、つながり合っているのです。良寛さんは花と蝶のおたがいの関係を「不思議」と戴き、「帝則にしたがう」と呼んでいるのです。

花と蝶の出あいとそのつながりに宇宙の不思議を見る、そのセンスが私たちの生きる力になると思います。ひとつの事象を深く観察していくなかに、宇宙の「不思議」を感じていく、「あたりまえ」とは言わない、その心のありようが、ひいては、自分自身の存在が「不思議」といただくことができ、そのことが、己れを大切にしたり、目の前の人を大切にしていこう、という心を作っていきます。身の回りの物のあり方を「あたりまえ」とは言わず、「不思議」といただく生き方は、人をより深く人たらしめるのです。

3 道林禅師と白居易の問答 (2014/8/01)

中国は唐の時代に白居易（はくきょい。白楽天（はくらくてん）とも／772-846）という人がいました。その白居易が杭州の地方長官として赴任した時、その土地では名高い道林（どうりん）禅師

(741 － 824)を訪ねました。この道林禅師は木の上に鳥の窠(す)のようなものをこしらえ、そこで坐禅をする奇行があったので世間では彼のことを鳥窠(ちょうか)というあだ名でよんでいました。

この白居易と道林禅師の最初の出会いのやり取りが伝わっています。

白居易は寺の松の木の上で座禅をしている道林禅師を見上げて、なかば驚いてこう言い出します。

白居易　：そんな高い所での生活、危ないぞ

道林禅師：危ないのはそっちの方だ

白居易　：木の上より地上の方が安全だと思うが、なぜ地上が危ないのか？

道林禅師：仏の教えを知らず、心の定まらぬ者は、地上にいても危ない

白居易　：その仏の教えとは何か？

道林禅師：諸悪莫作　衆善奉行　自浄其意　是諸仏教。つまり、もろもろの悪はなさず、
もろもろの善を行い、みずからその意をきよめる、これが諸の仏の教えだ

白居易　：そんなことは三才の子どもでも言うことではないか

道林禅師：　三才の子どもでも言うというが、八十才の老翁でも行うことは難しいぞ

これを聞いた白居易は実にその通り、と了解して拝謝した、というのです。

ここで面白いのは、白居易の「木の上より地上の方が安全だと思うが、なぜ地上が危ないのか？」というごく当たり前の質問に対し、道林禅師が「仏の教えを知らず、心の定まらぬ者は、地上にいても危ない」と答えたところです。

明日のいのちもわからない私どもであるのに、そのことを真剣に考えないでいると、いざというときに足をすくわれてしまう。つまり地上は安全だ、と高をくくって安逸な生活を送っていると、いつ足をすくわれるかわからない、その方が危ない生活だぞ、と言っています。いまのあいだ、元気なあいだに心の修養をしておけ、というお話です。

その修養の内容は何か、というと、よいことをせよ、悪いことをするな、自分の心を清らかにせよ、それが仏たちの教えだ、と、これもシンプルに答えています。

もっと言うと、人は死ぬものだが、どう死ぬか、ということは生きている間、考えられる間にしっかり考えておきなさい、そのために、先ずは、よいことをして悪いことはしないようにし、いつも自分の心を清らかにしておくよう努力しなさい、と教えられたのです。

書家の相田みつをさんのことばに「生きているうち　働けるうち　日の暮れぬうち」というのがあります。できる時にするべきことをやっておかねば、いつ足をすくわれるかわかりません。今をきちっと生きていくことが大事です。

4　家庭は心と心が触れあうところ (2014/9/01)

「家庭」ということばを聞いて、あなたは何を思い浮かべますか。

あるお坊さんの書かれた文に、こんなものがありました。

「家はあるが、家庭はない。時間はあるが、ゆとりがない。楽しみはあるが、喜びがない」

いかがでしょう。いろいろと考えさせられますね。

では家と家庭には、どんな違いがあるのでしょう。

「家」とは、朝出て行って夜には帰ってくる、ご飯を食べて寝るところです。でもそれだけで、他との関わりを持たなくても済むところです。

一方の「家庭」は、ホームと表現できるのではないでしょうか。ホームという言葉からは、アットホームやスイートホームなど、人と人との関わりの中にある温もりが伝わってきます。

ところが、現代の私たちの身の回りを見渡すとどうでしょう。

情報技術の発達により、人と会わなくても電話で用が済み、メールなら声で会話する必要もないかもしれません。

そのうち、人との関わりを煩わしく感じるようになり、独りだったらどんなに楽だろうと考えることもあるでしょう。

そんな考えで暮らしていたとしたら、人と遇っても「こんにちは」などの一声を掛けることもないのでしょうね。

ちょっとしたひと言でお互いの心も開かれるのに、残念です。

煩わしいこと、よく考えてみるとその殆どが人と関わることなのですが、私たちは日頃の忙しい毎日に、ついついそのことを忘れがちです。

でも、人はひとりでは生きられないのです。このことは、是非覚えておいていただきたいのです。

仏教では、人はひとりでは生きていくことができない、だからこそ人とのつながり、関わりの中で生きているのだと仏様が私たちに教えてくださっているのです。

多くの力に支えられて毎日を暮らしている私たち、そのことに気付くだけでも、煩わしさが喜びに変わってくるのではないでしょうか。

5　正しいということ (2014/10/01)

「あなたは正しいことをしていますか？」と問われると、「少なくとも間違ったことはしていない」と思うでしょう。この世は正しい人ばかり。正しい人ばかりの国では誰も「すいません」なんて謝りません。だって間違ったことはしていないのですから。

「正しいこと」ってなんでしょう。国の数だけ正義があって戦争が起こり、人の数だけ正義があって喧嘩は絶えません。

お釈迦様は苦しみから抜け出す方法として「八正道」を説かれています。

一．正見（しょうけん）……　正しく見ること
二．正思惟（しょうしゆい）……　正しく考ること
三．正語（しょうご）……　正しい言葉を話すこと
四．正業（しょうごう）……　正しく行うこと
五．正命（しょうみょう）……　正しい生活をすること
六．正精進（しょうしょうじん）……　正しく努力すること
七．正念（しょうねん）……　正しい理解をすること
八．正定（しょうじょう）……　正しく心をしずめること

これを最初の問いに当てはめると、誰もが正しいことをしているのですから誰もが苦しみから自由になっているはずです。でもそうはできていません。お釈迦様が「正しく」と言われたのは「あなたが思っている正しいということを本当に正しいのですか？見直しなさい」ということです。私の間違いに気づく。これが「正しこと」への第一歩です。

草にすわる
わたしの　まちがひだつた
わたしのまちがひだつた
こうして　草にすわれば　それがわかる
（八木重吉）

6　憎しみを超えて (2015/1/01)

「真に恨み心はいかなる術を持っても、恨みを懐くその日まで人の世には止みがたし。
恨みなきによってのみ、恨みはついに消ゆるべし。此はかわらざる真理なり」

これは法句経に説かれた詞華の一節です。当たり前のことのように思えますが、言い換えればこの恨みを「消す」という行為がいかに困難であるかという事実を再認させられる経説でもあります。

新聞を広げてみればわかるように、殺傷事件から国家同士の紛争まで……。恨みによって人を傷つける事例は時代を問わず枚挙に暇がありません。それこそ事件にはならなくとも、「あいつは気に食わない」と疎ましく感じたり、「ふざけるな！」と口論になってしまうことはだれしも経験があることでしょう。しかし、私たちは世捨て人にでもならない限り、多くの人たちと関わり合いを持ち、過ごしてゆかねばなりません。人との関わり合いは他の価値観を知ると共に自己の考え方を押し広げ、人間性を豊かにしてくれる存在でありますが、時と場合によっては不安や憎しみの対象、そして諍いを生み出す原因ともなります。人はこの二律背反の条理を背負って生きてゆく存在――恨みは恨みを、憎しみには憎しみしか産み出さないと理屈ではわかっていても、恨まずにはいられないという人の性（さが）、つまり感情があります。しかし、この感情にすべてを任せてしまえば、相手も自分も永久に苦しんでしまうという現実しかありません。

憎しみは人である限り、生起する自然な感情ではあります。但し、辛くとも忍び、耐え、乗り越えてゆくことができるのもまた人なのです。

7　仏も衆生も おや子のごとく なるゆへに 親縁となづく (2015/2/01)

親というものは、有り難いものです。親という漢字にこんな説があります。

「親というものは、子どもが遠くへ行っていると、帰ってくるまで心配で、『まだか、まだか』と、子どもの帰りを待っています。もう待ちきれずに、表へ出て、高い木の上に立って子どもの帰りを見てくださる」。

今から30数年前のことです。お隣に、春江さんというお母さんがおられました。「恭一」という息子さんがいました。3月初めのころの寒い日でした。私は、いつもより早めの6時過ぎに家に帰りました。

そうしたら春江さんが、うす暗くなった家の前の道で立っておられました。春江さんは、前年の秋に胃ガンを手術されたばかりでしたので、「こんな寒いのに・・」と私は不思議に思いました。そのことを母に話しましたら、「お前はいつも帰りが遅いから知らないが、毎日立ってみえるよ」という言葉が、母から返ってきました。「どうして？」と聞きました。「恭ちゃんの帰りを待ってみえるんだよ。何度も出たり入ったりして。親というものは、子どもの姿を見るまで心配なものなのだよ」と。

それから一週間ぐらいして、また、春江さんが立っておられました。丁度その時、恭ちゃんが帰ってきました。春江さんは、家の前で出迎えられるのではなく、恭ちゃんの単車のヘッドライトとエンジンの音を確認すると、家の中へ入っていってしまわれました。私は「ああ、これが母親かあ。ありがたいなあ」と胸に熱いものを感じました。私は、はっと気がつきました。春江さんが、毎日、恭ちゃんを待って外に出ておられることを、母が見ているということは、母もまた、私を待っていてくれたのだということを・・・。

この恭ちゃんのお母さんの春江さんは、その年の秋にお浄土へ旅立たれました。春江さんにとって、自分の病気、身体よりも、子どもの無事、子どもの成長が第一であったのです。いくら子どもが大きくなっても、親にとっては、子どもは子どもです。まさに、『はえば立て　立てば歩めの　親心　わが身につもる　老いは忘れて』です。しかし、私たちは、なかなか深い愛情に気づかないことも多いのではないでしょうか。

「仏も衆生も　おや子のごとく　なるゆへに　親縁となづく」という法然上人の法語の通り、お父さんやお母さんの愛につつまれているように、「今の私の生活が、すでに阿弥陀佛の大慈悲に包まれている。すでに救いの中にある」のです。

8 「しあわせノート」(2015/3/01)

最近、ある方の勧めで「しあわせノート」と呼ばれるノートを記しております。どのようなノートかと言いますと、一日３つ、ささやかでも良いから「しあわせだな、よかったなあ、心が温かくなったなあ」と感じた物事を忘れないうちに書き留めておくだけのものです。掛けていただいたやさしい言葉や電車内で席を譲る人の姿、地平線に沈んでいく真っ赤な太陽、食いしん坊の方はおやつの時間に食べたお菓子でもよろしいのでしょう。

しかしながら、いざ「しあわせ」を探そうと思うとなかなか見つからないものです。なぜでしょうか？

「しあわせ」を見つけるためには、今まで心に留めていなかった様なこと、当たり前だと正面から向き合わなかったものまで、余程注意深く探していかなければ、この３つのハードルを越えることはなかなかできません。

人は自分に都合の良いことだけを後生大事に覚えているものです。小さな親切や、さりげない励ましはなかったかのように、次々と忘れていきます。そんなささやかな喜びに目を向けていくのが、この「しあわせノート」の神髄であります。

以前、ＮＨＫラジオで『心美人になる日本語』という番組を担当されていた作家の山下景子さんは、毎晩、寝床で「ありがとう」と言うことを習慣にされているそうです。誰にという訳ではなく、その日出逢った人に、その日の出来事に、その日見た光景に、その日の全てに感謝しての「ありがとう」なのだそうです。なぜ、そのようなことをしているのかと言うと、自分が死ぬ時にお世話になった方や、近しい人たちに笑顔で「ありがとう」と言いたいから、その日のために練習をしているのだそうです。

ずば抜けた才能を持つ芸術家であっても、生まれながらに身体能力に恵まれたスポーツ選手であっても、日々の練習、鍛錬を怠っていれば、いずれ一流どころか芸術家生命も選手生命をも失ってしまうかもしれません。私たちの「しあわせ」を感ずる心も感謝の心も同じです。これらを毎日毎日心掛けて練習し、磨いていかなければ、肝心要のその瞬間に「しあわせ」と感ずることができなかったり、「ありがとう」の言葉がでてこなかったりしてしまいます。

このささやかな行いの積み重ねが私たちの心を清らかにし、内よりその人を輝かせていくのです。

9 「親より先に死ぬのは親不孝だよ」と言われたら？ (2015/4/01)

ある日の夕食の時、８５才の母親が

「あんたは、長生きをしないかんよ。親より先に死んだら親不孝だからね」

と60才の息子に言いました。息子は思わず、

「そんなことは分からんよ。そんなことを言ったって分からんだろう」

と答えました。さて、みなさんだったらどう返事しますか？

みなさんがよくご存じの良寛さんは、ある時、村の庄屋さんから「縁起のいい言葉を書いてほしいのです。正月に床の間に掛けますから」と頼まれました。そこで、『親死に、子死に、孫死ぬ』と書いて渡したところ、庄屋さんは「正月に掛けるのに、死ぬなんて縁起の悪いことを書くのはけしからん」と言って怒りました。しかし、良寛さんは笑って答えました。

「それでは『孫死に、子死に、親死ぬ』の逆縁だったらどうだね？これこそ不幸で縁起の悪いことだろう。『親死に、子死に、孫死ぬ』の順縁は、幸せな縁起の良い言葉じゃないか。しかし、なかなかそうはいかないのが人の寿命というものだ。だからこそ、今生きていること、今の命や家族を大切にした生き方をしなければいけないのだよ」。

庄屋さんはそれを聞いて、毎年正月の床の間に掛け、命や家族を大切にした生き方を心掛けたそうです。

どの人にも平等に、そして、必ず迎えること、それは「死」です。若い人は「死」をまだまだ先の事として忘れ、年老いた人も「死」をまだまだ先の事と考えないようにして、日々を暮らしています。しかし、「死」は一息、一瞬の間に来ると言われています。「死」を正面から受け止めた時、「生（命）」の有難いことを受け止めた、生き方を本当に考えることが出来ると思います。

冒頭の母親の言葉は、どの親にもあてはまる子を思う親の願い、子を思う親の気持ちですが、子

どもには守ることを約束できない願いです。でも、良寛さんの言葉を聞くと、「命」と「生き方」を改めて考えさせる阿弥陀仏様からの言葉に思えます。

10　仏さまのねがい：世の中は平和で穏やかでありますように（上）(2015/5/01)

『仏説無量寿経』というお経の中に「天下和順　日月清明」で始まる有名な聖句があります。今回は 2 回にわたってご紹介いたします。まずは今回、前半の句です。

天下和順（てんげわじゅん）　日月清明（にちがつしょうみょう）　風雨以時（ふうういじ）　災厲不起（さいれいふき）

「世の中は平和で、やさしく穏やかでありますように。太陽や月は、明るく輝き、風や雨も時を得て程よく吹いたり降ったりし、天災や伝染病なども起こらないように」と仏前に願うことばです。

このお経には「この娑婆世界は、悪が多く、おのずから善がそなわることはありません。苦しみながら貪り求めて、お互いに偽り欺きあって生きています。しかし仏の教えが行き渡ることによって、そこでは天災も伝染病も起こらなくなりました」と説かれています。

今年は阪神大震災発生から丸 20 年、そして 3 月 11 日は東日本大震災から 4 周年でした。3 月 11 日には政府主催の東日本大震災追悼式が東京で開催されました。その中で遺族代表として発表した菅原彩加（すがわらさやか）さんの言葉も印象的でした。

あの日、中学校の卒業式が終わり家に帰ると大きな地震が起き、津波が一瞬にして私たち家族5人をのみ込みました。瓦礫の下で動けなくなった母を見つけ、瓦礫をよけようと頑張りましたが、私一人にはどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母のことを助けたいけれど、ここにいたら私も流されて死んでしまう。「行かないで」という母に私は「ありがとう、大好きだよ」と伝え、近くにあった小学校へと泳いで渡り、一夜を明かしました。

母親をおいて逃げなければならなかった彩加（さやか）さんの苦しみに思いをはせるとき、言葉がありません。そして彼女はこう続けたのでした。

*「被災した方々の心から震災の悲しみが消えることは無いと思います。しかし前向きに頑張って生きていくことこそが、亡くなった家族への恩返しだと思うとともに、私のあいさつでちょっと頑張ろうかなと思ってくれる人がいたらうれしいです」*と。

大きな苦しみを受け入れ、そして乗り越えようとする人々のことばを聞くとき、阿弥陀さまは世界中の人々を照らし続けているのだ、と私たちは受け止めると同時に、大自然の大きな恵みの中でこの命をいただいているのだ、阿弥陀さまの願いがここにあるのだと気付かせていただくことであります。

おたがい、一人ひとりの毎日の生活の中にある浄土を、見つけていきたいものです。

11　仏さまのねがい：世の中は平和で穏やかでありますように（下）(2015/6/01)

『仏説無量寿経』というお経の中に「天下和順　日月清明」で始まる有名な聖句について 2 回にわたってご紹介しています。今回は後半の句です。

国豊民安（こくぶみんあん）　兵戈無用（ひょうがむゆう）　崇徳興仁（すうとくこうにん）　務修禮讓（むしゅらいじょう）

「国は豊かで国民は安穏で、武力も武器も必要なく、善い行いを尊び、思いやりの心で、礼儀正しく、譲り合いの心がこの世に行き渡りますように」と仏前に願うことばです。

お経では「この娑婆世界では、身も心も疲れ果てて、苦を飲み毒を食べているようなものです。あわただしくして、休息することもありません。しかし、仏法がきちんと伝わっているところでは、武力も武器も必要がなくなりました」と説かれています。

法然上人がまだ勢至丸と呼ばれていた 9 歳の時、父・時国は夜討ちで命を落とします。その時の遺言が「勢至丸、よく聞け。お前が仇を討てば、次はお前が狙われる。仇討は尽きることが無い。お前は一刻も早く出家して私の菩提を弔ってくれ。自分の解脱を求めるのだ」でした。

『法句経』にも「怨みは怨みによって果たされず、忍を行じてのみ、よく怨みを解くことを得る」とあります。

この 1 月に過激組織 IS によって殺害された後藤健二さんのお母さんは 「今はただ、悲しみ、悲しみで言葉が見つかりません。しかしこのことが憎悪の連鎖になってはなりません。戦争と貧困から子どもたちの命を救いたいとの健二の遺志を引き継いで下さい」 と言っておられます。

ユネスコ憲章の前文にも「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とあります。このように法然上人の父親の言葉、また後藤健二さんの母親の言葉なども仏法が伝わるところではないでしょうか。

これらの言葉を聞くにつけ、阿弥陀さまは世界中の人々を照らし続けているのだ、と私たちは受け止めさせていただくのであります。言いかえれば、阿弥陀さまの願いが届いているのだ、と気付かせていただく瞬間です。

「兵戈無用」という言葉は、私自身が仏法を聞き、心穏やかに、暴力を用いない、平和を願う生き方をしていくことの大切さを言っているのではないでしょうか。その心が広がっていくことによってこの世が、武力も兵器も不必要になると信じています。

12　青色青光　黄色黄光 (2015/7/01)

『阿弥陀経』というお経の中に「青色青光（しょうしきしょうこう）、黄色黄光（おうしきおうこう）、赤色赤光（しゃくしきしゃっこう）、白色白光（びゃくしきびゃっこう）」という一節があります。「極楽の池の中には、車輪ほどもあるような大きな蓮の華が咲いている。そして、青色の花からは青の光が、黄色の花からは黄の光が、赤色の花からは赤の光が、白色の花からは白の光が放たれている。それらは、いずれも美しく香りも清らかである」と。浄土に咲く蓮の花のありさまを語ったものです。

童謡『ぞうさん』は、「ぞうさん、ぞうさん、お鼻が長いのね」で始まります。　みんなに「うらやましい」とも、「みっともないぞ」といわれているようにも受け取れます。しかし、ぞうさんは「そうよ、母さんも長いのよ」と自慢げに答えています。2 番では「あのね、母さんが好きなのよ」とこちらも得意げです。「母さんだってそうなんだよ」「私、母さん大好き」と「みんなと違うこと」をむしろ誇りに思っています。老若男女、賢者も愚者も、五体満足な者も不満足な者も、人種が違っても、いかなる者であろうとも、みんなそのままですばらしいのです。

金子みすゞさんの詩『わたしと小鳥とすずと』のように「みんなちがって、みんないい」のです。「青色青光、黄色黄光、・・・」は、みすゞさんの詩のように、人間だけじゃない、小鳥も鈴も、この世の全てのものが、それぞれの色を持ち、光り輝いているということです。

さらに、一人ひとり、いろいろな色を持っていますが、その色が合わさると別の色ができます。「赤と青色を混ぜたら紫」「青と黄色を混ぜたら緑」。別の色になるためには、青は青、黄は黄、赤は赤でなくてはなりません。人と人が出会うたびに、新しい色がこの宇宙に誕生しているのです。私たちは、すべてのものとつながり合って、共に生きるものであることに目覚めることが大切です。

だから、この極楽に咲く蓮の花のありさまを語った「青色青光、黄色黄光、・・・」という言葉は、お互い傷つけ合うのではなく、助け合って生きることが、自分らしく光り輝いて生きる道なのだと教えているのです。

　青い花は青い花でいい。そして、自分は自分のままでいい。自分の花を咲かせればいい、自分の色で・・・。

仏さまは、そんな私を、ちゃんと見ていてくださる。あたたかく、あたりまえに・・・。

13 「はたらき」となって (2015/8/01)

あるご夫婦が先日、本堂に来られました。

五〇代中ごろのそのご夫婦は、二〇数年前に流産をした赤ちゃんの、お経を上げて欲しいということでした。

流産の赤ちゃんですので、平成〇年〇月〇日寂、〇〇〇〇氏（お父さんのお名前）の水子の精霊と、読経しご回向いたしました。

死別されたというのは、もちろん悲しい事ですし、そのご夫婦にとっては、何年経っても、その事実をきれいさっぱりと忘れて乗り越えた、という事にはならないと思います。何十年たとうが、「やっぱり悲しい」と思っておられるでしょう。

読経中に、お焼香をしてもらうために、「どうぞお焼香して下さい」と言いながら振り返ると、そのご夫婦は、合掌の姿勢を取っておられました。

読経終了後、今度はお説教をしようと再び振り返りますと、また、そのご夫婦は合掌をされていました。たぶん、読経中の三〇分くらいを、ずーっと合掌をされていらっしゃったんですね。これ、簡単

なようで、慣れていないと、中々できないんです。私はそのご夫婦の合掌の姿に、とても真摯なものを感じました。そこで私は思わず「ありがとうございます」と挨拶をいたしました。

「善知識（ぜんちしき）」という言葉があります。私たちを仏の教えに導く人の事ですが、これは人に限りませんね。色々な出来事も、私たちにとって「善知識」になることがあります。

そのご夫婦は、赤ちゃんの死という悲しみを、その悲しみのままに受け止め、今現に本堂のご本尊さまの前で手を合わせてらっしゃる。その赤ちゃんは、決して、死して終わるのではなく、そのご夫婦にも、私にも、ご本尊さまの前で手を合わさせるという「はたらき」となって表れている。

その赤ちゃんが、今は善知識となって、そのご夫婦にも私にもはたらいているんですね。

そんな有り難い時間を過ごさせていただきました。お浄土で、必ず、かならず、会えますね。

14　彼岸花におもう (2015/09/01)

秋になると「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」と呼ばれる花が土手や田んぼの畦などに咲きだします。お彼岸にあわせるかのようにして咲くので別名「彼岸花」さもいいます。

この曼珠沙華、花が終わって初冬になると小さなカミソリのような葉が芽を出し、そのうちモコモコと群生した状態になります。そして年が明けて春が過ぎると、その群生していた葉は枯れて全部消えてなくなってしまいます。そして、秋の彼岸前になると何にもないところから乳白色の小さな茎だけが芽を出し、大きくなってあの朱色の輪状の花を咲かせるのです。

彼岸花の花は、母とも呼ぶべき自分を育てた葉の群生を見ないで大きくなります。ですから、人々はこの花のことを「親知らず　子知らずの花」と呼び、「親知らず」という異名をとりました。（ちなみに、韓国ではこの花のことを、花と葉が顔を合わせることがないので「葉は花を思い、花は葉を思う」という意味で「相思華（そうしか）」と呼ぶのだそうです。）

さて、世の中では地震、津波、事故などで若い親が子どもを残して亡くなってしまい、祖父母が子どもの面倒をみて育てている、ということがよくあります。そんな時、この「彼岸花」の「親知らず」の話を思い出します。この世ではもう二度と見（まみ）えることのない親子です。でも、この彼岸花のように生きていってほしい、と思うのです。

子どものあなたよ、

あなたには

育ててくれた親のおもい、ねがいがいっぱい

あなたの　体の中につまっているのだ

だからそれを栄養として大きくなっていくんだ。

と。

つまり、あなたと亡くなったお父さんやお母さんのいのちは永遠につながっているのだ、そういう意

味では、韓国の「相思華（そうしか）」という呼びかたはいいですね。「葉は花を思い、花は葉を思う」をそのまま置き換えて「亡き親は子を思い、子は亡き親をずうっと思う」という関係になりますから。

15　パンタカのお話（2015/10/01）

お釈迦さまの十大弟子に、周利槃陀伽（周利槃特、梵語ではチューラ・パンタカ）という方がおられます。周利槃陀伽では読みにくいですからパンタカと呼ぶことにいたします。

パンタカは兄について仏門に入りましたが、生来物覚えが悪く仏典の一詩句を覚えるのに 4 カ月もかかったそうです。このため、修行僧仲間から愚か者とみられていたようです。

そんな弟に愛想をつかした兄は、パンタカにお寺を去るように言います。

すっかりしょげてしまったパンタカは、自分の愚かさを嘆く日々を過ごしておりました。ある日、道を歩んでいると、意地悪な子供たちがその姿を見かけて、からかってやろうと話しかけてきました

「やぁい、パンタカ! リンゴ 3 つとみかん 2 つ　合わせていくつだい?」

「ええっと、ううん、3 つと 2 つで…、ううん…」

「パンタカはバカだなぁ」

ちゃんと答えられないパンタカが道端で泣いていると、ちょうどお釈迦さまが通りかかられました。

「パンタカよ、なぜ泣いているんだい?」

「自分の愚かさに呆れて泣いているのです」

そこで、お釈迦さまはパンタカに 1 本のホウキを渡し、次のように言われました。

「パンタカよ、これから毎日『塵を払い垢を除かん』といいながら、掃除をしなさい」

パンタカはお釈迦さまのおっしゃる通り、来る日も来る日も、片時もホウキを離すことなく『塵を払い垢を除かん』と唱えながら一心に掃除をし続けました。そしてある日、ホウキを払ったときにハッと気がつきました。「この言葉は、心の迷いを掃き清めて取り除けとのみ教えだったのだ」と。そうしてパンタカは〝説法第一〟のお坊さんになられました。

このお話の塵や垢とは煩悩を指しており、お釈迦さまの大切な教えが含まれています。

第一に「慢心の戒め」。自分の愚かさを知るものは愚者ではない。愚かさを知らず智慧があると思いこんでいる者がほんとうの愚者である。

第二に「無分別の心」。心に塵垢ある者は分別にとらわれて外見で他人をあざ笑ったり、いじめたりする。智慧を得た者は、人にはそれぞれ生まれたことに意味があることを知り、物事をすべて平等に観る。

第三に「精進努力」。智慧を得る道は、優劣勝敗に一喜一憂するのではなく、自分自身と向き合い、自分自身を見つめ、自分自身を高める努力を続けることにある。

短いお話ですが、深い意味を含んだお話です。

16　二度とない人生だから (2015/11/01)

私のお寺は田舎にあるお寺で、いわゆる過疎地にあります。お檀家さんの中には、実家に年老いた両親を残し、仕事の関係で都市部で暮らしておられる方もたくさんいます。

そんな檀家さんの中に、広島市内に住んでおられるお檀家さんがいらっしゃいました。夫婦と男の子と女の子の4人家族で暮らしておられました。女の子が平成 15 年 4 月 1 日にガンで亡くなりました。17 歳でした。お父さんも、お母さんも、お兄ちゃんも涙が枯れるほど泣き悲しまれました。それ以来 12 年間、お母さんはわが子の遺骨を近くに置き、実家に帰るときも一緒です。「この子は、私がお墓に入るときも一緒です」とお母さんは仰います。

女の子の部屋も机もまだ当時のまま置いてあるそうです。その女の子の机のデスクマットの下に1枚の紙があり、坂村真民さんの「二度とない人生だから」という詩が書いてあるそうです。「ガンを発病する前からありました」とお母さんは仰っていました。

17 歳の女の子はどんな気持ちで、この詩を受け取っていたのでしょうか。健康な時、発病の時、体調が悪いとき、治療が始まったとき、そして・・・。 詩をご紹介します。

二度とない人生だから
一輪の花にも無限の愛を注いでいこう
一羽の鳥の声にも無心の耳をかたむけていこう
二度とない人生だから
まず一番身近な人たちにできるだけのことをしよう
貧しいけれど、心豊かに接してゆこう
二度とない人生だから
つゆくさの露にもめぐり合いの不思議を思い
足をとどめてみつめていこう

坂村真民さんは仏教精神を基調とし、詩作に打ち込んでこられた方です。私はこの詩には仏教でいう慈悲、布施、そして衆縁所生が唱われていると思うのです。わが派の派祖・証空上人は「衆生の重んずるところ、命に過ぎたるはなし」と述べられています。人がもっとも大切にしなければならないもの、命をおいて他にない、といわれるのです。この一日は大切にすべき一日です。この一瞬の命は尊ぶべき命です。命は一つ、二度とない人生だから、この一日を大切に生きねばなりません。この女の子はこの詩を通して、自分の状況を悲嘆することなく命に真摯に向き合っていたのに違いないのです。

私はこのお話を思い出すたびに、「倶会一処」という言葉を思い出します。女の子もそのお母さんも意識することなく、仏の教えの道に踏み出されているのです。この現実世界を離れたとき、お二人

はお浄土で再会されると信じています。

17 「願いごと」「願」について (2016/2/01)

新年になるとわれわれはお寺やお宮さんに詣でて、新春を寿ぎながら願いごとをします。寒さの厳しい中、晴れ着を着た老若男女が、仏前、神前で拝む姿は厳かで、どこから見てもお正月の穏やかな景色です。

そこで今回は、「願いごと」「願（がん）」ということについて考えてみましょう。

「願いごと」は仏教の教えの柱の一つです。仏さまが、仏さまになる前の位のことを「菩薩（ぼさつ）」といいますが、そのときに私どもを救おうと建ててくださるのが「願」なのです。その「願」を完成させるための修行こそが、私どもが救われていく道でもあります。その菩薩の「願」のなかで代表的なのは「この世界の生きとし生けるものが一人残らず救われなかったら、私は仏にならない」という「願」です。

でもこの「願」、よく考えてみるとすこし変ですね。生きとし生けるものは次から次へと際限なく生まれてきますから、一人残らず救われる、という状態は永遠に来ない、ということになるでしょう。ということはこの菩薩さま、永遠に仏さまの位に上がれない、ということになります。

そうです、一人残らず救う、ということは不可能ですから、菩薩さまの願は永遠にかなうことがないのです。でも、菩薩さまはその「願」が完成する、しないは度外視して、永遠に修行をし続けるのです。これを仏教では「菩薩行」と申します。

「願い」がかなう、かなわない、にかかわらず、今、こうあってほしい、と自分のことはさておいて、まわりの人たちのしあわせのために「願」をたてる、これが尊いのです。

書家の相田みつをさんのことばに「願を持ちましょう」というのがあります。ちょっと紹介してみましょう。

「願」と「欲」とは根本的に違います。

わずかなお賽銭を挙げて、それも年一回の初詣の時ぐらいで、「家内安全。商売繁盛。お金がいっぱいできますようにー」なんてね。こういうのは個人的・私的な欲望です。それをわたしは否定しません。わたしも同じですから。

しかし、そういう私中心の欲望とはまったく別に、

〇核戦争など　絶対におこりませんようにー

〇世の中が　どうか平和でありますようにー

〇山や海や河、そして土、水、空気、自然が、人間の作る公害でこれ以上よごれませんようにー

と、心から念じたとき、それを「願」といいます。どんな小さな「願」でも心ひそかに持ち続けていると、顔がよくなり、眼の色が深く澄んできます。

と。

自分中心の欲の思いではなく、自然、地球のありようや、すべてのいのちのありかたを考え、生きとし生けるものが平安でありますように、と、広く大きな「願」をもちたいものです。

18 和顔愛語 先意承問 (2016/3/01)

ある日のコンビニ店でのことでした。

女性客が棚の前に立って商品を探していました。私がその女性の後を通りかかった時に、彼女が急に一歩後ろに下がり、運悪く私とぶつかってしまいました。思わず「すみません」という私に、彼女は冷たい視線を向けるだけでした。きっと「失礼ね！気をつけてよ」とでも思ったのでしょう。そんな態度を見た途端、私は「あなたこそ周りを見てから動きなさいよ！」と言いたくなりました。

また、ある日のうどん屋さんでのことでした。

厨房からお盆のうどんを運んできた店員さんは「後ろ通ります！」と声をかけながら、別の店員さんの後ろ背をすり抜けて行きました。忙しさの中のきりりとした声に、私はあのコンビニ店での出来事を思い出しました。

あの日、私が「後ろ通ります」と声をかけていたなら、嫌な思いは避けられたでしょう。それどころか「なんて気が利いた人かしら」と思われていたかもしれません。

『無量寿経』というお経に「和顔愛語、先意承問」と説かれています。「明るい笑顔と愛情のこもった言葉で人々を思いやる心」という意味です。

笑顔・気配り・思いやりは、相手に向けると共に私自身の心をも和らげてくれます。

「先意承問」とは、私たちの思いを先んじて汲み取ってくださる阿弥陀さまのみ心を表した言葉です。阿弥陀さまは、日々の私の頑張り、過ち、不運、喜びを見守っていてくださるのです。

それなのに、私を見ていてくださる阿弥陀さまをふと忘れ、他人への気配りを忘れ、他人の思いを察することを忘れてしまうのが、この私なのです。恥ずかしいことです。

阿弥陀さま、ごめんなさい。

19　物を受くるに心をもってす　法を受くるに体をもってす（2016/4/01）

私どもは物を戴いたり、またこちらからプレゼントをすることがあります。特に日本人にはお中元、お歳暮として物を贈答する習慣があります。

先日、宅配で「冷凍」のシールが張られた中くらいの大きさの荷物が送られてきました。

瀬戸内海のとある町に住んでいる初老ご夫婦からのものです。

送られてきた箱は再利用の箱で、ぎゅうぎゅうに詰めてあり、中身が外に出ないようにビニール紐でぐるぐるに巻かれて梱包されていますが、箱は表面が濡れていて形がいびつになっていました。さっそく抱えてみるとズシリ、と重いのです。台所にもっていって開けてみると、なんと、そこには冷凍したタコが一つ一つ、ビニール袋に小分けしていくつも入っていました。そのタコの隙間に、魚の味噌漬けが、これまた切り身を二つずつ小分け、冷凍したものがたくさん入っていました。そして、各々の袋に紙片が入れてあって味噌漬けの袋には「私の作った味噌漬けです。お口に合うかどうか心配です」「味噌をとって焼いてください。味噌が残るので焦げないようして召し上がってください」「これは夫が海で獲ってきたものです」などと書いてありました。

この海の幸の贈り物を見ながら、ご主人の海での漁の姿や、その釣果を持ち帰って奥さんに誇らしげに見せている様子、それを受けとっていそいそと味噌漬けを作っている様子、箱にぎゅうぎゅう詰めにしてくださるご夫婦の作業の姿、などを思い浮かべながら、また、そうして送ってくださるお気持ちを察していくと、心ほのぼのとなりますし、同時に、もったいないこと、と一人「ありがとうございま

す」とお礼の言葉が出てくるのです。

金子大栄さんという念仏者は「物を受くるに心をもってす　法を受くるに体をもってす」ということを教えてくださっています。

まさに私が遠くにいる初老夫婦から海の幸を戴いて、いちばんに思ったのはこの「物を受くるに心をもってす」ということばでした。

そして、金子先生は、もう一つ大事なことを教えてくださっています。「法を受くるに体をもってす」ということです。

「法を受くる」とは「仏法を受くる」こと、つまり「仏さまのみ教え」に出逢うことです。私どもは生きている以上、つらい、苦しい、生きる力がなくなるときに遭遇します。そんなときに「仏法」という生きる力を戴くのです。生きる力を戴いたのですから、今度はそれを身体全体で受けとり、日日の生活の中でよろこんで生きる、という生き方にシフトしていかねばならない、またそうなるものだ、とお示しくださっているのです。このことについてはまた別の機会にお話しいたしましょう。

20　仏教ボランティア（2016/5/01）

よく仏教ボランティアについての質問を受けます。仏教はボランティアについて、どのように考えるのか、その特徴や、考え方の方向を聞かれることが、多いのです。

そんなとき、『七仏通戒偈』の一句を使って説明しています。

諸悪莫作（もろもろの悪をすることなく）、
衆善奉行（もろもろの善いことを行い）、
自浄其意（自らこころをきよくする ）、
是諸仏教（これが諸仏の教えです）

と言う有名な一句です。

仏教の教えるボランティア活動の基本的な考え方は、ここにあると考えています。

まず①悪を止める→ ②善いことを行う→ ③こころをきよらかにする、という順序に仏教ボランティアの意義があるといえるのです。私は仏典の表現においで、言葉の順序にも思想性が込められていることがあると、思っています。『七仏通誡偈』にも仏さまの意思がある、と思っています。

ボランティア活動は、何か社会的な活動を始めることよりも、社会的な悪を行わないことから始めることが、仏教に近いのです。善行するよりも前に、悪いことをしないようにすることが大事だといえます。

道路に落ちた空き缶拾いをするボランティア清掃活動も必要なことですけれど、私が空き缶をゴミとして道路に捨ててしまわないようにすることが、もっと大切なのです。ゴミさえ捨てなければ、ゴミ拾いをしなくても済むのですから。

また社会にある構造的な悪の仕組みに気づくことが、実は大事なことなのです。社会開発をテーマにする仏教系のＮＧＯでは、最初には貧困や格差、争い用の社会構造の問題点と、その仕組みに組み込まれて、知らず知らずのうちに、関係しあっている私たち自身の課題を学ぶことから、活動が始められています。

ボランティア活動は、わたし自身が悪いことしません、という姿勢から始まります。ここを強調するのが、仏教ボランティアの意義であるといえます。よいことをするボランティア活動をすることもいいし、

このほうが実感もあるし、周囲から褒められたり理解ももらえます。やはり子どもたちには、よい活動をすることがボランティア活動であるということの方が理解しやすいでしょう。だから、しっかりやればいい。それを踏まえた上で「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」という語句の順序に込められた意味を伝えることで、ボランティア活動の意味がますます深くなっていきます。

悪いことをしない、というボランティア活動は、見えにくい活動だから、実感も少ないし、認めてもらいにくい面もあります。でも大切なことだと、子どもたちに伝えています。

21　念仏は幸福の大道なり (2016/6/01)

私たちは毎日おいしいものを食べ、便利で快適な暮らしをしています。しかし、毎日が忙しく何か漠然とした不安感を抱いておられる方も多いのではないでしょうか。子育てや人間関係の悩み、子どもの手が離れてくる頃には両親の病気や介護、そして死を看取るという現実が待っています。やがてその現実は自分の身にもいつの日にか起こってくるのです。この誰にでも起こる人間の苦悩を「生・老・病・死」（四苦）として私たちに示し、解決するための教えを開かれたのがお釈迦さまなのです。今から約二千五百年前のことです。

この四苦の中でも私達がいちばん受け入れ難い苦しみが、人は誰も必ず亡くなって行かねばならないという「死」の苦しみではないでしょうか。宗祖法然上人もお釈迦さまと同じ苦しみを抱かれてお念仏の道へとたどり着かれ、苦悩の解決の為に私たちにお念仏の教えを示されました。

法然上人はご法語に「受け難き人身を受けて、会い難き本願に遭いて、おこしがたき道心をおこして、離れがたき輪廻の里を離れて、生まれ難き浄土に往生せんこと、喜びの中の喜びなり」と示してくださいました。つまり、日常の生活に追われるあまり、私たち人間がなかなか気づかない五つの大事なことがら、

① 身として在るありがたさ、
② 仏の本願に遭うありがたさ、
③ 仏のみ教えに手を合わす心が起きるありがたさ、
④ この世の悩み、苦しみの世界から離れるありがたさ、
⑤ お浄土に往生することのできるありがたさ、

この五つのことがらに気がつけば、本当の生きる喜びが生まれてくる、とおっしゃるのです。法然上人は、人は単に死んで行くのではない、人は死ねば終わりではなく最後は浄土に往生して行くのだ、と示しておられます。

私たちはみないつか亡くなって行く身の上です。しかし、有限の生活を終えたあと、まちがいなく行くべき世界があるのです。人として生まれ、阿弥陀さまの願いに出遇い、お念仏の信仰を起こして、離れることの難しい娑婆世界を離れて浄土である阿弥陀さまの国に往生して行く道、私たちが苦悩を滅し、仏となる道が、既に用意されているのです。なぜならそれが阿弥陀さまの願いだからです。その願いを本願といいます。日々苦悩を抱え苦しんでいる私たちに大丈夫ですよと常に働き掛けてくださっているのです。その阿弥陀さまの働きに感謝して我が体から、口からほとばしり出でる歓びが「南無阿弥陀仏」のお念仏なのです。

一旦お念仏の歓びを頂いた私たちは仏さまのみ教えを暮らしの中に生かして世のため、人のた

めに貢献し、人々と和合して、歓びと感謝の報恩の日ぐらしをさせて頂くのです。
念仏は決して亡くなってからのことでは無く、今日ただ今を幸福に生かしてくれる人生の大道なのです。

22 「忍辱（にんにく）」… 耐える、ということ (2016/07/01)

仏教の教えに六波羅蜜（ろくはらみつ）というのがあります。悟りの境地、心の平安の境地に近づくための 6 つの修行ということです。つまり、仏教的安心の生活をするための生活指標です。この 6 つの生活指標の中の 1 つに「忍辱（にんにく）」というのがあります。これは「耐える」ということです。『鋸喩経（こゆきょう）』というお経に、相手が時を守っていないとしてもこちらは時を守ろう、相手が真実でないといってもこちらは真実を語ろう、相手が乱暴に出てきてもこちらは柔らかい心でいこう、相手が自分本位であってもこちらは思いやりを失わずに接しよう、相手が憎しみの心をもってやってきてもこちらは慈しみの心を忘れず接していこう、と示されてあります。

「相手がどんな悪い態度で出てきても、こちらは怒りや憎しみの心を起こすのではなく、耐えて慈しみの心をもって接していく」という姿勢。そういう姿勢でいると、つまり、相手を思い、真実に忠実であり、利他、慈悲の心で接すると、争いは起こらないし、相手を傷つけないし、また自分の心も悩むことがない、ということであります。

日野原重明さんという 104 歳のお医者さんがおいでになります。この方は日本だけではなく世界中の方々に声をかけて「新老人の会」を作って広げておられます。この新老人の会に 3 つの理念というのがあります。

1. 愛し、愛されること
2. 創めること
3. 耐えること

とくに、この 3 番目の「耐えること」についてのコメントは「耐えることによって、他人の痛みが共感できるから」としています。

私どもが「耐える」ことを生活指標とするのは、結局のところ相手の心に寄り添うことができる、そんな自分になっていくことができるからです。

戦後、日本は経済至上主義でがむしゃらにやってきました。その結果、相手を思い、相手の心に寄り添う、とういう大事な生き方をおろそかにしてきました。ですから、若い人たちにそのことが伝わらなくなってしまいました。これは私ども高齢者の責任ですが。

これから未来のある若い人たちにこそ、この相手に寄り添うという生活指標を行動の中で培い、生きる力としていってもらいたいと思うのです。そうやってほんとうにしあわせな社会をつくっていってほしいのです。

23 今が一番幸せ (2017/2/01)

念仏とは、感謝に溢れることば

母が、口癖のように言っていた言葉があります。
「今が一番幸せ」ということばです。

人生をふりかえれば、幸せと感じた瞬間は、たくさん。あります。結婚したとき、子どもを授かったとき、夢が叶ったとき、苦労が報われたときなど、幸せだなあと感じます。

でも、調子のよくないとき、人生につまずいたときもあります。人生には色々な出来事があり、思いどおりに行かないことも、たくさんあります。そんなときであっても、実は、今が一番幸せなのです。

私たちにとって、表面上では幸不幸があるかもしれません。でも、阿弥陀様のお慈悲に、いつも包まれている私なのですから、いつでも幸せなのです。

「今が一番幸せ」いう言葉には、幸せに二番目や三番目がないということを意味しています。〇〇だったから幸せではなくて、今のこの瞬間一つ一つの幸せの連続であるということです。だから「今が一番幸せ」です。

そんなときに口から出る言葉が、南無阿弥陀仏です。念仏とは、感謝に溢れることばでもあります。

24　感動とは　感じたら　動くこと (2017/3/01)

感謝の言葉を出し惜しみしていけない

相田みつをさんの言葉に、「感動とは　感じたら　動くことだ」があります。

感動というと心の中で感じることかと思っていたら、感じたことを言葉や行動に表すことが感動であると。つまり、感謝の念が沸いたときには、口からありがとうの言葉を出さないといけないということです。

Sさんの体験談です。ご主人が闘病生活をおくって入退院を何度も繰り返していました。最後の入院時に、ご主人もわかっていたのでしょうか、これで自宅にはもう戻れないかもしれないと話をしていたとか。

Sさんは病院に足繁く通って、ご主人の世話をしていました。そんな時でも、Sさんに対してのねぎらいの言葉も感謝も言葉もなかったそうな。昔気質の男性なので、たとえ心の中には感謝の気持ちがあったとしても、それを言葉に表すことができなかったのでしょう。

そんな中、その亭主関白なご主人が、Sさんに対して「ありがとう、よく世話になったなぁ」と、いきなり感謝の言葉を伝えたそうです。

それを聞いたSさんは、震えるほどの嬉しい気持ちになったのです。最後に感謝の言葉を伝えてもらって、ああよかった！

ただ、ここで話が終わったら、どこにでもあるようなことになってしまうのですが、このSさんの本音とも言える言葉を聞いたときに、感謝の言葉を出し惜しみしていけないと感じたのです。

それはSさんが、「ありがとうと言ってもらって、とてもうれしかったです。あの人が最後に言ってくれて、どんなにうれしかったか。でも、どうせ言うなら、もっと早く言ってくれれば、私の気持ちも和んで、もっと大切に出来たかもしれないな」。

やっぱり感じたときに言わないと、伝わってはいきません。

25　健康ってどんな状態をいうのでしょうか (2017/4/01)

こころの健康をかんがえてみましょう

健康ってどんな状態をいうのでしょうか。世界保健機関（WHO）憲章では、健康について「身体的に健康、精神的に健康、そして社会的に健康」と定義しています。それはそのとおりです。しかし、もう一歩踏みこんで「こころの健康」というのがだいじです。もっといえば、病（やまい）をもっている、お金はない、けれど「生（あ）きるよろこびからくるこころの健康」です。日常の生活は大変だけどそれでも、この私は「許されて在（あ）る」「こんな私が拝まれて在（あ）る」と、見えないいのちに見守られていることを喜ぶこころ、それが「こころの健康」です。

星野富弘（ほしの とみひろ）さんという詩人・画家が群馬県におられます。1970 年、大学を卒業して高崎市の中学校に体育教師として新任赴任して早々、体操部の指導中、頸髄損傷をして肩から下が全く動かなくなってしまいます。それでも筆を口にくわえて水彩画、ペン画を描き、詩や随筆を世に出しておられます。星野さんの作品は絵も詩も文章もやさしくて凛としていて、どれもすばらしいものです。

その星野さんの作品の中に、紫色のおだまきの花といっしょに書いた詩があります。

いのちが　一番大切だと　思っていたころ　生きるのが　苦しかった

いのちより大切なものが　あると知った日　生きているのが　嬉しかった

という詩です。

星野さんは身体（からだ）が動きません。ですから、まわりの人たちからたくさん励ましの言葉が寄せられます。それに応えよう、と頑張ると「いのちがいちばん大事」と思ってしまいます。しかし、体・いのちは自分の思いどおりにはなりません。だから苦しいのです。そこで星野さんは気づくのです。こんな体でも神さま、仏さまがそれでいい、それでいい、とおっしゃって下さっている、と（星野さんはクリスチャンですので神さま、ですね）。つまり、不自由な身体のおかげで、こんな私を「それでいい」と認めて下さる「見えない大いなる力」に出逢えたのです。その出逢いを感謝できる自分に目覚めたとき、「生きているのが　嬉しかった」のです。

いま私どもが考えねばならないのは、この「こころの健康」だと思います。

26　食事のときに「いただきます」っていいますか (2017/5/01)

「いただきます」は「いのちをいただきます」の短縮形

食事をはじめるとき、「いたたぎます」っていいますね。

あるとき、友人が思わぬ光景を見た、と私に次のような話をしてくれました。

彼がレストランに行ったときのことです。となりに親子が向かい合って座っていて注文した料理を食べるところでした。小学生の男の子が手を合わせて『いただきます』と言ったのです。行儀のいい子だなぁ、と感心していると、前にいた母親が「ボクねぇ、ここはお金を払ってご飯を食べているのだから『いただきます』は言わなくっていいのよ」といった、というのです。友人は母親の言葉に驚いた、というのです。そして、こういいました。この母親は『いただきます』の心がわかっていない、と。

さて、それでは、なぜ食事のときに「いただきます」っていうのでしょうか。

食事のとき、目の前に並んだ食べ物をよく見ると、みんな生きていたものばかりです。肉や魚はもちろんのこと、米や野菜、果物、みんな、太陽、水、空気、土などのおかげで大きくなったものです。その生き物のいのちをいただいて私のいのちをつないでいます。

お坊さんや修行僧がお寺で食事をするときに、食前のことばに「五観」というのを唱えます。

「目の前の食べ物はどこから来たものか、食の由来を考えよ」「その食物のいのちをいただいて私の身体は保たれる、ということを考えよ」「食べ物のいのちを奪ってまで、この私は生きる価値があるか」「いただくのならこの食べ物を私の体を養う薬と思え」、と唱えるのです。

食べ物をいただく、ということは、生き物のいのちを奪って、そのおかげで私の身体はいのちをつないでいる、ということです。そしてその事実に、手を合わせて感謝することが尊いことなのです。

『いただきます』というあいさつ、その言葉の前に「いのち」ということばを補って、『いのちをいただきます』といえば、中身がわかる、というものです。

27　信仰心(2017/6/01)

今年 1 月 29 日、若い夫婦に女の子が産まれました。家族は、お兄ちゃんを含め 4 人になりました。

実は、4 年前も 4 人でした。しかし、4 年前の 12 月 30 日夜、妹の奏海ちゃんが亡くなりました。もうすぐ 2 歳の誕生日というところでした。年明けお葬式をしました。戒名は、「奏月」とつけました。「月」は、満月から次第に欠けていき、新月には見えなくなってしまいます。月はなくなってしまったように見えるが、また三日月から満月へとよみがえってきます。奏海ちゃんも亡くなって終わりでなく、いつかまた、この世に生まれ変わってくることを願って「奏月」とつけましたという話をしました。

それから、月命日には、夜お参りに行きました。必ず家族 3 人揃ってお参りするためです。お父さんの仕事やお兄ちゃんのサッカーの都合で、早朝になったり、昼になったりすることもありました。新調した小さな仏壇の周りは、おもちゃやお菓子が供えられていました。それに、3 人で折った折り紙も添えられていました。ミニチュアのお雛様や七夕飾りなど、季節を感じるものも飾られていました。まさに仏壇の奏海ちゃんと 4 人の生活をしているようでした。

三回忌を終えた後、「奏海ちゃんを亡くして、悲しい、悔しいでしょうが、今でも 4 人で生活しているように見えますよ。2 年足らずの短い人生であったが、こんなに優しいお父さん、お母さん、お兄ちゃんと一緒に過ごした奏海ちゃんは幸せであったにちがいない」という話をしました。その後も、3 人は一途にお参りをしました。

昨年、3 人がお寺に腹帯を持ってきました。

「赤ちゃんができました。お経をあげてください」。

何と予定日は、奏海ちゃんの誕生日の 1 月 26 日でした。何という偶然でしょうか、なるべくしてなったのでしょうか。お兄ちゃんが言いました。

「和尚さん、絶対生まれ変わりだね」。

「そうだよ。あなたたちが一生懸命お参りしたから、そうに違いない」。

4 年前とは違って、希望と喜びに溢れた年越しになりました。予定日より 3 日遅れ、奏海ちゃんの命日の前日に元気な女の子が誕生しました。

家族が、一心になってお参りしたから、誕生が「よりいっそう大きな喜び、幸せ」になったのではないでしょうか。仏さまの大慈悲に包まれています。

28　受け難き人身を受けて、遇い難き本願に遇いて･･･
法然上人『一紙小消息』(2017/7/01)

生・老・病・死を四苦といい、さらに愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦を加えて八苦といいますが、これは私たちの生きる現実に他なりません。人生を半分に分けると、後半は別れが多い分だけ「苦」もまた切実です。

若い頃は、あれが欲しい、こうなりたいと目標がありました。がむしゃらに努力して、ひとつずつ手に入れていく。叶うとその数を数える。まだまだ、もっとがんばろう。

でも、いつの頃からか、叶わなかった、手に入らなかった方を数えています。人生折り返すと、一度手にしていながらも、失ってしまったものを数えるようになっています。ものばかりではありません、体の衰えも。昨日できていたことが今日できない、今日できていたことが明日できるとはかぎらない。辛くても、泣き叫んでも老いを止めることはできません。元に戻ることもできません。つらさに身を任せれば、不平不満ばかりが口から出てしまう、自分を許せないという愚痴です。人は欲しいものが手に入らないという苦しみよりも、あったものがなくなる、出来ていたことが出来なくなる、失うという苦しみの方が何倍もつらいものです。

愚痴ばかりで、いつしか「ありがとう」が口から出ることも少なくなってしまった。「ありがとう」とは、自分の命を支えてくれるすべての命に対して感謝する言葉です。感謝を忘れるということは、自分の命を見失っているということです。

「ありがとう」にはもう一つ、「許す」という言葉でもあります。「ありがとう」が、この命が自分だけの命ではないことに、いかに多くの命のおかげであるかに気づいたという証の言葉であるのなら、失っていく人生であっても、それが私の人生だと受け入れていれ、許していく言葉でもあります。愚痴を吐いて自分の人生を否定するのではありません。「ありがとう」と頭を下げて自分の人生を許していくのです。

自分を支えてくれるたくさんの命に気付いた時、いくら苦しく辛くとも、自分の人生として受け入れることができた時、「ありがとう」が口から出てくるのです。失った数より、支えてくれる命の多さに気づくことができるのです。

法然上人のお言葉「受け難き人身を受けて、遇い難き本願に遇いて・・・」それは自分の人生を受け入れた時、この身に生まれて良かったという喜びと、それに気づかせてくださった阿弥陀様への感謝を教えてくれます。

29　命の平等（2017/8/01）

「春は黄色から」と言われます。各地のお寺では境内になにがしか花を植えておられますが、私のお寺でも蝋梅、山茱萸の花と黄色から咲き始めて、桜の花。そして黄色の木蓮も咲きました。昨年は五輪しか咲きませんでしたが、今年はたくさん咲いてくれました。一年を通して何かしら花が咲いていればと思い、いろいろな花を植えていますが、冬を耐えて春になると「よくぞ咲いてくれた」と命の尊さに感動を覚えます。

一、今、命あることはありがたい。
二、自分の命が大切なように、他の人にとっても命は尊いものである。
三、自分の命は自分だけのものではない。

人と人との間があってはじめて「人間」となりますが、人と人が出会う時、その間を取りもつのは互

いの地位や職業、財力や容姿ではなく、「命」の視点に立ってお互いを見つめることでなくてはなりません。命があるということにおいて人は平等なのです。もっと広げて、生きとし生けるものすべてが「命」ということにおいて平等なのです。「命」までの想像力を持てるかどうか、それが人間力、人格ということの大きさであるように思います。

一、二、三と分けて書きましたが、これらは別のことではありません。果たして、今自分が生きていることが有り難い、つまり奇跡であると感じられる人がどれだけいるでしょうか。私の命は、まず親の願いによって生まれました。生まれてからは数え切れないほどたくさんの命と関わって生きています。そのどれか一つが欠けても、今の私はありえません。私の命はそれほど多くの命によって支えられ、願われている命です。

その同じ命が他の人にも同様にあるのです。自分の命を見つめれば、他者の命を認めざるを得ません。反対に他者の命を大事に思うなら、自分の命を大事に思うものです。それが平等ということです。

そのために何が必要かというと、「思いやり」。相手の身になって考えるということです。「思いやり」こそ慈悲の根本です。命は「思いやり」によって受け継がれて行くのです。

30　法然上人のお歌（2017/9/01）

法然上人の代表的な歌に、

月影の　いたらぬ里は　なけれども　ながむる人の　こころにぞすむ

というのがあります。

この月影とは、月明かりのことです。こうこうと照らす月明かりです。

いたらぬ里は　なけれども。月の光、とどかない里は、ないのだけれども。里というのは、村落。人里（ひとざと）のことで、それから転じて、俗世間、つまり私たちが住んでいるこの世界という意味にもなります。

月の光とは、阿弥陀如来様の光明、お光りですから、阿弥陀様の光明は、私たちの住むこの世界を照らしていて下さるということです。ただ、ながむる人の　こころにぞすむ。つまりその月の光は、ながめた人にしかわからないように、阿弥陀様の光明は、その光をいただいていることを知った人に、伝わるということです。

この「ながむる」は、ぼんやりと見る意味ではなくて、じっと心を凝らしてみるという意味です。ながむるは、もともと「長い目」という言葉が語源ですから、ふらふらとしないで、阿弥陀様の光明を知ること、つまりそのお慈悲を知ることです。

この歌は、お経にある「光明遍照　十方世界　念仏衆生　摂取不捨」の意味を伝えるものとも言われています。

光明は阿弥陀さまの光明で、あまねく照らします。照らすのは、十方世界　あらゆる世界の念仏衆生、つまり念仏に縁ある人々を照らすのであって、そのすべてをすくい取っていてくださるという意味です。

31　管見（2017/10/01）

「管見（かんけん）」と言う言葉を知っておられる方もあろうかと存じます。文字通り、細い管を通

して見るという意味です。辞書には、おおよそ二通りの意味が書かれており、一つは「視野の狭い見方、考え方」とあり、もう一つは「自分の理解・知識・意見をへりくだっていう場合、使用する言葉」とあります。よくよく考えてみますと、私達はすべて「管見」の中で生きているのではないでしょうか。つまり、今まで生きてきた自分自身の経験や知見というごく限られた細い管から、この世の中をみている。もしくは世の中を見ることが出来ないのではないかということです。

先日、私のお寺で講演会をしました。短歌の芥川賞ともいわれる現代歌人協会賞を歌集『キリンの子』で授賞された歌人の鳥居さんの講演会です。今までに、「セーラー服歌人鳥居」という名前を聞いた方もあるでしょう。鳥居さんのお話を聞いて、「管見」を思い知らされました。鳥居さんは2歳で両親が離婚、母親に育てられるが母が心の病となり、小学校5年生で母親が目の前で自殺、小学校を中退し、児童養護施設での爪を剥がされるなど虐待、ホームレス生活、親戚に殺されそうになり DV シェルターでの生活、短歌を通して、生きる希望を取り戻し、歌を通して生まれて初めて信頼できる大人に出会ったという衝撃的な人生経験を持つ20代の女性です。現代日本の闇を経験された鳥居さんのお話は深く重く、聞く者をして涙なしでは受けとめられませんでした。鳥居さんは「かなしみは希望」とお話しになりました。薄っぺらな人生経験の者が「かなしみは希望」などといっても、全く心に響きませんが、鳥居さんの想像を絶する経験から語られるその言葉は、深いかなしみを知っているからこそ、見える世界があることを感じさせました。

今まで悩み苦しんでいたことが、一転して別の視点を提示することで、苦しみから大きく解き放たれる作用が仏教にはあります。まさに自分の思い悩み苦しんでいたことが、実は管見だった、もっと大きな世界があるんだと実感した時が、救われるということです。あなたは、そのような経験がありますか。お寺に来て先ずは、仏とのご縁を感じることから、はじめませんか。ではまた。

32　無罣礙（むけいげ：こだわりなく平安なこと）(2019/11/01)

どうにもこうにもならないとき、「四苦八苦する」といいます。四苦というのは、生（生まれること）、老（老いること）、病（病気になること）、死（死ぬこと）であります。そして、愛別離苦（あいべつりく：愛する者と別れる苦）、怨憎会苦（おんぞうえく：怨み憎しむ者に会う苦）、求不得苦（ぐふとっく：欲しいものを手に入れることができない苦）、五蘊盛苦（ごうんじょうく：迷いの世界として存在する一切は苦である）の四つを加えて八苦といいますが、その最たるものは、やはり死苦でありましょう。

私も、以前に胃ガンの手術を受けたとき、医師から当初、急を要する思わしくない状況と聞かされ、不安と恐れで何か訳も分からず、一人になるとただ涙がこぼれてきたことを覚えています。

ところで、『般若心経』の一節に、「菩提薩埵は、般若波羅蜜多に依るがゆえに、心に罣礙なし。罣礙なきゆえに、恐怖あることなし。一切の顛倒夢想を遠離して、涅槃を究竟す」とあります。

つまり、われわれ凡夫が、あれこれ思い悩み苦しみ、四苦八苦せねばならないのは、煩悩という障りがあるからで、すべては空であると観ずる般若（はんにゃ：仏の智慧）を完成させることによって無罣礙、すなわち、障り、こだわりが無くなり、心に平安がおとずれるというのです。

しかし、現実、いかに一切皆空、生者必滅は世の定めと知り得ても、我が身が滅するは、辛くて悲しいのです。すべてを、阿弥陀仏に委ね、任せ切ればよいといっても、どこか信じ切れない自分がどうしてもいて、心穏やかに、安心（あんじん）が得られたとはなりません。

そこで、我が宗派の西山（証空）上人は『鎮勧用心（ちんかんようじん）』で次のようにおっしゃっています。

「はげむも悦ばし、正行増進の故に。はげまざるも悦ばし、正因円満の故に。いたずらに機の善悪を論じて仏の強縁（ごうえん）を忘るることなかれ。不信につけてもいよいよ本願を信じ、懈怠（けたい）につけてもますます大悲をあおぐべし」と。

すなわち、「安心のために、智慧を磨くことはよいことであるが、たとえ、それが出来なくても心配することはない。弥陀の救い、本願は間違いない。不信の心がわいても、本願を信ずるようにすればよい。怠け心がわいても、仏の慈悲は授かるものと心得るがよい」というのです。ですから、肩の力を抜き、自力と他力、今の自分の身の丈にあった方法で、無罣礙なる心がいただけるようにすることがいちばんかと思います。

33　悲心（2019/12/01）

次のような仏教童話があります。

昔、ヒマーラヤ山のふもとの竹やぶに、多くの鳥やけだものたちと一羽のオウムがすんでいました。

ある日、火が出て風にあおられて大火となり、鳥やけものたちは逃げ場を失って、鳴きさけぶばかりでした。

すると、オウムは、近くの池に入っては翼を水にひたし、空にかけあがっては、そのしずくを燃えさかる火の上にそそぎかけました。長い間すみかをあたえてくれた竹やぶへ恩返しをし、逃げ場を失ったなかまたちを救うためでした。

これを見た梵天が、オウムに話しかけました。

「おまえの心は健気であるが、この大いなる火を、どうして羽のしずくで消すことができよう」

ところが、オウムは、

「恩返しのためと、なかまの命を救うためにしていることが、できないはずはありません」と言って、火を消すのをやめようとしません。

梵天はオウムの偉大な志にうたれ、力を合わせて、ついに竹やぶの火を消し止めたのでした。

（仏教伝道協会刊『仏教のひみつ』より）

何がこのオウムを無謀とも思われる行為に駆り立てているのでしょうか。それは仏教の説く慈悲の心そのものといえましょう。

「慈悲」は熟語として使うことが一般的ですが、「慈」（マイトリー〈友愛〉・ミトラ〈友〉）は、他者に利益や安楽を与える（与楽）いつくしみを意味する語であり、「悲」（カルナー〈うめき〉）は、他者の苦に同情し、これを抜済しようとする（抜苦）思いやりを表す語であるといわれます。

今ではあまり使われなくなった言葉に、お父さんのことは慈父（じふ）、お母さんのことは悲母（ひも）というのがあります。これらは、それぞれの言葉の特性の違いをとらえての表現ということができます。たとえば、過ちを犯した子どもに対し、慈愛を持って教え諭さとすのが父であるとすれば、泣き苦しむ子と同じように悲しみ、ただ、涙を流し寄り添ってくれる存在、それが母だということです。

オウムの話の原典には「私の悲心の誓願は、広大無辺である。つとめて怠ることがなければ、必ず火を消すことができる。たとえ、この世でかなわなくとも、生まれ変わってでも消してみせる」とあります。これは仏道を歩む菩薩の誓願を述べたものですが、正にオウムの行為こそ、この大いなる悲心の誓願によるものです。

私ども凡夫　は、このようなオウムの行為を、無駄・徒労・無意味だとして、見ぬふりをしたり、とき

には、嘲笑すらしかねません。そして、「そんな微々たることをしたところで、何にも変わるものではない」といって、自分は、何ひとつ行動を起こそうとしないのが常です。我々は欠点だらけの不完全な存在です。その凡夫にできることといえば、我々より非力と思われるオウムに見習って、慈悲心、なかでも悲心を起こすことです。

あのマザー・テレサが、

「愛とは、大きな愛情をもって、小さなことをすることです。」

「百人に食べ物を与えることができなくても、一人なら出来るでしょ？」

の名言を残しておられます。宗教は異なっていても、その心は慈悲と言っても間違いはないでしょう。今、眼前にいる一人を救うということを、先ず心掛けなさいということです。そして、生まれ変わってでも、その悲心をつなげていこうとする気持ちが、いずれ世界全体に広がっていくということでしょう。

34 「ありがたし」小考（2020/1/01）

新しい年がスタートします。昨年は多くの自然災害に見舞われた年でした。また、世界の情勢も決して明るいとはいえません。しかし、新年にあたり今ある我が命を「ありがたし」と感謝し、自分にできることを精一杯果たしていこうとの抱負を立てれば、先には必ずや吉兆あるものと信じます。

さて、この「ありがたし」という言葉ですが、仏教の基本となる因縁生起（いんねんしょうき）、いわゆる縁起の教えに使われています。原始経典『法句経』の一八二番は次のように述べます。

ひとの生（しょう）を　うくるはかたく
やがて死すべきものの
いま生命（いのち）あるはありがたし
正法（みのり）を　耳にするはかたく
諸仏（みほとけ）の　世に出（い）づるも
ありがたし　　（友松圓諦訳）

ここには、四つの有り難いこと、滅多にないことが挙げられています。

先ず第一は、人間として生まれるということです。私どもは、自分が人間であるということに無頓着です。当たり前だと思っています。この世に数え切れないくらいの命あるものの中、人間という命をいただいたということ、これほど有り難いことはない、そこに先ず気付かれたのが釈尊でした。見慣れている身の回りの自然に、感動せずば文学・芸術はなく、探究心なくば科学はなく、人間の生き死の問題に向き合わずば哲学も宗教も生まれてはこなかったでしょう。これらは、人間でなければ成しえない精神活動の結実でしょう。

第二は、今現在、我が身の生命を保持していることです。我々は、自分一人で生きているような気でいますが、親の加護や多くの人々の援助なくしては、生きてこれなかったはずです。また、生き物の頂点に立つ人間の食べるという行為は、他の多くの生き物の命を奪っているということであり、多くの尊い命の犠牲の上に自分の命はあるのだという自覚が大切です。そして、そういったことの自覚のない凡夫である自分を、支えてくれている計り知れないさまざまな縁に対して、自分の命ある限り、感謝することは勿論、その恩に報いていこうという意識こそが、仏教徒としていちばん大切なことなのです。

第三は、釈尊の教えばかりではなく、真実の言葉をしっかり受け止めることです。どんなに素晴らしい教えであっても、自分の判断にこだわり聴く気のないものにとっては馬耳東風でしょう。

第四は、釈尊のような方がこの世に出現することは滅多になく、仏と巡り合うことは甚だむつかしいということです。しかし、仏でなくとも自分より優れた人は、この世にたくさんいます。師と仰ぐ人がいるかいないかはとても大きな問題です。吉川英治氏は「われ以外みなわが師」であるとの名言を残されています。要は、正道を歩もうという意識の問題です。

以上の四つの有り難いことを、当たり前のこととして、無自覚、無意識に生きていたのでは、人間として命をいただいた甲斐（かい）がないというものです。せめて、一年の始めだけであっても、四つの有り難さをかみしめていただければ、自分が仏教徒であるという自覚が生まれ、「ありがたし」という宗教的法悦がいただけるのです。

35　仏教の心の世界（2020/2/01）

仏教には数字を冠した用語がたくさんあります。今回は人間のさまざまな心の世界（境地）を表す十界（じっかい）のお話です。

まず六道（あるいは六趣）と呼ばれる六つの世界があります。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道。それは、われわれ衆生が、その業に応じて死後に赴くべき六つの世界との理解が一般的ですが、生きている人間の心の世界を表すともいえるでしょう。人・天の二道は善趣、他の四道は悪趣とされますが、ランクの差こそあれ、六道（六趣）は俗界であり、輪廻転生を繰り返す苦しみを伴う迷いの世界です。

さらに四聖道（ししょうどう）と呼ぶ四つの世界。声聞（しょうもん）・縁覚（えんがく）・菩薩（ぼさつ）・仏（ぶつ）という四聖道は、執着の心から解放された悟りの世界で、つごう六凡四聖、十界となります。そして、仏教は、最上級ランクの仏界を目指す教えです。

ここで十界それぞれの概略のおさらいをしておきましょう。

地獄は、悪業が悪果を招く連鎖で、恐怖と苦しみの休まるときがない世界。餓鬼は、物があっても無くても、貪欲で、常に飢渇であえいでいる世界。畜生は、動物的本能の欲望のおもむくまま行動する弱肉強食の世界。修羅は、猜疑（さいぎ）や妬（ねたみ）、あるいは正義を盾に、他を許すことが出来ず、常に戦いを挑む闘争の世界。人は、快楽への誘惑から、煩悩断じ難く迷いつまずき、どうしても苦の種を播まかずにはおれない世界。天は、諸々の喜びが多く、寿命も長いが、やがて衰える憂いは避けられない世界。

声聞は、仏の教えの声を聞き、修行実践するも、自利だけにとどまる聖者の世界。縁覚は、独覚（どっかく）とも称し、仏の教えによらず、師はなく、自ら独りで覚り、他には教えを説こうとしない孤高の聖者の世界。 菩薩は、上に仏を目指し、下には衆生を教化しつつ、共に悟りに達すべく修業に励む大功徳者の世界。仏は、無上の真理を悟り、迷える衆生を救済する最尊の大聖者の世界ということです。

ところが、仏教はそれぞれの界は確定・独立したものではなく、十界のそれぞれが相互に他の諸界を兼ね備えている（具足）、つまり十界互具といいます。たとえ地獄界の者であっても、菩提心を起こして精進すれば、成仏できる可能性はあるということです。われわれ人間を例にとってみても、仏のような優しい心を持っているかと思えば、地獄・餓鬼・畜生・修羅といった恐ろしい心を併せ持っていて、時にそれが顔を出すということです。

さて、私ども、心優しく穏やかな人のことを仏様のような人だといい、そのような人に出会うとうれしくなります。では、仏様の心はどのような世界なのでしょうか。先ず思い浮かぶのは、慈悲に満たされた世界です。他者に利益や安楽を与える（与楽）いつくしみを意味する〈慈〉と、他者の苦に同情し、これを抜済（抜苦）しようとする思いやり〈悲〉の世界です。

私どもは、不完全な凡夫ですから、一人だけで慈悲の心を併せ持つことは至難のことです。故に、自分にないものは、パートナーと共にという考え方は、とても大切なことです。われわれは、地獄から仏の十界を彷徨（さまよ）う凡夫ですが、わずかといえども慈悲心という仏心を誰もが持っており、足りない分は共に補い合ってという教え、それが大乗（大きな乗り物）仏教です。

36　諸法実相（しょほうじっそう）（2020/3/01）

青カビから抗生物質のペニシリンが出来ます。あのフグ毒でさえ使いようによっては薬になるそうです。あんなモノが、こんなヤツがと思っていても、実はとても役立つ存在であり得ます。少々抽象的な表現ですが、すべてのものは、すべてを成り立たせるために、あるがままあるのです。

「小さなもの、力の弱いもの、気づかれないもの、忘れがちなもの、無視されがちなもの」に目を注ぎ、ありのままの姿に「気づく大切さ」を優しく、あたたかな詩に詠んだ童謡詩人、金子みすゞ（1903～1930）の詩三編をまず紹介いたしましょう。

『土』

こッつん　こッつん　　打（ぶ）たれる土は
よい畠になって　　よい麦生むよ。
朝から晩まで　　踏まれる土は
よい路になって　　車を通すよ。
打（ぶ）たれぬ土は　　踏まれぬ土は
要（い）らない土か。
いえいえそれは　　名のない草の
お宿（やど）をするよ。

『星とたんぽぽ』

青いお空の底ふかく、　　海の小石のそのように、
夜がくるまで沈んでる、　　昼のお星は眼にみえぬ。
　見えぬけれどもあるんだよ、　　見えぬものでもあるんだよ。
散ってすがれたたんぽぽの、　　瓦のすきに、だァまって、
春の来るまでかくれてる、　　つよいその根は眼にみえぬ、
　見えぬけれどもあるんだよ、　　見えぬものでもあるんだよ。

『私と小鳥と鈴と』

私が両手をひろげても、　　お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、　　地面（じべた）を速くは走れない。
私がからだをゆすっても、　　きれいな音は出ないけど、

あの鳴る鈴は私のように、　　たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、　　みんなちがって、みんないい。

彼女は、「打たれ」、「踏まれる」こと、あるがままを受容し、それでいて、「名のない草」「昼の星」「たんぽぽの根」「見えぬもの」に目を注ぎ、ないものを貶(けな)さず、あるものは美点とし、「みんなちがって、みんないい」と互いに認め合おうとしています。

私共は、自分の前に現れるさまざまな事象を、見ているようで、実は本当の相（姿）が見えておりません。どうしても「我欲」という色めがねを通してしか見れないものですから、目先の分別で区別したり、比較したりして、怒ったり喜んだり無視したりしているに過ぎません。

『法華経』方便品に「唯(ただ)仏と仏とのみが、乃(すなわ)ち能(よ)く**諸法実相**を究尽(ぐうじん)す」とあります。ただ仏のみが、諸現象をあるがままに見る相（姿）を、そのままその相（姿）の本質であることを知っているというのです。換言すれば、「この世のあらゆるものは、真実を示すために存在している。世の中にあるのものは、すべて存在意義がある。世の中に不要なものはない」ということになります。

我々は仏ではないので、意に叶わないものや敵対する相手の存在意義が見出しにくいですが、「気に入らんから排除してしまえ」では、本質的な解決にはならないことだけは確かです。この「諸法実相」の教えこそが、社会・世界の平和の扉を開く大切な鍵となることに間違いはないでしょう。

37　不失花（失せざる花）(2020/4/01)

春です。美しく花が咲く、一年の中でいちばん華やかな季節です。「花」は、その特性から派生してくる、いろいろなニュアンスを表現することばとしても使われます。たとえば、「花道」、「花の都」、「人生の花」、「人に花を持たせる」などなど。今回お話しする「花」は、能楽を芸術として確立した世阿弥の述べる「花」です。

世阿弥の著作『風姿花伝(ふうしかでん)』は、能楽の演技論、芸術論として書かれた本で、「花」という言葉を用いています。その内容は明解で示唆に富み、いわんとしている精神は能だけには限らず人生論として読むこともできます。この「花」の意味を意訳すれば「人を感動させる魅力」、人生論に置き換えれば「人生の勘所」とでもなるでしょうか。

『風姿花伝』には、第一章「年来稽古条々(ねんらいけいこじょうじょう)」において、七歳から五十歳までの年齢別の能楽稽古の心得を論じています。

幼年　青年と努め励むも「**時分(じぶん)の花**」なるがゆえ驕(おご)ることなく、
中年にいたるまでに「**真(まこと)の花**」を究(き)わめねばならぬ。
老いては己を知りて無理はせず、枝葉は枯れ老木になろうとも、会得したものが「真の花」なれば散ることのない花が残る。

幼年・青年期の「花」は若さに依るものであるから、驕ることなく芸に励まねばならない。三十四、五歳を最盛期とし、この頃に「真の花」を究めなくてはならない。そして、四十四、五歳の時期から大きく変化しなくてはならない。次第に年老いていくことはどうにもならず、身体的な花も、観客の目に映る花も消え失せてしまい、演ずることが出来ない分野が出てくることを、承知しなければならない。

また、この頃からまねはするべきでなく、身に相応しい演技を楽々と無理をせずに、脇の役者に花をもたせて、相手に合わせるようにして、少なめに演ずるべきである。もし、この頃になってまでも、消え去らない花があったとすれば、それこそが、「真の花」である。

五十近くになってまで消えない花をもっている役者であれば、むしろ脇の役に専念して、無理をすることはない。このように自分の身を知る心が、達人の心なのである。本当に会得した花であれば、枝や葉が少なくなり、老木になっても、花は散らないで残る。

以上を一言でいうと「**不失花（失せざる花）**」ということです。つまり、若い頃の魅力は「時分の花」であって、それは年齢とともに失せていくものであるから、稽古に努め励んで「失せざる花」にならなければならないというのです。そして、晩年の著作『花鏡』の中では、いずれの年代においても慢心と現状に安住することを戒め、「初心忘るべからず」と諭します。

「是非の初心忘るべからず」－青年期には失敗や苦労をいとわず、後々の芸の糧として励むこと
「時々の初心忘るべからず」－壮年期にはその時々に得た勘所を蓄積し、極致の芸を目指すこと
「老後の初心忘るべからず」－老齢期には達人として歳にあった芸風の確立に努めること

世阿弥は、人生五十年といわれていた室町期の人ですから、老後を現代に置き換えるとすれば、七十歳、あるいは八十歳くらいというところでしょうか。ここで留意すべきは、年老いてから「失せざる花」を願っても無理な話で、若い時からのたゆまぬ精進の積み重ねの上に、経験から生まれる内面的深みが加わることによって、人間的魅力が醸し出されるようになり、初めて「失せざる花」に成り得るということです。われわれ凡人も、初心を忘れることなく、日々の努力を怠らず、たといささやかであれ「失せざる花」を咲かせていたいものです。

38　南無佛(2020/5/01)

「神仏の存在を信じますか？」という問いに対して、あなたはどうお答えになりますか。

キリスト教においては、イエス･キリストの十字架像やマリア像を、仏教では、さまざまな仏菩薩の像を信仰の対象として拝んでおります。それは、実際には自分の目で確かめることの出来ない神や仏を、象徴的に具現化した像によって、神仏に近づきたいというわれわれの切なる思いが、そのようにさせているのだと考えられます。

ただ、旧約聖書には、エホバ神が預言者モーセに、十戒を授けられ、偶像崇拝を禁じたとあり（出エジプト記）、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教では、神を可視化してはならないというのが、大前提となっています。つまり、一神教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教においては、全知全能で絶大なる存在である神を可視化することは畏(おそ)れ多いことであり、かつ、それは言うなれば、神を、不完全な人間が作った歪曲したレンズを通して見るようなものであり、信仰の妨げになるということでありましょう。

仏教においても、禁じたというわけではありませんが、釈尊入滅後、その象徴として、菩提樹、法輪(ほうりん)（仏の教えが広まる様子を車輪で表現したもの）や、仏足石(ぶっそくせき)（釈尊の足跡を刻んだ石）、ストゥーパ（釈尊の遺骨を埋納した仏塔）などを礼拝の対象としていて、仏像が崇拝されるようになったの

は、五百年くらい後になって、ギリシア系美術の影響を受けてからのことであります。

仏教において、仏とはブッダ（仏陀）、覚者という意味で、仏法を会得した者ということで、釈尊（ゴータマ・シッダールタ）ただお一人というわけではありません。ですから、釈尊の遺言として語り継がれている「自らを拠よりどころとせよ。法を拠よりどころとせよ」に示されているとおり、「法に裏打ちされた自己に頼れ」というのが、その教えです。

その意味において、一神教における「神」と呼んでいる存在は、仏教では「法」がその概念に近いということができます。法も可視化できるものではありません。そこで、初期仏教において、法を象徴するものとして、法輪がその対象となったと考えられます。さて、この法は、真理とも道理とも、浄土教においては、他力とも呼ばれるもので、その属性は智慧（ちえ）と慈悲（じひ）に大別されます。仏とは、その智慧と慈悲の両方を兼ね備えていることはもちろんですが、それぞれ個性を持っています。たとえば、釈迦牟尼仏の場合は智慧の側面が強く、阿弥陀仏の場合は、ほぼ慈悲のみに特化しているという特徴があります。

ところで、少し話題を変えます。よく「他に迷惑をかけるな」といいます。しかし、これは道徳であって、宗教ではそのようにはもうしません。人は、他に迷惑をかけなければ生きられない、罪深い存在なのだと気付かせてもらう智慧を得ること、そして、その罪業に対して懺悔（さんげ）し、そのような自分を支えてくれている諸々に感謝し、その上で、他に対して慈悲の心も持つこと、これが仏法であり、宗教であります。

そこで、改めて「神仏の存在を信じますか？」の問いに戻ります。仏教徒であるならば、次のようにお唱えいただき、その答えとしていただきたいのです。

願従今身尽未来際（がんじゅうこんじんじんみらいさい）
南無帰依仏両足尊（なむきえぶつりょうそくそん）
南無帰依法離欲尊（なむきえほうりよくそん）
南無帰依僧衆中尊（なむきえそうしゅうちゅうそん）
願従今身尽未来際（がんじゅうこんじんじんみらいさい）
南無帰依仏竟（なむきえぶつきょう）
南無帰依法竟（なむきえほうきょう）
南無帰依僧竟（なむきえそうきょう）

難しいことは省きます。「私は未来永劫、 教え給える仏（ブッダ）、説き給える法（ダルマ）、伝え給える僧（サンガ）の三宝（さんぼう）に帰依します」ということであります。簡略に、「南無三宝」、「南無仏」、浄土門下であれば「南無阿弥陀仏」だけでもよいのです。

39　自灯明・法灯明（2020/6/01）

夏目漱石の「こんな夢を見た」で始まる『夢十夜』の「第六夜」に、面白い記述があります。

運慶が護国寺の山門で仁王を刻んでいるというので、見物にいき、感心して見ていると、隣の男が「運慶は、木の中に埋まっている仁王を掘り出しているだけだ」というのを聞き、自分でも仁王像を掘り出してみたくなり、家にある木を片っ端から彫ってみたが、終（つい）に仁王は出てこなかった。明治の木には仁王は埋まっていないと悟ったというのです。

愛知県長久手市内に工房を構える、日本を代表する大仏師、江場琳鬘氏がこれと同じようなことを仰っておられます。「自分は、木の中に仏の姿が見え、その埋まった仏を、鑿で掘り出している」というのです。仏像は、仏師がまさしく仏菩薩を具現化せんとするものであり、仏師の鑿の冴えた技がなくては叶わぬことはもちろんのこと、それぞれの仏菩薩、たとえば、観音菩薩であれば、限りなくその観音菩薩の内面に近づこうとする仏師の崇高な意識が、その仏像に、奥深い秘めたる生命を宿させるのだと思います。そして、われわれは、そのような仏像の前に立ったときに、自ずと手を合わさざるを得ないといった衝動に駆られるのでしょう。

また、琳鬘氏は「仏像は、千年先を見据えて作らなくてはならない」とも語られています。日本の仏師には、系譜というものがあり、平安時代の定朝を祖とする、円派・院派・慶派の三つです。教えや技は、師から弟子へ綿々と伝承されていくものですが、その伝承の過程というものは容易かつ単純なものではないから、三つの流派に分かれたのでしょう。しかし、仏師の精神と技は、平安時代の定朝、鎌倉時代の運慶から,連綿と、間違いなく琳鬘師に受け継がれているのだなと感じます。

片や、私ども凡人が、果物を食べて美味しかったからといって、その種を植えても易々と芽が出て、実がなるものではありません。特に、柿なぞは、甘柿の種を蒔いて育ったとしても、そのまま放ほっておいたのでは渋柿しか出来ません。甘柿のなる枝を切って、接ぎ木してやらないといけません。しかも、ただ切ってつなげば良いというわけではなく、つなぐ側とつながれる側、どちらもいくつかの条件がきちっとうまくいって初めて、甘柿のなる木となるのです。仏師の技・精神の継承も、そこのところは同じでありましょう。

凡人といえども、優れた技とその根底にある教えの会得を目指せば、先ずもって良い師に就かねばなりません。しかし、良い師と巡り合えたとしても、いつまでも師の下にいられるわけではありません。『涅槃経』には、釈尊と弟子である阿難に、次のような話が伝わっております。

阿難は、二十五年間にわたり釈尊に近侍していました。このため、弟子の中で教説を最も多く聞き、記憶もしていましたので「多聞第一」といわれていました。にもかかわらず、釈尊入滅時、阿難は未だ悟りを得ていなかったといいます。悟りとは知識の多寡ではないからです。そこで、釈尊がいよいよという時、阿難は泣いて訴えました。「世尊がいなくなってしまったら、頼るべき支えが無くなってしまいます。どうか、入滅しないで下さい」と。それに応えて釈尊は「自らを洲（灯）とせよ。法を洲（灯）とせよ」と仰ったといいます。

これを「自灯明・法灯明」の教えといい、釈尊最後の教え、遺言であります。洲というのは川の中州のことで、洪水の時には安全地帯となるところです。灯と言い換えても同義で、拠所という意味です。「自灯明」は、お山の大将になれと言うのではありません。権力・金・他人に頼るのではなく、自分は自分が支えよというのです。仏法を拠り所として、世の理ことわりが解れば、自から、他に頼らずとも、自らが灯となれるというのです。仏師の技・崇高な理念は、まさに仏師の自灯明・法灯明といえるでしょう。人生は人それぞれですが、出来得れば、甘柿を実らせ、それを次の代へ接ぎ木出来るような人生を歩みたいものです。

40　没蹤跡（もっしょうせき）（2020/7/01）

日本人の特色なのでしょうか、自分は無宗教であると公言しては憚るところのない人が少なからずおられます。そこで、少し堅いテーマで申し訳ありませんが、信仰について考えてみようと思います。

仏道修行の要とは、「法に生かされる自己を見つめその法を見極め精進し、励めども驕慢の心は慎み、泥亀のごとく汚れた足跡を残すことなかれ」にあり、これを**没蹤跡**といいます。没蹤跡とは、痕跡を残さないこと、悟りの後をとどめない絶対自由の境地、仏道修行における究極の理想を指す言葉です（出典：『従容録』万松行秀著）。

釈尊の教えの基本は、あくまで自己責任で自己完結することです。先月の法話でお話しした釈尊の遺言ともいうべき教え、「自灯明（自らを拠とせよ）」「法灯明（法を拠とせよ）」ということにあります。

我々の人生は、いわば目隠しされて鬼ゴッコしているようなもので、物事の本質を、仏教でいえば悟りを、あるいは安心を、いくら捕まえようとしても、障害物に突き当たるばかりで、迷路を彷徨うがごとくです。ところが、「鬼さんこちら、手の鳴る方へ」と、打手で導いてもらえれば助かるわけですが、誘い導いてくれるその人が、果たして信ずるに値する人であるか分からないこともあります。中には奈落への道筋を誘う者もいることを心得ておかねばなりません。また、人の常としてどうしても大きな音、変わった調子に鳴る音に気を取られがちですが、白隠禅師は「隻手（片手の意）の音を聞け」といわれたといいます。つまり、本質に導いてくれる打手は、片手で鳴らすような、音にならないような打手であるからして、全身全霊で心を研ぎ澄すまして聞かなければ聞こえないというのです。

ところで、話は換わりますが、過日、パソコンの OS をヴァージョンアップしたところ、頻繁に勝手に再起動を繰り返すようになってしまい、これには閉口しました。一口に、パソコンの不調といってもその原因は、ハード面から来るものと、ソフト面から来るものとがあり、単に埃（ほこり）がたまっただけでも熱がこもって動かなくなることもあったりして、結構人間と似たところがあります。パソコンとの付き合いも、たいした経験ではありませんが、かれこれ三十五年くらいになり、試行錯誤を繰り返えすこと約二週間、原因と覚しきソフトを見つけて削除したら、ピタリと症状が治まりました。その間、最悪の場合は買い換えかと腹を据（す）えたところで、解決法が見つかり、ホッとしています。

人の営みも、これと同じではなかろうかと思うのです。物事の現象には、そこに至る原因が必ずあります。自分を取り巻く様々な現象には、良いものも悪いものもありますが、すべては、自分の関わりの中から生じていることを見据えた上で、全身全霊で心を研ぎ澄すまして、来方と行く末を、きっちりと凝視していかねばなりません。

道元禅師はいっておられます。

仏道をならうというは、自己をならうなり。
自己をならうというは、自己を忘るるなり。
自己を忘るるというは、万法に証せらるるなり。
万法に証せらるるというは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。

少々難しいですが、それは、「法に生かされているという自己を見つめ、その法を見極めよ」ということではないかと思うのです。つまり、「自灯明　法灯明」ということです。

ただ、このような自己は、時として傲慢になります。禅書『無門関』には野狐禅といって、真の境地に達していないのに自惚れ、野狐身の畜生道に堕したという話があります。鼻持ちならない、独り善がりの増上慢になってはいけません。また、そうではなくとも、沼から上がった泥だらけの亀のように、

自分の歩いた跡を大袈裟に残こそうとする態度も見苦しいものです。

聖徳太子が『十七条憲法』の中で、「相共に賢愚なること　鐶の端無きが如し」といっておられます。俺は賢いと得意げにいったところで、端のない耳飾りの輪っかのように、愚かな自分がすぐ隣に鎮座していたりするものです。人には絶対知られたくないと思う、恥ずかしい自分を誰もが隠し持っています。

そのような自己を、血涙を流すほどに懺悔し、なおかつその罪業深重の身をも包み込む慈悲なる法、つまり仏に、法然上人は、「知者の振る舞いをせずして、只一向に念仏すべし」といっておられます。ここに安心を求めなくてはなりません。私たちの信仰も、この安心に至るまでの痕跡を微塵も見せず、自然体でありたい、すなわち没蹤跡でありたいものです。

41　至道無難　唯嫌揀択（しどうぶなん　ゆいけんけんじゃく）（2020/8/01）

法然上人七十五歳の時、弟子の住蓮と安楽が、後鳥羽上皇寵愛の松虫と鈴虫という、側近の女官を出家させたことから上皇の逆鱗に触れ、住蓮と安楽は死罪、法然上人自身も、四国の土佐へ流罪となりました。ただ、前関白の九条兼実の庇護により、讃岐（香川県）に配流地が変更されます。ご高齢の身での配流は、想像しただけでもその難儀さが窺われます。しかし、法然上人ご自身は、都から遠く離れた人々にも、念仏を弘める良い機会を与えていただいたと、むしろ喜ばれたといいます。こんなエピソードがあります。

播磨（兵庫県）の室津にお着きになると、近くに住む遊女の小船が一艘、上人の船に近寄ってきて、「近ごろ京で名高い法然上人が来られるということをお聞きし、押しかけてまいりました。私たちは前世にどのような罪を犯したために、このような身となったのでしょうか。この罪の重い私たちは、どのような仏道の勤めをすれば救われるでしょうか」と尋ねました。

上人は、不憫に思われ、「思えば本当に、そのようなことをして暮しを立てておられることは、罪の障りが重いといえましょう。それによっての報いも、また推しはかることができません。もし、このような生業をしないでも、生活する手だてがあれば、早くそのような生業をお止めになることです。もしほかに方法がなくば、かまいませんから、現在の境遇のままで、ただひたすら念仏を申しなさい。阿弥陀仏は、そなたのような罪深い人のためにこそ、慈悲深い誓願をお立てになられたのです。ただひたすら深く本願を信じ、決して自分を卑下してはなりません。本願にすがって念仏すれば、疑いなく往生することができるのです」とお説きになれたと言います。

「ステレオタイプ」という言葉をお聞きになったことがありますか。これは、私たち人間社会の出来事について，共通に受入れられている単純化・固定的な見方を表わす語で、通常は「できあい」、あるいは「紋切り型」の見方と訳されます。しかし、ステレオタイプは極端な単純化や歪曲化の危険を伴い、好悪・善悪の感情を伴った偏見や差別に連なる例が多々見られます。しかし、このような紋切り型の見方が既成概念として気付かぬうちに出来てしまって、私どもは、それがこだわりとなって、そこから抜けることがなかなか出来ません。たとえば、このエピソードにある遊女のような職業は、堕ちるところまで落ちた生き方で、救いようがないという思い込みです。法然上人は、そのこだわりを念仏という信仰でみごとに打ち破って下さったのです。

禅書『信心銘』では、「至道無難、唯嫌揀択」と説きます。至高の真理の道（仏道）は、難しいことでは無い。ただ、揀択（選り好みすること）を嫌え（離れれ）ばよい。つまり、悟りを目指すと言うこと

は、なにも難しいことではない。ただ、これは駄目で、こうでなくてはならぬというこだわりを捨てれば良いというのです。

法然上人の『百四十五箇条問答』には、次のような事例もあります。

問、歌よむはつみにて候（そうらう）か。

（たとえば、恋愛のような歌を詠むことは、罪になりましょうか？）

答、あながちにえ候はじ。ただし罪もえ、功徳にもなる。

（あながちに何ともいえない。罪ともなれば、功徳ともなる）

問、さけのむは、 つみにて候か。

（飲酒は罪になりましょうか？）

答、まことにはのむべくもなけれども、この世のならひ。

（本当は飲んではならないものですが、この世の習いとして致し方ないでしょう）

吉田兼好の『徒然草』には、法然上人に関して次のような記述があります。

ある人が、法然上人に「念仏を唱えている時に睡魔に襲われてしまい、称名念仏の勤行を怠ってしまうのですが、どのようにして、この障害を乗り越えればよろしいのでしょうか？」と質問した。すると、法然上人は「目が覚めている時に、念仏をしなさい」と答えられた。とても尊いことである。

また、「極楽往生は、確実と思えば確実であるが、不確実と思うならば不確実でもある」とおっしゃられた。これもまた尊いことである。

また、「疑う気持ちがありながらも、念仏を唱えていれば極楽往生することができる」ともおっしゃった。これもまた尊いお言葉である。

法然上人ご自身は、自己にはたいへん厳しい方でしたが、他に対しては、実におおらかで、無理なく念仏を唱えることこそが救いの道であると説かれました。ただし、ならば何をやっても良いということでは無論なく、発心（ほっしん）（悟りを目指す心を起こすこと）の後は、一歩でも二歩でも精進を心掛け、愚痴が出なくなるまでいかないと、本物とは当然なりえません。

42　吹毛剣（すいもうのけん）（2020/9/01）

物事をテキパキ処理する優れた人のことを切れ者、一方、やる気のないぐうたらな人のことを鈍（なまくら）といいますが、これらの言葉は刀剣に由来します。日本刀は、当然ながら武器としての役割を持っていますが、名工が心血を注いで鍛え上げ・研ぎ上げた刀の美しいその波紋を眺めていると、吸い込まれるような不思議な気持ちに包まれます。実は、日本刀の美しさはそんな神秘的付加価値の方が大きいように思えます。

日本人にとって、刀というものは、単なる刃物ではありません。熱田神宮のご神体が、三種の神器の一つである草薙剣（くさなぎのつるぎ）であること、鎬（しのぎ）を削けずる・鍔迫（つばぜ）り合い・目貫（めぬき）通り・反（そ）りが合わない・相鎚（あいづち）を打つ・折り紙付き・抜き差しならぬ・抜き打ち・つけ焼き刃・地金が出る・焼を入れる・伝家の宝刀・単刀直入等々、枚挙にいとまがないほど刀に由来する言葉が多くあること、また、国宝に指定されている刀剣類は約百十点にのぼり、これは全国宝の約十％に当たり、工芸部門に限れば、ほぼ半数が刀剣類が占めていることからして、日本刀は、道具でありながら美術工芸品であり、かつ、神器でもあるということです。

さて、仏教においても仏画や仏像に刀剣を持つ姿が多く見られます。しかし、仏教では、智剣（ちけん）と

いう語があるように、智慧がよく煩悩を断ち、生死の絆を断つことを、鋭利な剣で象徴します。実際、文殊菩薩や不動明王などの仏像は、剣を持っておられます。特に、文殊菩薩のような鋭い智慧を吹毛剣に例えることがあります。吹毛剣というのは、吹きかけた小さな毛をも切ってしまうという非常に鋭利な剣のことをいいます。

宋代の禅僧、雪竇重顕の『碧巌録』に、次のような問答があります。

【本則】
挙す。僧、巴陵に問う、「如何なるか是吹毛剣」。
陵云く、「珊瑚は枝枝に月を撐著う」。

【頌】
不平を平めんと要して、大巧は拙なるが若し。或は指さし或は掌して、天に倚りて雪を照らす。大治も磨礱ぎ下せず、良工も払拭すること未だ歇めず。別なり、別なり。珊瑚は枝枝に月を撐著う。

いかがでありましょうか。これぞ禅問答、面目躍如（めんぼくやくじょ）の感があります。

巴陵禅師にある僧が、「吹毛の剣というのは、どのようなものでしょうか？」と聞いたら、「それは珊瑚が枝枝に露を帯び、その露が月の光を映して輝いているようなものだ」というのですから、正直、何が何やらさっぱり分かりません。

その頌（解説）は、智剣（吹毛剣）は、相手次第で自由自在に使うものであり、名人の刀鍛冶であっても鍛えることも、研ぐことも出来ない。各々それぞれが、研ぎ澄ませて輝かせるものだ」と、なまくら（凡夫）の私には、この程度の理解が精一杯であります。

つまりは、どんな場合にも正しい判断と対応ができる智剣（仏性）は、誰もが本来持ち合わせているものであるが、他でもない、自分でしか研ぎ磨くことが出来ないということでありましょうか。

ときに、仏像の持つ智剣は両刃であります。慣用句の「両刃の剣」は、非常に役に立つ面と、使い方を誤ると害になる危険な面を併せ持つという意味になります。ちなみに、ほぼ稼働しないまま廃炉となる高速増殖原型炉の名前は「もんじゅ」でありました。吹毛剣は、あまりに鋭利なるが故に、人を傷つけ、自然や文明をも滅ぼす脅威になりうることは覚えておいた方がよいでありましょう。この処世、鈍であっても、刃がついてないことが、かえってよい場合もあったりいたします。

43　遊（ゆう、遊び）（2020/10/01）

小学生の頃はテレビもない時代でしたので、日中は近所の子と遊び回り、夜や雨の日は家でゴロゴロ遊んでばかりの時代でありました。中学校に入学して成績順位が出たときには、随分叱られたことを覚えています。ですから、遊びというものは、勤勉、努力や精進とは対極的なもので、怠惰に等しいものとして、認識していたように思います。

ところが、学校の授業の中で、歯車はきっちりと密着させず、ある程度の余裕を持たせることが必要で、それを「遊び」というと教わりました。「必要な遊びもある」ということ、それは新鮮なひとつの発見であり、感動であったように記憶しております。一般的には「ガタつき」ですが「遊び」という言葉の奥深さを知り、その時をきっかけに、遊びの概念が変わったように思います。

その後、車のハンドルにも遊びがあるということを知りました。ハンドルに遊びがない車は運転しづ

らいといいます。一方、スポーツカー仕様のハンドルは遊びが少なく、動きがシビアになる反面、運転には技術を要し、常に車の挙動と一体化させなくてはならないそうです。

遊びに似た概念を持つ言葉に、「寄り道」、「道草」があります。目的地に達する途中で、他のことみに時間を費やすことをいうのですが、これを自分の人生に当てはめて考えてみると、どういうことになりましょうか。現代は、厳しい競争社会で、ストレス過剰の世の中となっていることはご承知のとおりです。そこで、自分の中に、遊びの要素を取り入れて、時には道草を食ってみるということが、心のゆとりに不可欠なものだと思います。それは、自分の好きなこと、芸術、スポーツ、旅行、グルメ等色々ありましょうが、中には、賭事（かけごと）、浮気、薬物といった危ないものもあります。ハンドルの遊びは、それぞれの車にあった絶妙な加減に設定されているそうです。自分の中の遊びも、その加減次第では、大事故につながる危険性があるということだけは、肝に銘じておかねばなりますまい。
ところで、古代中国では、人間のライフサイクルを四季になぞらえて、青春・朱夏（しゅか）・白秋（はくしゅう）・玄冬（げんとう）という区分で表現しました。古代インドにおいても、「四住期（しじゅうき）」という生涯で経るべき、四つの段階を提示しています。

学生期（がくしょうき）

師について、世間を生きるすべを学び、きたるべき社会生活のために備えて勉学に励む幼年から青年期。

家住期（かじゅうき）

社会人として職業につき、伴侶を得て家庭を作り、子育てと仕事に励む壮年期。

林住期（りんじゅうき）

仕事や家庭、世間の束縛から自らを解き放ち、これまでの人生を振返りつつ、新たな人生を模索する熟年期。

遊行期（ゆぎょうき）

世俗な執着は捨て、思うがままに遊行して、人の話に耳を傾け、人生の知恵を人々に授ける老年期。（遊行：この世への一切の執着を捨て去って、悟りを求めて巡礼すること）

ただ、これをそのまま現代に当てはめようとしても無理がありますので、林住期を定年退職後の期間、遊行期を要介護の期間と捉えてみます。学生期や家住期では、遊び、道草は適度にということでありましょうが、林住期においては、半々、遊行期にいたっては、ほぼ全部という具合に考えるのがよろしいかと思うのです。

人生百年時代といわれるようになりました。林住期、遊行期をいかに生きるか、それが大きな問題です。林住期になれば、我儘（わがまま）を許容し、自由な天地を求めようという意識をもち、聖と俗とを行ったり来たり、これが理想です。いずれ、体が不自由になり病院や介護施設を転々とするも、それを嘆くのではなく、道草して培（つち）かった体験を生かして、周りの人に知恵を授け、法を説く、これぞ遊行期の極意でありましょう。

最後に心理学者河合隼雄先生の言葉です。

ゆっくりと寄り道をすればいい。

道草の途中には、きっと小さな幸せが落ちています。

44　経霜楓葉紅（霜を経て楓葉紅なり）（2020/11/01）

永観堂は「もみじの永観堂」として有名ですので、秋には紅葉（もみじ）を求めて多数の拝観者が訪れます。

この紅葉というものは、桜なんかとは違って、年によって色鮮やかな場合もあれば、色付きが残念な場合もあります。紅葉が鮮やかに発現するには、温度、水分、日光などの環境が密接に関係し、昼夜の寒暖の差が大きいこと、適度の湿度があること、紫外線が強いことなどが必要であるといいます。山間の渓流近くというのが、いちばん良い条件を満たしているそうですが、気象条件というものは、年によって大きく変わりますので、どうしても、当たり外れの年が出来るのもやむを得ないところでありましょう。

この季節になりますと、「経霜楓葉紅」あるいは「楓葉経霜紅」と揮毫（きごう）された掛け軸が、茶席の床の間に飾られることがあります。語順の前後はありますが、楓（かえで）の葉が霜を受けて紅葉して美しいという、鮮やかな色彩を感じさせる同義の五言句であります。しかし、その奥にある意味合いは、人間も同様に、さまざまな労苦を経験し、それに耐えてこそ成果を得て、はじめて立派な人格も備わるということを示しているのであって、格言の「艱難（かんなん）汝を玉にす」と類義の禅語であります。

私を含め人間というものは、どうしても楽して儲（もう）かる、安直な方法で成果を得たいと考えがちです。神社仏閣へ行っても、商売繁盛、家内安全、合格祈願、厄難消除、宝くじ当選祈願等々、勝手なお願いばかりして帰ってきますが、かりに棚からぼた餅のようなことがあったとしても、人格の深まりまでは、期待できません。

『大般涅槃経（だいはつねはんぎょう）』に、面白いお話が出てまいります。漢文では分かりずらいので、『仏教聖典』（仏教伝道協会刊）に、平易な形で引用してありますから、次に示します。

ある家に、ひとりの美しい女が、着飾って訪ねてきた。その家の主人が、
「どなたでしょうか」
と尋ねると、その女は、
「わたしは人に富を与える福の神である」
と答えた。主人は喜んで、その女を家に上げ手厚くもてなした。
すると、すぐその後から、粗末な身なりをした醜い女が入ってきた。主人がだれであるかと尋ねると、貧乏神であると答えた。主人は驚いてその女を追い出そうとした。すると女は、
「先ほどの福の神はわたしの姉である。わたしたち姉妹はいつも離れたことはないのであるから、わたしを追い出せば姉もいないことになるのだ」
と主人に告げ、彼女が去ると、やはり美しい福の神の姿も消えうせた。

生があれば死があり、幸いがあれば災いがある。善いことがあれば悪いことがある。人はこのことを知らなければならない。愚かな者は、ただいたずらに、災いをきらって幸いだけを求めるが、道を求めるものは、この二つをともに超えて、そのいずれにも執着してはならない。・・・・

因（ちな）みに、ここでは福の神と貧乏神となっていますが、『涅槃経』では功徳天（吉祥天）と黒闇天（こくあんてん）となっています。吉祥天は福徳を授ける女神、黒闇天は不吉や災いをもたらす女神ということで、この主人のことを馬鹿な奴だと笑うかもしれませんが、冷静に考えると、自分自身そのものであることに気付かされます。

災害は、いつ何時起こるやもしれません。江戸時代、新潟で大地震がありました。良寛和尚は、罹災(りさい)して子供を亡くした知人に、「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候(そうろう)。死ぬる時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候」と手紙を送っています。並の人間にこんなことをいわれたら、手紙を破いて捨ててしまったでありましょう。愚痴をいったり、軽薄な慰めでは、どん底からの救いは得られません。「禍福は糾(あざな)える縄の如し」と心得、災いを災いとせず、労苦を労苦とするなということです。その先結果として、霜を経(へ)て楓葉紅(ふうようこうれない)となるということであります。また、かりに幸運に与(あずか)ったとしても、けして有頂天にならぬよう、こちらも忘れてはなりません。

45　信と偽（2020/12/01）

川端康成の小説『伊豆の踊子』の一節に、

「いい人ね」

「それはそう、いい人らしい」

「ほんとにいい人ね。いい人はいいね」

という会話が出てきます。

確かに、いい人との巡り会いは、かけがえのないもののように思えます。少々、理屈っぽくなって申し訳ありませんが、いい人というのは、その人に価値を認めた結果ということになります。では、その価値判断の基準はというと、外観ということもありましょうが、その人の立ち居振る舞いや物言い、つまり、言動が重要な要素であることは間違いないでしょう。

人の言動に関する漢字に、人の為すことは「偽」、人の言うことは「信」がありますが、なかなか意味深いものを感じ、調べてみることにしました。

まず、いつわりを意味する「偽」の旁(つくり)は「為」ですが、本来は「爲」と表記し、「手+象」の会意文字であるということです。つまり、人間が野生の象に手を加えてしつけることを表し、人が作為を加えることから、自然のままではなく、イツワリやニセという意味で使われるようになったそうです。ということは、人の行為すべてをいつわりということではなかったわけで、少し安心した次第です。

次は、「信」ですが、その旁の「言」は、「辛＋口」の会意文字で、辛は先の尖(とが)った針を象(かたど)った文字で、もし不信があるときには罪に服することを前提として、誓い・謹んで口にするという意味だといいます。ですから、ことばにいつわりのないこと、また、発言や約束を守ること、あるいは、心持ちや行いが誠実であることを表すというのです。してみると、「いい人」の条件は、「信」なくしては考えられないといえます。

聖徳太子の『十七条憲法』の九条には、「九に曰わく、信はこれ義の本(もと)なり」とあり、太子は、信は人の道の根本であり、上に立つ者も仕える者も、信なくしてはダメだといわれます。しかし、そのような人間関係を築くのは、親しい間柄であったとしても、現実はなかなか難しいことです。

私どもが、身近なところで信を問われるのは、親子関係、友人関係、夫婦関係、師弟関係、組織での上下関係などありますが、互いに信によって結ばれているところには、感動と安心があります。小説や映画にしても、テーマの基調となっているものは、信であるといえるのではないでしょうか。

宗教においては、特に顕著なエピソードが伝えられていますので、二つを紹介いたします。

中国禅の初祖の菩提達磨に師事し、第二祖とされる慧可の逸話です。慧可は、四十才の時、達磨に教えを請いますが、面壁するばかりで許されず、ある大雪の夜、自らの左臂を切断し、求道の切なる思いを示し、入門が許されたといいます。雪舟の水墨画「慧可断臂図」は、その場面を見事にとらえているとして有名です。

また『歎異抄』は、親鸞が師と仰ぐ法然との信頼関係を表す有名な言葉を伝えています。

> たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。
>
> （たとえ法然上人に騙されて、念仏して地獄に堕ちても、親鸞なんの後悔をすることはない）

二つの事例、我々はこのような劇的な信頼関係に憧れを持ちますが、それを相手に求めるのであれば、一生涯叶うことはないでしょう。信頼は、自らのたゆまぬ努力によって獲得するものだからです。「信」という文字の成り立ちを、今一度肝に銘じて精進せねばなりません。信は歳月を掛け自ら精進獲得するものですが、ただ一度でも偽をなせば、一瞬にして信は失せることを忘れてはなりません。

46　十牛図（2021/1/01）

十牛図　（徳力富吉郎画伯の版画より）

昨年はコロナウイルス禍に見舞われ、社会生活も経済活動も大きな打撃を受けた一年でした。未だ終息が見えない中、ワクチンが実用化されつつあるのがせめてもの救いです。新年とはいえ「明けましておめでとうございます」とはとてもいえる状況ではありませんが、新たな一年の始まりは、新たな気持ちで迎えたいものです。

さて、今月は丑年にちなみ、禅の修行過程を描いた『十牛図』のお話です。これは文字どおり「十の牛の図」ですが、単なる牛の絵が十種描いてあるわけではありません。牛が描いてないものもあ

れば、半分だけ、あるいは何も描いてないものまであります。それぞれに、奥深い意味がありそうです。

それもそのはず、禅の修行者（青年）が、十のプロセスを経て、悟り（牛）にいたる道筋を説き示したものです。本来、禅の神髄、自己の面目、あるいは悟りを主題としているわけですから、軽々に扱うべきものではありませんが、仏道修行だけにかぎらず、書道・華道・歌道・武道等、道を求める者には、何かしら得るものがあるはずです。その一端ですが、覗（のぞ）いてみることにいたしましょう。上に掲載の十牛図は、京都で創作活動をされた版画家、徳力富吉郎氏の作品（1951 年）をお借りしました。

一、尋牛（じんぎゅう）

画中に牛は未（いまだ）いない。不安げにきょろきょろ何かを探す若者。何を探したらよいか、本人にも解らない。力尽きて求むるにところなし。そもそも何を探したらよいかも解らない。

二、見跡（けんせき）

牛の足跡（あしあと）を見つける。しかし、牛を見たわけではない。良い言葉を聞くと、判ったような気になるもの。「これだ」と思えも、それは言葉だけの悟りを先取りしているにすぎない。

三、見牛（けんぎゅう）

牛のお尻をちらっと見つける。右手に綱を持って、見つけた牛を捕まえるべく構える。しかし、牛は逃げて行く。これを追えば良いことだけが解っている状態。

四、得牛（とくぎゅう）

ようやく牛を捕まえるが、牛は暴れて逃（のが）れんとする。双方、離れ、かつ、離すまいと、綱がピーンと張っている。深い境地に遊ぶような心境を体験することもあるが、すぐに深い妄想の中にこの牛は居座ってしまう。

五、牧牛（ぼくぎゅう）

紐（ひも）で結んで、牛の先を歩く。牛は素直になって青年に従う。綱は緩ゆるんでいる。自己の中の葛藤（かっとう）が無くなり、牛が馴染んでくる。牛の示す方向に進んでいるとも見える。しかし、まだ、綱が付いている。油断すると本来の自己が、また逃げる。

六、騎牛帰家（きぎゅうきか）

牛をつなぐ紐はない。牛の背に乗って笛を吹く。楽しげに先へ進む。遙（はる）か彼方（かなた）に思いをはせ、安らぎの「家」を想う。自分と自分の居場所とも調和し、周囲とも調和した状況。ただ、ここでいい気持ちになって、停滞する危険性が隠されている。

七、忘牛存人（ぼうぎゅうそんにん）

この図では、牛が消えている。牛は、青年の胸の内にいる。家の外に出て、「修業のお陰でここまで来た」と、遠い山の彼方の月を拝んでいる。ところが、「一体になった」と思う己が心の中に潜んでいる。ここまで来ると「これで悟った」と思うが、自惚（うぬぼ）れである。

八、人牛倶忘（じんぎゅうぐぼう）

ただの円。自分の姿も、牛もない。家も自分も牛も消え、空円相（くうえんそう）あるのみ。実は、今までの絵は、すべて円の中にあった。円は真実を示す。

九、返本還源（へんぽんげんげん）

青年はいない。老梅樹が川辺に開花している。この絵は無我性の具現である。梅花は、我ならざる「蘇（よみがえ）った無我の我」である。水は自ずから茫茫（ぼうぼう）、花は自ずから紅（くれない）。我を忘れて、花になってい

る。

十、入鄽垂手（にってんすいしゅ）

入鄽とは、店の並んでいる街に入ること。垂手とは、手をブラブラとしていること。布袋様のような老人と向かい合う青年。二人してぶらぶらと歩く。老人は、自らの過去の経歴・経験も忘却し、青年と一体になり、自分と他者との交わりそのものが、無我（自己ならざる自己）の状態となることを表す。我と汝の二人が、そのまま「我」である。一見愚者のごとく、街をさすらい歩き、慈悲を世界にふりまいて生きる姿である。

新しい丑年が始まります。先行きを嘆かず、「牛」を求め精進努力いたしましょう。

47　少欲知足（欲少くして足ることを知る）（2021/2/01）

我々衆生の心身を煩わし悩ませる妄念を煩悩といます。一般に百八つあるといわれますが、根元的なものは貪・瞋・痴の三つです。自分の好むものをむさぼり求める貪欲、自分の嫌いなものを憎み嫌悪する瞋恚、ものごとに的確な判断が下せずに、迷い惑う愚痴の三つで、人を毒するところから三毒と呼ばれます。今回は、貪欲のお話しです。

『広辞苑』の欲の項目を調べていましたら、「欲の熊鷹股を裂く」という慣用句が出ていました。その注釈には、「熊鷹が両足に一頭ずつの猪をつかみ、猪が左右に逃げようとするのをはなさず、ついに股が裂けて死んだという。欲が深ければ禍を受けることのたとえ」とありました。

なるほど、さもありなんと思わせてくれますが、これに似たような話として、猿を捕まえるのにおもしろい方法があると聞いたことがあります。猿が出没するところに、猿の素手がちょうど入るくらいの口の壺を用意して、中にお握りを入れておくだけでよいというのです。欲の深い猿は、壺の中のお握りを掴つかんで離そうとしないので、そこをまんまと捕まえることができるというのです。これらの話は、動物の愚かさを滑稽に表現していますが、本当にそうなのかというと、どうも怪しく思われます。欲の皮が突っ張っているのは、熊鷹や猿よりも、むしろ人間のような気がします。そんな災難に遭った熊鷹や猿の話はこれまで聞いたことありませんが、ギャンブルで身を崩したり、巧い儲話にだまされた人の話は、それこそ五万と見聞きしていますから。

ところで、強欲な人が死んで生まれ変わる世界を、最下位の地獄よりは一つ上位になりますが、餓鬼といいます。『阿毘達磨順正理論』によると、餓鬼には、次の三種（細分化すると九種）がいると説かれています。

無財餓鬼

一切の飲食ができない餓鬼。唯一、施餓鬼供養されたものだけは食することができる。

少財餓鬼

ごく僅かな飲食だけができる餓鬼。不浄なものを飲食することができる。

多財餓鬼

多くの飲食ができる餓鬼。富裕餓鬼ともいう。ただ、どんなに贅沢できても満足しない。

ここで、財が少なかったり、無いとなればガツガツするのは当然ですが、興味深いのは、多財餓鬼です。このような餓鬼は、人間界にもいそうであります。しっかりお金を貯め込んで、有名ブランドに身を包み、一流レストランを渡り歩き、人には自慢げに吹聴するものの、満足感がないという人です。

釈尊がおっしゃるように、人間の欲は限りが無く、たとえヒマラヤの山ほどの黄金を得たとしても、新たなる欲が出てきて、満足できないのが凡夫なのでありましょう。そこで、このような卑しい貪欲な心は断ち、いわゆる、禁欲することこそが仏教の目標とするところであると考えがちでありますが、実はそうではありません。

一口に欲といいましても、財欲・色欲・食欲・名誉欲・睡眠欲、これらを五欲というそうです。我々人間は、木石ではありません。温かい血の通っている命あるものです。欲を断つということは、結局死を意味します。そこを無理にでも欲望の火を消そうとすると、心身の不調、人間関係の悪化、いろいろなところで弊害が起こってきます。ですから、禁欲ではなく、命の種火を点しておけるだけの欲は残し、そこに落ち着くこと。すなわち**少欲知足**こそが、仏教の目指すところであります。そして、有り余る残りのエネルギーは他に、世間のために振り向けてゆく、これを回向といいます。なにも、回向は、亡くなった方に対してだけのものではありません。

48　必得往生（ひっとくおうじょう）(2021/3/01)

老人六歌仙画賛（出光美術館蔵）

江戸後期に活躍した臨済宗の禅僧、仙厓和尚（1750～1837）が書き残された、『老人六歌仙画賛』というのがあります。ユーモラスな老人の戯画とその画賛には、

① 皺がよる　黒子ができる　腰曲がる　頭はげる　ひげ白くなる
② 手は震う　足はよろつく　歯は抜ける　耳は聞こえず　目は疎くなる
③ 身に添そうは頭巾　襟巻　杖　目鏡　たんぽ（湯たんぽ）　温石　尿瓶　孫の手
④ 聞きたがる　死にともながる　淋しがる　心は曲まがる　欲深くなる
⑤ くどくなる　気短かになる　愚痴になる　出しゃばりたがる　世話焼きたがる
⑥ またしても　同じ話に　子を誉める　達者自慢に人は嫌がる

とあり、実に味わい深いものがあります。それぞれ、①から③については身体的なものですから、致し方ないとして、④から⑥については、心の持ちようで、ずいぶん変わるものでしょうが、「人は嫌がる」というのに、本人はそれに気づいていないというところに問題があるようにも思われます。

それにしてもこれらについては、もうすでに老人の域に達している方、また、老人予備軍の方々も、肝に銘じておきたいものばかりです。とくに、④につきましては、周りの者に迷惑をかけるばかりか、自分自身が面白くないわけですから、ここのところを何とか克服できれば、精神的な面で、安定した老後を過ごすことが出来、そして、終(つい)に来きたる最期(さいご)の時を、心穏やかに迎えることが出来るような気がいたします。

ただ、人間にとって、死への恐怖はどうしても拭去ることは出来ません。しかも、老いれば老いるほどにそれが近づいて来るという思いが、老人の心を曲げさせ不安定にしてしまいます。ならばどうすればよいかというと、簡単なことです。永遠の命を獲得すればいいのです。「そんな馬鹿な」と思われるかもしれませんが、こんなエピソードが伝わっています。

宗祖法然上人は、八十才で亡くなっておられます。晩年、見舞いに来る弟子達に対して、「浄土を願う行人は、病患をえて偏（ひとえ）にこれを楽しむ」とおっしゃったといいます。つまり、「こうして病気になって伏せているが、いよいよこれでお浄土へ往(い)かさせていただけるかと思うと、目的地を間近にした旅人のように、今はワクワクしているのだ」とおっしゃったいうのです。

極楽浄土に往生を願うということは、死というひとつの通過点を経て、浄土に生まれ往くことであり、それは、無量寿仏（阿弥陀仏）のもとで、無量の寿命を頂くということを意味するのです。『大無量寿経』には、阿弥陀仏が成仏されるにあたって立てられた、四十八の誓願の記述があります。その第十五願に、浄土の住人の寿命は限りがなく、かつ、望みに応じて長短自在であること、そして、よく知られているところの念仏往生の願は、第十八願で、浄土往生を願い念仏する者は、もれなく救いとるということが説かれています。

これを本願と呼びます。あまりに阿弥陀仏の本願が有名で、本願というと、この十八願のことを指すことが多いのですが、本来は、仏陀や菩薩が、修行中に立てた衆生救済の誓願のことをいいます。ですから、空・因**縁**生**起**・諸行**無常**といった真理（法　ダルマ）を具現化したものと考えてよいかと思います。

空・縁起・無常の法は、自分の体ひとつをとってみましても、厳然と作用しています。父母という因により人間としての生命を頂いた私自身も、縁を失えば死に往く身であります。また、人間の寿命の最長は百二十年、それ以上は生きられないように、あらかじめプログラムされているのだといいます。

このような生命の不思議、自然・宇宙の神秘には、科学が進めば進むほどに驚かされます。そこには、空・縁起・無常という法のもと、森羅万象を動かしている何らかの意思が働いているとしか思わざるをえません。その見えざる偉大な慈悲の力を具現化したものこそ、**弥陀の本願**に相違なかろうと思うのです。ゆえに善導大師曰(いわ)く、「当知本誓重願不虚、衆生称念必得往生」。称名念仏するものは、必ず浄土に救いとろうと誓われた本願は、決して虚いつわりではない――と。

49　縁起（2021/4/01）

仏典を読んでいますと、舎利弗(しゃりほつ)あるいは舎利子(しゃりし)という仏弟子の名前が、よく出てまいります。釈尊の十大弟子の一人で、智慧第一といわれ、釈尊にかわって説法されることもあったといわれるほど

の最有力の仏弟子でした。釈尊よりも年長で、先に入滅されたと伝えられています。

この舎利弗は、若いころから学問に優れ、当時もっとも有名な論師の一人で徹底した懐疑論者のサンジャヤの下で修行をしていました。ある日、仏弟子のアッサジに出会い、その爽やかで晴れ晴れとした托鉢(たくはつ)の姿を見て、「あなたは誰について修行をし、何を教わっているか」と問うと「師は、ゴータマ・シッダールタ(釈尊)で、物事には全てに、**因**(いん)があるとおっしゃっておられます」と答えると、すぐさま釈尊の本意を悟られ、親友であった神通第一といわれる目連(もくれん)およびサンジャヤの弟子二五〇人と共に仏弟子となったということです。

さて、アッサジが答えた因というのは、種(たね)と考えれば分かり易いと思います。物事の結果、例えば、花を咲かせるためには、種(**因**)が無くてはならないということです。しかも、種を容器に入れたままではだめで、土に埋めて、適度な水分と養分と温度と日照が満たされたとき、発芽をし、その後も、その植物にとって必要な条件(**縁**)がすべて整って初めて、つぼみを付けて開花するというわけです。

これは、人間も同じことで、自分という存在は、父母がいたということが直接原因ですが、今を生きているということは、その間、両親やそれに替わる人たちの加護があったということ、そして、衣食住があるということは当然のこととして、人間が人間らしく生きていくためには、さまざまな条件(縁・間接原因)が要求され、それが満たされているということです。

この因縁の教えは、仏教の根幹をなすものです。詳しくは〈**因縁生起**(いんねんしょうき)〉といい、略して**縁起**(えんぎ)といいます。〈縁起をみる者は法(真理)をみ、法をみる者は縁起をみる〉といわれます。それは、基本的には〈此(これ)有あるが故に彼(かれ)有り。此無なきが故に彼無し〉 、あるいは〈此生ずるが故に彼生ず。此滅するが故に彼滅す〉ということです。すなわち、あらゆる事象は、事象間の相互関係の上に成り立つものであり、不変的・固定的実体というべきものは何一つないという〈**無我**〉 、あるいは〈**空**〉の理念を理論的に裏づけるもの、それがこの縁起観であります

この考え方は、分析的でありかつ論理的であり、科学的な側面を持っています。ですから、宗教が超自然的なものであるということで、時に胡散臭(うさん)いものとして敬遠されることがありますが、仏教のこの縁起に関しては、そのようなところは微塵もありません。ですから、賢明であった舎利弗は、アッサジが話したその教えの一端を聞いただけで、道理に適った教えであることをすぐさま悟ったのだと思います。

話は換わりますが、日本を代表する実業家である稲盛和夫氏という方がおられます。氏は「経営に権謀術数は一切不要」といっておられます。企業経営には、策略や企みが不可欠だと感じている人は多いが、正々堂々と人間として正しいやり方を貫き、一日一日を懸命に生きさえすれば、未来は開け、運命は開けてくるということを信じ、実践してきたとおっしゃっておられます。また「動機善なりや、私心なかりしか」と、行動を起こすにあたっては、その動機に利己的な心はないかを、自分自身に問いかけるとおっしゃっておられます。

稲盛氏の信条は、 実に明快です。善因善果、悪因悪果、善いことを思い、善い行いをすれば、必ずよい結果がついてくる、逆に、悪いことを思い、悪いことをすれば、悪い結果が待っているという、縁起に基づくものであります。人間には、確かに、運命というものはあるが、運命に流され生きたのでは駄目で、世のためになること、人のためになることを心掛けていれば、不運を幸運に転換させる力となり、それはこれまで自らが信じ実践をしてきたことで、そして今の自分があるとおっしゃっておられます。人間が、世界が、宇宙が法に則り進化していく中で、私欲のために、それに逆らう悪い行

為をしたならば、当然よい結果は生まれないとも。

誰もが、稲盛氏のようにはなれませんが、その生き方に学ぶべきことは多いように思います。

50　不過三毒と「いただきます」（2021/5/01）

２０１３年、国際オリンピック総会で、滝川クリステルさんが、東京にオリンピックを招致するのに際して、心のこもった待遇や歓待を意味する「おもてなし」という言葉を、世界に向けて発信をしました。また、２００４年、環境分野として初のノーベル平和賞を受賞した、ケニアのワンガリ・マータイさんは、日本語の「もったいない」が、彼女の取り組む資源の有効活用を一言で表す言葉であり、さらに命の大切さや、かけがえのない地球資源に対する尊敬の念という意味を、次世代へ伝えるメッセージとして、「MOTTAINAI」を、環境を守る国際語とするよう提唱されました。ならばここでもう一つ、食前の言葉「いただきます」も、ぜひ国際語としていただけないものかと思うのです。

といいますのは、三、四十年程前の頃でしたか、テレビの西部劇などで、家族揃っての食事場面において、「神の恵みに感謝します。アーメン」と言っていたように記憶していたものですから、原語ではどういうフレーズになるのか、調べてみたところ、残念ながら、そのような言葉を見つけることができませんでした。今日の欧米諸外国の食前の言葉は、これから食べようとする相手へかける言葉であって、日本語の「いただきます」とはやや性格を異にするとありました。つまり、これらの言葉には、感謝の気持ちが含まれていないことを知り、少なからずがっかりさせられた訳であります。

では、日本語の「いただきます」は、どういう言葉なのかを考察してみることにいたします。

仏教において、宗派によっての違いは多少ありますが、食事も仏道修行として捉えていますので、食事の前に、まず、食事を提供してくださった施主に対しては、招福を祈願し、そして、一切の諸仏に対して、『般若心経』を読誦し、さらに心構えや感謝の偈文を唱えてからいただくという、作法が取り入れられています。

その全部についての詳細は省きますが、核となる心構えの偈文（げもん）として『五観』があります（括弧内は意訳）。

① **計功多少　量彼来処**　―　功の多少を計（はか）り彼（か）の来処（らいしょ）を量（はか）かる
（幾多の人々の尽力と、食材の命のことまで推（お）し量り感謝せよ。）

② **忖己徳行　全闕多減**　―　己が徳行の全闕（ぜんけつ）多減を忖かる
（この食事を頂戴するに値する行いを、自分はしているかを反省せよ。）

③ **防心顕過　不過三毒**　―　心を防（ふせ）ぎ過（とが）を顕（あらわ）すに三毒に過ぎず
（好き嫌らいを言って、欲張ったり残したりしてはならない。）

④ **正事良薬　取済形苦**　―　正に良薬を事として形苦（ぎょうく）を済（すく）うことを取る
（身体の健康をたもつ良薬として摂れ。）

⑤ **爲成道業　世報非意**　―　道業（どうごう）を成（じょう）ぜんがために世報は意にあらず
（単なる作法としてではなく、円満なる人格を形成するがための作法と心得よ。）

つまり、これらの思いを凝縮した一語が「いただきます」ということになります。

以前、ある学校で、給食費を払っているのにもかかわらず「いただきます」と言わせるのはやめて欲しいと、保護者からの要望があったということで、話題になったことがありました。「いただきます」は、食事に携わってくれた方々への感謝の気持ち、さらに、肉や魚は、野菜や果物も命あるものであり、そのような食材の命をいただくことへの懺悔と感謝の気持ちを表す言葉であるという本来の意

味が分かれば、このような発想は出てこないでありましょう。

また、近頃のテレビは、うんざりするほど毎日のようにグルメ番組を放映しています。それは、食事が、四六時中、三毒（貪（むさぼ）り・怒り・愚か）と関わる問題であるからでありましょう。食への不満が出たときは、「不過三毒：三毒に過ぎず」の言葉を思い起こすことが必要のようであります。「いただきます」は、「もったいない」と共に、仏教が基（もとい）となっていますが、けして、一宗教にとどまるものではありません。私ども日本人には再認識を、諸外国の方々には、いろいろな機会を捉えての啓蒙が望まれます。

51　蘒（せき）と蘒（にい）？（2021/6/01）

日本人が考える死後の世界は、あの世というのが主流です。それは仏教でいう六道輪廻、地獄極楽、浄土往生といった考え方とも渾然となっていて、その所在や様相、この世との関連など、漠とした曖昧さのまま、それで良しとしているところがあるようにみえます。そして、この世に怨念を持って死んだ者は、幽霊になったり悪鬼になったりして、この世にいる者に災いをもたらす存在になると考えられています。そこで、幽霊や悪鬼が悪さをしないように鎮魂の供養してあげれば成仏が叶い、一応、それで日本の場合は完結するわけです。

ところが、最近知って驚いたのですが、中国にはその先があるというのです。清の時代に、文人蒲（ほ）松（しょう）による神仙、狐鬼に関する物語や見聞を記した怪異小説集『聊斎志異（りょうさいしい）』には、「人は死んだら鬼になるが、鬼が死んだら蘒になる。人間が鬼を恐れるように、鬼は蘒を恐れる」 とあります。この字を書いて門上に貼っておくと、一切の悪魔鬼神を千里の外に追い払うというのだそうです。

日本にも、紙に真言密呪や神仏の名・像などを書いて、肌身につけたり、柱や壁に貼りつけたりしておくと、神仏が加護して種々の厄難から逃れることができるという護符・御札なるものがありますが、蘒の札には、中国人のイマジネーションの豊かさに感心するとともに、どこかユーモラスなところがあって面白いですね。

さて、その「蘒」ですが、この字は、多くの方は、おそらくこれまで目にされたことはないと思います。先ずもって、読み方が分かりません。漢字辞典で調べてみますと、部首である耳の音、

①漢音でジ（ヂ）、呉音では二と読む

②漢音でセキ、呉音ではシャクと読む

場合とかあり、それぞれ意味が異なるようです。

先に紹介させていただきましたのは、②後者の蘒（セキ）の方で、漢音で読みます。一方、①蘒（二）は、呉音で読み、仏教、特に禅門で用いられます。

「一字関（いちじかん）」といって、一字でもって修行者を指導することばがあって、よく知られているものに、「喝」があります。すなわち、師僧が、言語でもって仏法を説き明かすことの及ばぬ極意を、弟子に気づかせるためや、誤った考えを叱って反省させるときに発するものです。いわゆる、一喝、大喝、喝破するわけであります。これに近いものに「咦（いい）」「咄（とつ）」があります。

他にも、「露（ろ）」（…が明らかであるぞ、みよ）とか、「参（さん）」（考えよ）とか、「看（かん）」（みよ）といったものが用いられますが、「蘒（にい）」（それみよ、そこだ）も、同様な意味を待ったことばとして用いられます。

これらのことばは、葬儀の引導香語の最後で、「喝」あるいは「蘒」といって、娑婆世界を旅立つ故人を教え諭す詩偈を、導師が吐くという形式の中で使われています。ですから、禅宗の葬儀に参列された方でしたら、一度は耳にされているかもしれません。ただ、われわれ、死んでから「喝」

「瞽」といわれても・・・、という思いも確かにあります。そうかといって、即今それをいってくれるような人はいそうもないし、仮にいたとしても、素直に受け取れる自分ではないというのが正直なところでありましょう。

そこでです。随処において、自分自身に向かって、喚起を促すために発したらどうかと思うのです。例えば、不手際、失態のために落ち込んでいるときには、

喝！　歎難（かんなん）汝を玉にす。

また、私欲に駆られて、恥辱を味わうようなこととなったら、

咦！　身から出た錆（さび）。自業自得。

あるいは、死にたいくらいに苦しい思いになったときには、

瞽！　心に思うことかなわずとも、地獄の苦に比ぶべからず。

という具合にです。

われわれは、三毒、すなわち貪（とん）（むさぼり）・瞋（じん）（いかり）・痴（ち）（おろかさ）から、苦しみ、天狗になっていることに気づかずにいるものです。折々、喝（かつ）・咦（いい）・咄（とつ）・露（ろ）・参（さん）・看（かん）・瞽（にい）と、それぞれの場で自分で自分を叱り飛ばすことが大切であります。

52　咫尺千里（しせきせんり）（2021/7/01）

新型コロナウィルスの脅威は、いまだ収まっていません。①密閉空間、②密集場所、③密接場面という「三密を避けよう」が社会生活の規範となって 1 年余、この実践を心掛け早期の収束に努めたものの、ウィルスは急速に変異して収束が見通せません。国民の健康・医療不安、経済への影響そしてオリンピック開催を控え、高齢者のみならず若年層へのワクチン接種を加速して、一日でも早く集団免疫を獲得することが望まれます。

さて、互いの距離がぴったりとくっついていたり、はなはだ近い位置関係にある状態を「密接」といいますが、これに近いことばに「咫尺（しせき）」があります。「咫（あた）」という字は、「八咫烏（やたがらす）」「八咫鏡（やたのかがみ）」で目にされたことがあるかもしれませんが、親指と中指とを広げた長さ、中国古代王朝の周時代の長さの単位で「尺」が十寸として、「咫」は八寸に当たるということです。詳しいところはよく分かりませんが、「咫尺」は、大雑把に 20 から 30 センチメートルくらいのようです。次のような用例があります。

中国は盛唐の詩人李白（701～762）が、知入邸で屏風画の中の巫山（ふざん）を見ていたら、画中に巫山が飛び込んできて、眼前に十二峰の広大な世界が展開し、さなから本物の山に遊んでいるかのような心地になったと、詩に残しています。

疑うらくは是れ天辺の十二峰
飛びて入る　君が家の彩屏の裏
・・・・
高さ　咫尺　千里の如く

画中の山は、一尺に満たないが、千里の遠きにあるが如くであると詠んでいます。

また、こちらは日本、室町時代後期、永正 15 年（1518）に編集された『閑吟集（小歌の歌謡集）』に、恋人への思いを詠んだものでありましよう、次なる歌があります。

千里も遠からず　逢（あ）はねば咫尺も千里よなう

（逢えるなら千里だって遠くない。逢えないなら近くにいても、千里の距離があるように思える）

さて、ここにあって「咫尺が千里」、つまり、「咫尺＝千里」ということで表現されていますが、物理

的に見れば明らかに矛盾します。しかし、夢想空想の世界で遊ぶ、男女関係のようなものにおいては、けして矛盾しないのですね。たいてい誰もが、若いころ片思いに苦しむものですが、そんな経験を照らし合わせて考えてみれば、確かにそうであります。人間は、かような矛盾の中で生きている存在であるということでありましょう。

ところで、密接も咫尺も互いの距離のことをいうわけですが、その対象は何でもよくて、前述の李白の詩の場合は地理的距離であり、閑吟集の小歌の場合は男女間の距離ということになります。

ここで仏教に目を向けてみましょう。釈尊のお弟子に、阿難という人がいました。十大弟子の一人で、梵語ではアーナンダといい、経典によっては、阿難陀と表記されます。釈尊の従弟で、出家後、釈尊の侍者として二十五年間仕え、説法を聞くことが仏弟子中もっとも多く、「多聞第一」といわれています。原始仏教教団では、当初女性を入団させませんでしたが、釈尊の養母らの切なる願いと、阿難の取りなしにより、比丘尼の教団が認められるに至ったといいます。阿難は女性に優しく、美男子であったといわれ、女性からの誘惑も多かったようです。それが災いしてか、阿難は、釈尊のお側に仕えること長きにわたりましたが、釈尊生前中には、ついぞ悟りを得ることができなかったといいます。

弟子である阿難と、師である釈尊との距離は、常に非常に近かったにもかかわらず、求むべき悟リへの道は遠かったということになります。師弟関係においても、「咫尺千里」ということはあるということであります。

つまり、人間には、本来仏性が備わっているにもかかわらず、宝の持ち腐れとなっており、悟リへの道は「咫尺千里」であります。しかし、仏性さえ発現できれば、いな、阿弥陀仏の慈悲に気づき帰すれば、「此を去ること遠からず」、即この世が極楽、「天涯咫尺」となるということです。かの清少納言は『枕草子』で「遠くて近きもの、極樂、船の道、男女の中」と綴っています。

さて、その後の阿難は、発奮して大迦葉に就いて悟りを得、仏陀の教えをまとめる結集において、多聞第一であったところから「如是我聞」と、経典の書き出しは阿難が語る形式になっているとおり、とても重要な役割を果たしております。

53　智目行足（ちもくぎょうそく）(2021/8/01)

暑い日が続きます。今月は幽霊のお話です。幽霊の出る季節は、夏と決まったものではないでしょうが、経帷子（きょうかたびら）しか着ていないので、そんな白衣一枚の薄着で、冬の寒い季節に出ようものなら、風邪をひいてしまうというのは冗談として、怪談話やお化け屋敷は、やはり、お盆のこの時節が一番多いといえます。

一口に幽霊といいましても、似たようなものに、妖怪（ようかい）（化け物）と怨霊（おんりょう）がありますが、実は、それぞれには明確な違いがあるということです。

先ず、幽霊は、特定な人に恨みがあるなしにかかわらず、その人だけの眼前に現れるというものです。そして、何処（どこ）へ逃れようが、付きまとって逃れることはできません。

妖怪は、化け物、お化けともいい、この世に執念がある場合もない場合も、決まった場所に現れるというものです。ですから、そこに行くと、誰もが遭遇する可能性があるが、そこにさえ行かなければ、遇うようなことはありません。

一方、怨霊は、前者がただ人を驚かしたり怖がらせるだけであるのに対し、危害を加えるという点

で大きな違いがあります。しかも、特定な人ばかりではなく、その人の一族、あるいはその人の住む地域一体にまで及ぶこともあり、なかには、世代を超えて影響が続き、いわゆる祟（たたり）が、長期にわたることもあります。

幽霊に実際に会った人は、そう多くはいらっしゃらないと思いますが、およそのイメージを我々は持っております。といいますのは、江戸時代の有名な画家である円山応挙（まるやまおうきょ）が描いた足のない幽霊の絵が、あまりにリアルであったため、そのイメージが定着したからだといわれています。

幽霊の特徴として、足がないという他に、手がぶらりと胸のあたり、左右七三に下がっている、片目がつぶれて大きく腫れ上がっているといったものがあげられます。実は、これには仏教的根拠があって、『大智度論（だいちどろん）』の一節「智目行足もって清涼地に到る」に基づくものであるといわれます。

智目行足とは、仏道修行上の二大必須条件の智慧と行(実践)を、それぞれ人の目と足にたとえたことばです。智慧はものごとの道理・真理を見て行を導き、行はその智慧を具現化させるもので、両者は密接な相関関係にあるものだからして、仏道修行の先にある清涼地（安心（あんじん）・悟り・浄土・彼岸）へは、両者がともに備わって、初めて到達できるということであります。

ところが、幽霊は、智慧の目がつぶれていて真理・道理が見えていない上に、実践・行動するに必要な足がありません。しかも、手がぶらりと下がっていたのでは、物を持つこともできず、生活能力がまるで失われています。これでは、「行くところへ行けない、迷うたぞ、恨うらめしい」と、誰かに付きまとう外ないわけであります。

考えてみますに、目的意識がなく、何をして何処（どこ）へ行くかも分からずぶらぶらして、自らは努力することをせずして、このように迷うのは、「親が悪い、〇〇か悪い、社会が悪い、恨めしい」と、幽霊と同じようなセリフを吐いている輩（やから）が、現代社会には多くいるようであります。

ということは、この世にいても、不平不満を並び立て、自らの足で立とうとせず、依存することのみに頼っているような人は、生ける屍（しかばね）、幽霊と変わりないということになります。ただ、このような人は、生産性がなく、影が薄いのは当然ですが、積極的に危害を加えるようなことはありません。しかし、問題なのは、この世にも、それよりもっと厄介（やっかい）な怨霊と呼ぶべき輩がいるということです。

地下鉄サリン事件の他、多くの殺人行為を犯したオウム真理教も、世間に不満を持ち、自分たちに不都合なものは、殺人を犯してでも排除してもよいという、身勝手な集団であったことだけは事実であります。また、最近、「誰でもいいから殺してみたかった」といって無差別殺人を犯す、理解しがたい輩が出現するようになってきました。このような手合いは、生きながら怨霊と化しており、正に悪霊そのものといえなくもありません。

本来、幽霊・妖怪・怨霊は、死んでからなるものでしょうが、愚痴多く、不平不満ばかりで、恨みつらみを溜込むと、生きながらにして悪霊となって、他人を苦しめ、そして本人自身が、結果として一番苦しむことになります。そうならないためにも「智目行足」、全体を包括できる、公平な正しい智慧の目を見開き、「上求菩提（じょうぐぼだい）　下化衆生（げけしゅじょう）」、悟りを目指しつつも、衆生の救済に尽くす菩薩のフットワークを身につける努力が大切かと思われます。

54　忍辱（にんにく）（2021/9/01）

大変なコロナ禍、なかなか収まりそうにありません。社会生活、医療現場などいろいろなところで、弊害が起きております。家庭内でもストレスからどうしてもイライラしがちですので、お互い気を付けなくてはなりません。もっとも、このような状況下でなくとも、怒りっぽい人はなにかと厄介な存在であ

りますが、揶揄(やゆ)する格好の材料にはなるようで、春風亭柳橋六代目の演目としても知られる古典落語「天災」がありますのでご紹介いたします。

隠居の所へ短気で喧嘩っ早い八五郎が、「離縁状を五、六本書いてくれ」と飛び込んでくる。「かかあとババアにやって、あとは壁に貼っておく」という。隠居がよく聞くとババアは八五郎の母親のことだ。夫婦喧嘩で八五郎が女房を殴ったら仲裁に入り、女房の肩を持ったから蹴(け)とばしたという。

隠居も呆(あき)れたが、説教でもしようものなら拳骨の二、三つも飛んで来ようという相手だ。隠居は八五郎に、心学の先生の紅羅坊名丸(べにらぼうなまる)への手紙を持たせ、先生の話をよく聞いて来いと送り出す。

「やい、べらぼうに怠(なま)けるやつ出て来やがれ」と喧嘩腰でやって来た八五郎に驚いた紅羅坊先生だが、そこは名の知れた心学者、少しも動ぜず、

「ならぬ堪忍するが堪忍」、

「堪忍の袋を常に首に掛け、破れたら縫え、破れたら縫え」、

「気に入らぬ風もあろうに柳かな」

などと丁寧に諭(さと)すが、八五郎は混ぜっ返して面白がり一向通じない。

紅羅坊先生はそれでも根気よく、いくつもの例を上げて話し続ける。やっと、「何もない大きな原っぱで夕立にあったらどうする」で、八五郎はついに「天から降ってきた雨で、誰とも喧嘩しようもないから諦める」と降参だ。紅羅坊先生「そこだ、何事も天から降りかかったものと思えば諦めがつく。天の災(わざわい)と書いて天災と読む。何事も天災と諦めれば腹も立つまい」。やっと納得、得心した八五郎は、「今の話を誰かに聞かせましょう」と帰りかける。「茶も出さず、何のお構いもしないで済まん」と見送る紅羅坊先生に、八五郎「なに天が茶を入れねえ、天災と諦めればなんでもねえや」と、大きな進歩？だ。

長屋へ帰った八五郎は早速、女房に受け売りするが、頓珍漢(とんちんかん)なことばかりで女房にはチンプンカンプンだ。女房は、「そんなことより、熊さんが色を引っ張り込んだ所に、先妻が怒鳴り込んできて大変な騒ぎだった」という。

八五郎、これを聞くや絶好のチャンス到来と熊五郎の家に乗り込む。やっと騒ぎが収まって一段落したところに、また騒ぎの火種が飛び込んで来たと案ずる面々を尻目に、八五郎は仕入れてきた「天災」を披露する。

「奈良の神主、駿河の神主」、

「神主の頭陀袋、破れたら縫え、破れたら縫え」、

「気に入らぬ風もあろうに蛙かな」……。

何を言っているのか訳が分からんという熊さんに、八さんは奥の手を出す。「先(せん)のかかあが怒鳴り込んできたと思うから腹もたつ。天が怒鳴り込んで来たと思えば腹も立たない。これすなわち天災だ」。

熊さん。「なぁに、家(うち)へ来たのは先妻だ」……。

さて、八五郎のような怒りっぽい人というのは、身近にも結構いるものですが、その実、自分自身を振り返ってみれば、ストレスや不満をためているときには、他人に食ってかかって鬱憤(うっぷん)を晴らそうとするものの、言われた方もそうそう黙ってはいませんから、悪循環の末、事態は悪くなるばかりということになります。

『法句経』二二七番に、「アトゥラよ。これは昔にも言うことであり、いまに始まることでもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしく語る者も非難される。世に非難されない者

はいない」とあります。これは、アトゥラという人が、人から悪口を言われていることへの不満を漏らしたとき、釈尊がお答えになったお言葉です。

仏教では、忍辱（にんにく）ということをいいます。「辱（はずかしめ）を忍（しの）ぶ」ということです。人の悪口は、あっちからもこっちからも聞こえてきます。ちょっと褒（ほ）められたかと思うと、すかさずいい気になってどうのこうのと非難されます。紅羅坊先生の「天災」と諦めることも一法ですが、耐え忍ぶことも必要です。江戸時代後期の尼僧・歌人・陶芸家であった、大田垣蓮月尼の「花のころ旅にありて」と題した、「宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ぶし」という歌があります。朧月夜に野宿せねばならなかったことを、宿を貸さなかった人の「情け」として受け取っています。辱めを忍ぶところに、人間は味わいが出てくるものです。

55　豈容不去（あに去らざるべけんや）（2021/10/01）

自然の美しい景色は色々ありますが、中でも夕焼けは、地域を選ばず、どこでも見ることの出来る現象ですから、誰もがなにがしかの感慨や思い出を持っているのではないでしょうか。そして、その思いの中には、必ずと言っていいほど、『夕焼小焼』の童謡がどこかで結びついているような気がするのです。

夕焼小焼

中村雨紅作詞・草川信作曲

夕焼け小焼けで日が暮れて
山のお寺の鐘がなる
おててつないでみなかえろう
からすといっしょにかえりましょ
子供がかえったあとからは
まるい大きなお月さま
小鳥が夢を見るころは
空にはきらきら金の星

ここで本題に入る前に、夕焼け小焼けの「小焼け」って何だろうということが気になります。『日本国語大辞典』によると、「こやけ」は、語調を調えるために添えたものとあります。用例として、北原白秋の『お祭』という童謡の「わっしょい、わっしょい。真赤だ、真赤だ。夕焼小焼だ」という一節を載せています。こちらの作品の方が、古いということですから、北原白秋の造語の可能性もあります。ともあれ、「大寒小寒」、「仲よし小よし」のように、声に出して語呂のいい、気持ちよい響きを持つ言葉のようです。

さて、私共の年代の子供時代では、昼間しっかり遊んで、夕暮れになって帰るところは、親兄弟が待っている我が家です。そして、お風呂で汗や泥を流し、お母さんが作ってくれた夕飯を食べて、いっぱいお話をして、床に入ってすやすやと眠ります。子どもにとって、これこそが心が安まるいちばんの幸せです。

我々人間には、子どもの頃のこのような体験から、潜在的に両親の深い慈愛に抱いだかれて、心の平安、安心を得たいという願望があるものです。ですから、大人になってからは、宗教にそのような心の平安を求めようとするではなかろうかと思うのです。つまり、帰るべきところが、母の待つ我が家であったのに対し、仏さまが待っていて下さる、浄土に転換するということです。

そこで改めて、『夕焼小焼』の歌詞を見てみましょう。お寺の鐘の音は、釈尊の声です。おててつないでは、文字通り、共々皆といっしょにということです。からすといっしょには、あらゆる自然を含めて、世界全体が平和で安穏であるようにという願いです。そして、まるい大きなお月さまは、仏法の悟り、回心(えしん)の象徴です。阿弥陀如来を表すといってもよいかと思います。そして、まわりのきらきら金の星は、観音菩薩・地蔵菩薩・薬師如来・大日如来など、さまざまな仏さまも、それぞれが光り輝いているということです。

すなわち、この『夕焼小焼』は、子どもの平安な一日の終わりを美しく描き出していると同時に、娑婆に生きる我々が、信仰(大乗の教え)を拠(よりどころ)として得られる安らぎの一生を暗示しているともいえるのです。さらに、宗教学者の山折哲雄氏が他から聞いた話として、お寺の鐘の音「ゴーン」は、英語で表記すれば「go(行け)」と言っており、教会の鐘の音「カーン」は「come(来い)」と言っているのだとの指摘をされていました。たしかに、そう聞こえなくもありません。この「行け」、「来い」で思い出されるのが善導(ぜんどう)大師の『観経疏(かんぎょうしょ)』にある、「二河白道」の教えです。

これを絵図にした「二河白道図」が、当山の本堂にもあります。西に向かう一人、南に火の河、北に水の河、その中間に細い一本の白道があって、水火が猛然と押し寄せ、後方からは群賊や悪獣が迫ってきます。進退窮(きわ)まり、思案していると、東岸から「行け」という声、西岸から「来い」という声に励まされ、ついに西岸に達したというものです。

火の河は人間の瞋(いか)りや憎しみ、水の河は愛着や欲望、白道は浄土往生を願う清浄心、群賊たちは迷いから生ずる悪い考えなど、東岸の声は娑婆世界の釈尊の教え、西岸の声は極楽浄土の阿弥陀仏の呼び声に譬えたものです。

また、『観経疏』の別の章では、「仰ぎ惟(おもんみ)れば、釈迦はこの方より発遣(はっけん)し、弥陀はすなわちかの国より来迎したまう。かしこに喚(よ)び、ここに遣(や)る。あに去らざるべけんや」という一節があります。つまり、釈尊の「行け」、弥陀の「来い」との呼び声に、衆生である我々は「なんで行かないことがあろうか」というのです。まさに『夕焼小焼』の景色です。作者の意図の云々は別として、日本人には、そのような意識が潜在的にあるのだと思います。今度夕焼けを眺めるときには、ぜひそんなことも、思い起こしていただければと思います。

56　四弘誓願(しぐせいがん)(2021/11/01)

毎日、世界中の様々な情報が飛び込んできます。世界では、それぞれの国がそれぞれの問題を抱えつつ、自国の利益だけを主張しているようで、世界平和の理想からはどんどん遠のいているようにみえます。日本国内でも、詐欺まがいの電話やメールによる被害報道が連日続き、しかも、手口はだんだん巧妙になってきて、よほど注意していないと、本当に騙まされてしまいそうになります。

一方で、米国プリンストン大学の真鍋淑郎(まなべしゅくろう)氏が今年のノーベル物理学賞に選ばれたとの報道がありました。いまから 50 年以上前に「二酸化炭素が増えれば地球温暖化につながる」ということを世界に先駆けて発表し、気温や水蒸気の状況といった「大気の状態」と、海流や海水温の変化などの「海洋の状態」の相互の影響を考慮したうえで今後を予測する「大気海洋結合モデル」の開発などが評価されたとのことです。　日本人として誇らしい限りですが、詐欺をはたらく連中には、「少しでも、人の為になることに、頭と労力を使え」といいたいところです。しかし、聞いてすぐに正す人たちではなさそうです。かくのごとく、この娑婆世界は、掃きだめのごとく悪臭で満ちておりますが、過日尾畑春夫さんというスーパーボランティアと呼ばれている方の存在を知り、正に「泥中の白蓮

華」、その放つ芳香に魅了されました。尾畑春夫さんのプロフィールをネットで調べてみました。

「昭和 14 年大分県生まれ。小学校五年生の時に母を亡くし、農家に奉公に出る。中学校は四ヶ月しか通えなかったという。別府市、下関市や神戸市の魚店で修業を積み、東京で鳶(とび)と土木の会社で資金を貯めた後、昭和 43 年に大分で魚屋「魚春」を開業。地元の人気店だったが六十五歳の時に惜しまれながら閉店。以後世の中に恩返しをしたいと、ボランティア活動に専念する。活動資金は年金収入だけ。お礼は一切受け取らず、車中泊をしながら全国の被災地を回っている。東日本大震災の際は、南三陸で五百日にわたって活動。平成 30 年 8 月には山口県周防大島町で行方不明となった二歳児を発見し、一躍時の人となった」、とあります。

『法句経』二九〇番に「ささやかなるたのしみを棄てて、若(も)し大いなるたのしみを得んとせば、かしこき人は、彼岸(さとり)の大楽(たいらく)をのぞみて、小さきたのしみを棄てさるべし」とあります。人間は、どうしても豊かな衣食住や名誉を望みたくなりますが、それは小さな楽しみに過ぎず、もし、もっと大きな楽しみを得たいと思うならば、小さな楽しみは捨てなさいというのです。

小さな楽しみは「欲望」ですが、大きな楽しみを求めることは「誓願(せいがん)」といいます。仏道を求める菩薩の誓願には四つあります。

①衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）
　数かぎりない人びと（衆生）をさとりの彼岸に渡そうという誓願
②煩悩無辺誓願断（ぼんのうむへんせいがんだん）
　量り知れなくある煩悩を滅しようという誓願
③法門無尽誓願知（ほうもんむへんせいがんち）
　尽きることのできない仏法の深い教えを学びとろうという誓願
④無上菩提誓願証（むじょうぼだいせいがんしょう）
　無上のさとりを成就したいという誓願

これを「四弘誓願(しぐせいがん)」といいます。尾畑春夫さんの活動は、この四弘誓願の実践そのものといえます。見返りを求めず、人々のために尽くす菩薩の姿です。ただ、「幼くして別れた母親に、背骨が折れるほどに抱きしめてもらいたい」と、涙を流してインタビューで語っておられました。尾畑さんにとって、お母さんは、観音様なのでありましょう。

誰しもが誓願を持つことは、なかなかかなわないかもしれません。しかし、「随喜(ずいき)」といって、他人が善いことをしているのを見聞きしたとき、喜びの心を持つことはとても功徳があると仏教では説いています。仏様に喜んでいただける、自分にできることを、その都度行っていくことが大切なのであります。

57　真是諸仏子（まことにこれ諸仏の子なり）（2021/12/01）

人間はこの娑婆世界で、なんだかだいいながら生活しておりますが、自分という存在は、当然他人とは違います。では、自分が自分を意識し出すのは、何時くらいのことなのでしょうか。幼少期のことは、大方忘れてしまっていますが、自分が、お母さんとも、お父さんとも、兄弟姉妹とも、友人とも違う、自分というものをはっきりと意識するようになるのは、だいたい十歳頃なのだそうです。その一つの証(あかし)として、自分のことを表現する場合、「〇〇ちゃん」、とか「〇〇くん」といっていたのが、「わたし」「ぼく」「おれ」のようになるということがそうだというのです。

つまり、この頃から大人になるための準備期間が始まるというわけです。そして、しばらくすると思

春期、さらに青年期という過程を経ていくことになり、親にとっても子どもにとっても、何もかも未経験なことばかりでありますから、戸惑うことも不安になることも多々出てくる、非常に難しい時期を経験して、人間は大人になっていくということであります。

ところで、日本においては、そのような成長の段階を、親も子どもも自覚を促すための儀礼の一つとして、「七五三」があります。『広辞苑』には、「男子は3歳と5歳、女子は3歳と7歳とに当る年の11月15日に氏神に参詣する行事。七五三の祝い」とあります。

その発祥は、関東地方ということで、江戸時代、数え年3歳までは髪を剃る習慣があったため、それを終了する儀式として「髪置きの儀」、数え年5歳、男子が袴を着用し始める儀式として「袴儀」、数え年7歳に、女子が幅の広い大人と同じ帯を結び始める儀式として「帯解きの儀」というのが、その由来といいます。一人前以前として意識されていた幼児が、この時期に氏子入りをして、社会の成員になる祝いの日であったということです。

一方、関西地方では、「十三詣り」、あるいは「十三参り」といって、3月13日から5月13日に、男女とも数え年13歳でおこなう祝いがあります。子どもの多福・開運を祈り、小学校を卒業して中学校に入学する春に、寺社に詣でる形式が一般的ということです。特に京都嵯峨の虚空蔵法輪寺における虚空蔵菩薩への「十三参り」は有名で、虚空蔵菩薩は、十三仏の中で十三番目に当たり、智恵と福徳の菩薩とされ、これに因み、「知恵詣り」または「智恵もらい」とも呼ばれています。

さて、われわれは、このようないくつかの段階を経て、一人前の大人として仲間入りをしてゆくわけですが、これはあくまで形式的な通過儀礼であって、本人の精神面での成長なしには、自立した大人とはいえないでありましょう。

では、一人前の自立した人間の大人とは何かを問う場合、はっきりとした定義があるとはいえませんが、仏教者としての立場からすれば、正しい道徳心や宗教心を持つことであると考えています。また、何をもって正しいとするかは、仏教徒であればその教えを護るということになります。

ただ、それは難しい教義がどうのこうのということではなく、先ず、三帰依文「南無帰依仏・南無帰依法・南無帰依僧」（私は仏法僧の三宝に帰依します）と3度唱えます。これは、出家も在家も戒を受ける際の基本的条件であります。そして、在家であれば、不殺生（生命のあるものを殺さない）、不偸盗（与えられないものを取らない）、不邪淫（みだらな男女関係を結ばない）、不妄語（いつわりを語らない）、不飲酒（酒類を飲まない）という五つの戒（徳目）を、遵守することを心に誓ます。

『梵網経』に、「衆生受仏戒、即入諸仏位、位同大覚已、真是諸仏子」とあります。つまり、仏法僧の三宝に帰依して、五戒を授かれば、それは仏の子となるとあります。われわれ、精神面で大人になる過程において、「仏の子」の自覚は、とても大切であります。この「我は仏子」の自覚があれば、他から強制されなくとも、自らを戒めて五つの徳目を実践する間に、優れた生活習慣が身についてくるものであります。

親御さんには、子どもの成長過程の中で、是非ともこの「我は仏子」の自覚が持てるような子育てを心掛けていただきたいものです。そして同時に、親御さん自身も「我が子は仏子」と信じて、見守っていただけたらと思います。

58　福楽（2022/1/01）

新たな年の幕開けです。コロナ禍の下で迎える二度目の新年です。今年こそ収束して幸せな日常生活を期待したいものです。さて、人間、幸福を願わない者はいません。しかし、「禍福は糾える

縄なわの如ごとし」といいます。つまり、禍(わざわい)と福(しあわせ)とは、あい表裏して変転するものであり、不幸を嘆いていると、それがいつのまにか幸福となり、幸福を喜んでいるとまたそれが災いに変わるという具合に、めぐりめぐることが、ちょうど、より合わせた縄のようであるというのです。そう、人生は、一筋縄ではいかないということでありましょう。

3 年ほど前に、「幸福とは何か？」ということを、改めて考えさせる事件がありました。日産自動車の元 CEO のカルロス・ゴーン氏が、5年間で約 50 億円もの報酬を隠し、さらに、投資資金の不正流用や経費の不正使用などを告発されて逮捕、しかしその後、音楽機材のケースに身を隠して、密かに海外へ逃亡した一件です。

ゴーン氏は、三菱自動車とルノーからも報酬を得ており、年俸は合算で 20 億を超えるといわれています。これだけでも、気が遠くなるような金額ですが、なおも不正に流用していたお金が、何億、何十億もあったと聞くと、われわれ庶民には、想像を遙かに超えた世界での話ということになります。

「幸福とは何ですか？」と問われた場合、多くの人は、「お金！」と答えます。友松圓諦師だったと思いますが、「お金は、欲望を満たすバッテリーとかコンデンサのようなものだ」とおしゃっていました。確かに、携帯電話やスマフォのバッテリー容量の％表示が少なくなってくると、不安になるのと同じように、どうしても、少しでも多く蓄えておこうとするのであります。しかも、人間の欲望は際限がありませんから、たとい「黄金の雨を山のように降らすとも満足することはない」といいます。結局のところ、お金は、必ずしも幸福だけをもたらしてくれるものではなく、むしろ、さまざまな災いの誘因となり、かえって、ゴーン氏のように、不幸に陥ることも稀（まれ）なことではないということです。

では、改めて「幸福とは？」を考えてみるのですが、4 年ほど前ですが、心琴(しんきん)に触れるような体験がありました。娘が、二人目の子を出産したのですが、当然ながら、しばらくは入院しなくてはなりません。上の子は、2歳半で男の子です。出産当日、病院に連れて行き、母親と生まれたばかりの妹に対面させて、エレベーターのところで別れるまではよかったのですが、自分の今置かれている状況が次第に分かってきたのか、だんだん泣き顔になってきました。

車に乗せ、動き出したらもういけません。「ママ、ママ」と大泣きが始まりました。そのうち、泣きながらしゃべり出したもので、耳を澄まして聞いていましたら「ママ、手がばっちー（汚れている）から、手をふいて」と、何度も何度もいっているのです。

つまり、小さな彼にとって、大好きな母親から手を拭ぬぐってもらうこと、それが「幸福」だったのであります。お金でも物でもなく、それとは全く無縁の世界です。しかしそれは、幼児であるからというわけではなく、大きくなっても、いや、大人になっても、恥ずかしくていわないだけで、それぞれ人により違いはありましょうが、愛情と感ずる行為を、好きな人から、いつも受けたいと思っているものであります。そして、その行為をしてもらったときに、われわれは「幸福」になります。ところが、親子、兄弟姉妹、夫婦、友人といった親しい仲にあっても、上手に愛情要求の発信が出来る人もいれば出来ない人もいます。また、相手が、いくら発信していても、受け取る側がそれに気付かなかったり、突っぱねたりして、互いがかみ合わなければ、どちらもが「不幸」になってしまいます。

われわれは一人で生きているわけではありませんから、コミュニケーションはとても大事です。ところが、相手のことを思わず、手前勝手な物の考え方しか出来ないというのが、われわれ凡夫(ぼんぶ)であります。そこからは、「幸福」は生まれません。『法句経(ほっくきょう)』は次の2句から始まります。

1、ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも、汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人に付き従う。

……車をひく（牛）の足跡に車輪がついてゆくように。

2、ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福楽はその人に付き従う。

……影がそのからだから離れないように。

（中村元訳）

どうか、皆さまに「福楽」が寄り添いますよう、祈念いたします。

59　福分け（2022/2/01）

暮れに、大小さまざまのミカンを頂戴しました。よく熟していて美味しそうな一つを手にとったところ、少し痛んでいました。そこで、冬鳥の餌にでもと思って、包丁で真横に半分に切って、庭の椿の木に刺しておきました。翌日、覗（のぞ）いてみましたら、きれいに皮だけ残して実がなくなっていました。多分、メジロあたりの小鳥が来て、食べていったと思われます。このように、自分が頂いたものを、他に分けてあげることを、お裾分けといいます。『広辞苑』には次のように記載されています。

・すそ-わけ【裾分け】 もらいものの余分を分配すること。また、利益の一部を分配すること。おすそわけ。日葡辞書「スソワケヲスル、また、イタス」。浮世風呂（前）「一ぱい―をしてくりやれ」

ここで、『日葡（にっぽ）辞書』とあるのは、1604 年頃に長崎で発行された日本語ーポルトガル語の辞書と言うことですから、裾分けは江戸時代以前から使われていた言葉ということが分かります。

ただ、この好ましい習慣ともいえる裾分けですが、あながち、善意で行われるとはかぎらないことがあります。たとえば、自分にとって要（い）らないものを、在庫処分のような形で押しつけるというものです。これでは、もらった方ではありがた迷惑ということになってしまいます。

大乗仏教において、求道者（ぐどうしゃ）が実践すべき徳目として、皆さまご存じの六波羅蜜（ろくはらみつ）があります。①施しを与える（布施）②戒律を守る（持戒）③苦難を耐え忍ぶ（忍辱）④たゆまず仏道を実践する（精進）⑤精神を統一させる（禅定）⑥真理をみきわめ、悟りを完成させる智慧をみがく（智慧）。

また、人々を仏教に引きつけ導く方法として、①布施（教えや財物を与える）②愛語（やさしい、いたわりのある言葉をかける）③利行（人々に利益を与える。人々のためになる行いをする）④同事（救うべき相手の立場に同化して助けの手をさしのべる）という四摂事（じしょうじ）、あるいは四摂法（ししょうぼう）が原始仏教以来より説かれています。

ここで共通しているのは、布施です。しかもこの布施は、ただ上げればそれでよいということではありません。前述のように、要らないものを押しつけたり、相手に見返りを期待したり、また、与えるものが不正・不当なものであったのでは、かえって相手に不利益を被（こうむ）らせることになってしまいます。ですから、布施する主体（施者）、布施する相手（受者）、布施する物品（施物）の三つが、清らかなものでなくてはならないという「三輪清浄（さんりんしょうじょう）の布施」が布施の基本と教えています。

裾分けでも、このような布施の精神、つまり、慈悲の心がこもったものでなければいけないということです。だからでしょうか、「福分け」あるいは「福渡し」という言い方があります。いい言葉だと思います。

余談になりますが、「裾分け遺贈」なる遺言の方法があるそうです。「Aに全ての財産を遺贈する。Aは、取得した財産のうちの一部をBにも分け与えること。持分は、Aの意思に任せる」というものです。ここにも、福分けの精神は不可欠でしょう。

最後に、『おいもをどうぞ！』（柴野民三原作、いもとようこ文・絵、ひかりのくに刊）という絵本を紹

介いたします。初版は 2005 年ですが、もう何十回も重版されている人気の作品です。次のような内容になっています。

クマさんの畑で、おいもがどっさりとれました。「こんなにいっぱい、ひとりで食べてはもったいない。おとなりのブタさんにもわけてあげましょう。ブタさんもおいもが大好きだから。」
もらったブタさんは、おおよろこび。「こんなにたくさん、ひとりで食べてはもったいない。おとなりのタヌキさんにもわけてあげましょう。タヌキさんもおいもが大好きだから。」
そして、同じようにタヌキさんはウサギさんへ。ウサギさんはネコさんへ。ネコさんはネズミさんへ。ネズミさんは、もらったひとつのおいもを包丁で半分に切って、クマさんの家へ持って行きました。「いただいたものです。どうぞめしあがってください。」
クマさんは、半分のおいもを見ながら、目をほそめました。そして、なんどもうれしそうにうなずきました。……

何とも心がほっこりする絵本です。まわりみんなが、このようにお互い福分けしあえるような人間関係が築けたらいいですね。

60　柳緑花紅(やなぎはみどり　はなはくれない)（2022/3/01）

数年前の年末に、松竹梅と南天を寄せ植えした盆栽を頂戴しました。水やりこそ毎日していましたが、施肥をしたことはなく、剪定(せんてい)も適当に、伸びた枝を摘んだぐらいですが、今年、梅が五つほど可愛らしい蕾(つぼみ)をつけてくれました。二月中旬、まだ蕾は固いですが、童謡の「春よ来い」のみいちゃんではありませんが、紅く咲いてくれるのを心待ちにしております。
早春、梅が咲き、やがて桜が咲き、柳が芽吹くというのは、自然の営みで、当たり前といえば当たり前なことで、何の不思議なことがあるわけではありません。しかし、「雨ふり」、「待ちぼうけ」、「からたちの花」などの童謡や詩集『邪宗門』などで有名な北原白秋に「薔薇(ばら)二曲」という詩があります。

一
薔薇ノ木ニ
薔薇ノ花咲ク
ナニゴトノ不思議ナケレド
二
薔薇ノ花
ナニゴトノ不思議ナケレド
照リ極マレバ木ヨリコボルル
光リコボルル

後に、白秋は、この詩を自身で次のように解説しています。
「薔薇の花が咲くのは、実に驚嘆することではないか。この神秘はどこから来る。この驚きを驚きとする心から、宗教も哲学、詩歌、自然科学も生まれて来るのではないか」と。
当たり前なことを、当たり前なこととして見過ごしていたのでは、何も生まれてこないということです。確かに、ニュートンは、リンゴが木から落ちるのを見て、万有引力の法則を発見したといわれますが、

詩人の目も科学者の目も、何気ない自然の働きを驚きの目をもって見つめているということであり、そこから、文学も科学も生まれるということです。そして、自然の摂理、ひいては、自分という人間が、この世に今生きているという、この摩訶不思議な現象の探求こそが、哲学であり、宗教であるということです。

北宋時代の詩人、蘇東坡の詩の一節に「柳は緑　花は紅　真面目」とあります。一休禅師の歌には「見るほどにみなそのままの姿かな　柳は緑　花は紅」、また、沢庵禅師は「色即是空　空即是色　柳は緑　花は紅　水の面に　夜な夜な月は　通へども　心もとどめず　影も残さず」と詠んでいます。つまり、普段は、気にも留めない、柳が緑であること、花が紅であるということは、仏法の根本思想である、諸法実相あるいは諸法無我を具現しているというのです。

柳は緑の葉がしだれ、花は紅く咲くということは、それがそれぞれの個性であり、それぞれが、それぞれに存在意義を持っているということです。ところが、人間は、個性に優劣をつけて、ときに慢心したり、嫉妬や卑下したりと、心に落ち着くところがありません。しかし、柳の葉はただ黙して風になびき、花は咲き誇っているだけです。

さらにまた、翻ってみれば、柳が柳として緑の葉をなびかせていられるのは、花が紅く咲いてくれるからであるといえなくもありません。当然、その逆もいえるわけで、あなたがいるから、わたしがいるのであり、わたしがいるから、あなたがいるということです。そして、柳を柳として、花を花として、わたしをわたしとして、そうたらしめているのは大地であり、水であり、空気であり、ありとあらゆる存在との関わりによってであるということです。

このような仏教の差別即平等・空・因縁に基づく考え方によって、かけがえのない自分という存在は、あるがままを、精一杯に生きることこそが大切であると教えていただけるということです。ただ、それは、けして、不平不満を我慢して、現状に甘んじるがよいということではありません。

以前、もう三十年も前になりますか、教員を退職した春の歓送迎会に出席するため、駅をお降り、赴任していた学校までの道すがらに見た花々は、光り輝いていて、あれほど美しいと思ったことはありませんでした。もちろん、年々歳々、柳は緑、花は紅のはずですが、わたしには見えていなかったということです。まずは、柳は柳の、花は花の美しさの発見に心がけたいものです。

61　古今無二路（古今に二路なし）(2022/4/01)

春の花が咲き始める季節になりました。新しい年度の幕開けでもあります。若い人たちにとりましては、これから歩み始める道が新鮮に見えていることでしょう。一方、初めて踏み行く道でありますから、不安も大いにあるものと思います。

私を含め老人になりますと、もうおぼろげに到達地点が見えていますから、これから行く道の選択肢は限られたものしかありません。しかし、若者はこれから行く先々、いろいろな場面々々で、選ぶ道の選択を迫られることになり、大いに迷うこともあります。自分の目の前にはいくつもの道があるわけですから、そのまま真直ぐ行くか、右に行くか、左に行くか、はた後戻りするか、迷うのは当然です。

しかし、禅語に「古今無二路（古今に二路なし）」という言葉があります。今も昔も、自分が通れる道は一筋しかありません。人生の岐路、例えば進学や就職など進路を決めるとき、本当に判断に迷う場合がありますが、選べるのはただ一つだけです。

心理学の分野で語られる寓話に「ビュリダンのロバ」というのがあります。おなかを空かせたロバが、

左右二方向に道が分かれた分岐点に立っており、双方の道の先には、まったく同じ距離、同じ量や質の干し草が置かれていた場合に、ロバはどちらの道も進むことができずに餓死してしまうというものです。これは、フランスの哲学者ジャン・ビュリダン（1300 頃～1358 以降）が、理性や理論に頼り、合理性のみで選択を考えていると判断に窮することを示すためのものだとされています。本当にビュリダンの言葉かどうかは明確ではないようですが、現在でも、選択判断の重要性を問う際に、よく引用される譬話であります。

ここで問題となっているのは、「選択の壁」と言うことです。

第一の壁は、干し草への距離、量や質が全く同じということで、選択の因子が見つけられないということです。

第二の壁は、仮に一方を選択したとして、後で「別の道の方が良かったのではないか」と、後悔するのではないかという不安です。

そこで、これから人生の岐路に立ったとき、選択に窮して「ビュリダンのロバ」のように死んでしまったのでは、本も子もないですから、「選択の壁」をどう乗り越えれば良いかを考えてみましょう。

第一の壁である選択の因子が見つけられない場合、ここで再び、「古今無二路（古今に二路なし）」に戻ってみましょう。実はこの句の後には、「達者共同途（達者共に途を同じくす）」と続きます。要するに、達観している者は、賢者といってもよいでしょうが、同じ道を行くというのです。真理を目指す方法は何通りもあるように見えても、結局は、選び進むべき道は、一本しかないと言うことです。

つまり、三毒煩悩、自分の好むものをむさぼり求める貪欲、自分の嫌いなものを憎み嫌悪する瞋恚、ものごとに的確な判断が下せずに、迷い惑う愚痴によって、曇って視界が晴れない眼には、あれこれ迷わせているものがありすぎて、差が見えていないが、実のところ、仏さまの眼をもってすれば、選択すべき一本の道は、明確に見えていると言うことです。

人間は、どうしても損得感情で判断しやすいので迷うのです。ですから、難しいことはさておき、迷ったときには、「仏さまは、どちらを選んだら喜んで下さるか」を考えることです。それが、多少苦難を伴うものであったとしても、そちらを迷わず選ぶこと、それが、必ずやよい結果をもたらしてくれると思うのです。

しかし、われわれ凡夫は、それでもなおかつ、選べないことがあるかもしれません。そうした場面においては、「好きだから」「直感で閃いたから」ということは、案外重要なことです。さらには、籤を引く、棒が倒れた方、サイコロを振る、易占による、神仏の託宣を仰ぐといった方法も考えられます。なんとも前時代的なことをと思われるかもしれませんが、先人たちの多くは、このような方法で一本の道を選んできました。当山におきましても、門を入って直ぐの「重軽地蔵」に、伺いを立てに来られる方が結構おられます。

次は、第二の壁についてです。どのような手段であれ、選んだ道を必然と受け止め、しかも、意思決定をして自らが選んだからには、全リスク、全責任は自らが当然負うという覚悟を持てば、後悔するということはけしてありません。

62　久遠（くおん）（2022/5/01）

『法句経』六十番に「眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い」という一節があります。しかし、一日は二十四時間で、一時間は六十分、一分は六十秒と定まっており、刻々と過ぎ

ていくものであり、人によって、また状況によって長短があるわけではありません。それを、長く感ずるというのは、先ほどの『法句経』の後半に述べられる「正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い」ということになるのでしょう。

私どもは、心身共に充実していて、事が上手くいっているときには、時が経つのを速く感じますが、何か障があって上手くいっていないときには、遅く感じて苦痛が伴います。今、人生百年時代といわれます。われわれ、百年という寿命を、持て余すことなく生きることができるでしょうか。政治家にももちろん政策で頑張ってもらわねばなりませんが、自分自身の問題であると同時に、百年を生きるには他人の力を借りずには適わないことも確かです。「どうにかなるさ」と安易なつもりでいたのでは、本人には自業自得としても、他人を巻き込んで、多大な迷惑を掛けることになりますから、誰もが若いうちから真剣に考えておかねばなりません。私の父は九十五歳、母は九十三歳、百歳までは生きられませんでしたが、人間はどのようにして老い、そして、どのように死ぬかということを、身をもって教えてくれたと思っております。全ての人にとって、両親は、自分を育ててくれた恩があるということは当然のこと、人生を全うし浄土に向かう姿を見せてくれる大事な存在であるということも、ぜひとも忘れないでおきたいものです。

さて、私どもは、先が見通せないものには不安を覚えます。杞憂という言葉があります。中国の杞の国の人が、天が崩れて落ちることはないかと心配したという故事です。あれこれといらぬ心配をする、取り越し苦労することをいいますが、大なり小なり、われわれは、展望が見渡せない将来に不安を抱いて杞憂し、神経をすり減らしています。

物事には、始めがあれば終わりがあると、普通は考えます。自分に置き換えると、自分の始めは生まれたことであり、終わりは死ぬことです。その死に至る過程と、その先のことが、われわれには展望できません。そこで不安になり、あれこれと杞憂が始まります。

一神教の世界観の場合、神が天地を創造し、何時か分かりませんが最後の審判が下り、善人は永遠の祝福に、悪人は永久の刑罰に定められて終決するといいます。これでは、神に怯えることはあっても、不安を払拭するまでには至らないように思えます。

科学の場合は、今から約 138 億年前、超高温・超高密度状態のエネルギーが大爆発し、急膨張、そして急激な温度降下の過程で、今日の宇宙ができたとするビッグバン理論が有力です。つまり、宇宙にも始まりがあるということで、してみると終わりがあるということになります。これまた、凡夫には杞憂の種となります。

ところが、仏教では無始無終を説きます。因縁生起を考えれば当然そうなります。われわれ衆生が、因と縁によって生死を繰り返して輪廻すると同様に、世界・宇宙も輪廻すると考えます。成立する期間を成劫、持続する期間を住劫、壊滅に至る期間を壊劫、次の世界が成立するまでの何もない期間を空劫、この「成住壊空」という四劫を繰り返すというのです。すなわち、始めもなければ、終わりもないということになります。

劫というのは、とてつもなく長い宇宙論的時間の単位で、四劫（成住壊空）という大きな流れの中で、自分という存在の生死は、ほんの僅かな一現象に過ぎません。しかし、久遠という仏語を考えてみるとき、類語の永久、永遠、恒久などとは違って、現在からみて遠い未来、あるいは遠い過去のこともいい、今現在の自分は、遠い未来と遠い過去とが、四劫という輪廻の枠組みの中でつながっていると考えられます。してみれば、われわれは、久遠の命を持っているといえましょう。われわれ、一寸先が見えないと思い悩みますが、久遠の命の中を生きていると考えれば、まさに杞憂に過ぎません。ただ、久遠の命の糸が綻ばぬよう、善因善果（良い行いをすれば、それが元となって、必ず

良い報いがある）、悪因悪果（悪い行いをすれば、それが元となって、必ず悪い報いがある）、そのことだけを心掛けて百年の命を全うしたいものです。

63　徳不孤　必有隣（とくはこならず　かならずとなりあり）（2022/6/01）

野球の話をします。ただ、私は頂いたチケットでしかナゴヤドームには行ったことがないという不届きな野球ファンですから、そのあたりは割り引いてお読み下されば と思います。

野球は、ご存じのとおりベースボールの訳語で、日本では、1873 年（明治六）に開成学校でアメリカ人教師が生徒に教えたのが最初だといいます。あの正岡子規が野球好きで、バッターを打者、ランナーを走者、デッドボールを死球、フライを飛球と翻訳をしたということです。ちなみに、野球と命名したのは、中馬庚（ちゅうまんかなえ）だそうで、第一高等中学校の卒業時、出版する『ベースボール部史』に初めて野球という語を使ったとのことです。この功績が認められて、文化人としては珍しく、この二人は野球殿堂入りを果たしています。

日本における野球の歴史は、まだ百五十年程ですが、プロスポーツ観客動員数は、断トツの一位で、国民的スポーツといってもよいでしょう。 だからでしょう、野球はアメリカ発祥のスポーツですが、日本的な要素が随所に加わってきているように思われます。それは、たとえば、加点のために、送りバントを多用するといった戦術的なものばかりではなく、野球に取り組む心構えのような精神面のことも見逃せないように思います。

日本では、芸事においても茶道・華道・書道・歌道・香道等のごとく、ひっくるめていえば芸道、また、体を使う武道となると柔道・空手道・合気道・剣道・弓道・相撲道等のように、技量だけでなく、精神の鍛錬も必要であるといった、心技一体を旨とするところがあります。ですから、極端な話、人を殺（あや）めることを生業（なりわい）とする武士が、忠誠・犠牲・信義・廉恥・礼儀・潔白・質素・倹約・尚武・名誉・情愛等を重んずる武士道という精神的高みを目指したということも、仏教や儒教を土壌とした日本的精神文化の特色といえるのではないでしょうか。

まだ歴史の浅い野球ですが、自ずと日本の風土に溶け込んで、武道の一環として、野球道といってもよいものが、形作られてきているといってもよいでしょう。思うに、その野球道の体現者と呼べるのは王貞治ではないでしょうか。そして、その後継者は、言わずもがな、イチローでありましょう。そのイチローが、生涯米大リーグ、マリナーズにとどまることとなり、このときの会見で、「自分は、野球の研究者でありたい」と述べていたのが印象的でした。剣豪宮本武蔵は、六十歳の時に『五輪書』を著して武士道の神髄を体系づけました。イチローは、野球道の宮本武蔵を思わせます。

そしてもう一人、衣笠祥雄（さちお）を忘れてはならないと思います。彼の背番号が 28 であったことから、漫画の『鉄人 28 号』にちなんで、鉄人の愛称で親しまれましたが、その名が示すとおり、2215 試合連続出場という、素晴らしい記録を打ち立てました。もちろん、頑強な体であったということもありますが、死球を受けて骨折していても、休まず全力を出し切るという姿勢は、見るものに感動を与え続けてくれました。

野球界には、これまでに殿堂入りを果たしているような功労者と呼べる方々は、少なからずいらっしゃいます。しかし、王貞治・衣笠祥雄・イチローは、タイプは三者三様それぞれ違いますが、野球道における求道者（ぐどうしゃ）としての資質を持つ、数少ない選手であったといえます。共通して言えることは、野球に対して真摯であるというところです。ただ、その一途（いちづ）さが、修行僧のような、禁欲的・ストイックな面を持つところとなり、凡人は近寄りがたくなり、現実、有象無象と群れるということはなく、友人や

信奉者は多くとも、本人自身は、孤独を好む傾向にあると聞いたことがあります。『論語』の「徳不孤、必有隣（徳は孤ならず、必ず隣あり）」は、そのあたりのことをいうのではなかろうかと思います。

ところが、今注目を浴びる大谷翔平は、ベーブルース以来の投打の二刀流を見事に使いこなし、それでいてストイックさを感じさせず、先人の三選手とはまた違ったタイプです。とにかく明るく、チーム及びファンと共に野球を楽しんでいるように見えます。彼はまだ若いですから、今後どのような選手になっていくのか、とても興味があります。仏教が、小乗から大乗へと進展を見せたと同じようなことを、彼に期待するのは、ただ私だけでしょうか。

64　獅子吼(ししく)（2022/7/01）

仏教美術において、獅子は、智慧を司る文殊菩薩の乗り物として登場します。獅子はライオンと同義ですが、その姿は、写実的なライオンとは様子が違います。デザイン的にその変遷をみると、中国の唐代（七～十世紀）の頃から、空想的な要素が取り入れられて、唐獅子（からじし）と呼ばれるものが一般化したということです。日本においてもその影響を受け、仏具や襖絵などの図柄に用いられるのはこの唐獅子で、中でも牡丹（ぼたん）と組み合わされた唐獅子牡丹が定番化されました。

余談になりますが、獅子は、百獣の王といわれます。だが、その無敵の獅子でも、ただ一つ恐れるものがあり、それは獅子身中の虫であるといいます。体毛の中に発生するその害虫は、増殖し、やがて皮を破り肉に食らいつくのです。しかし、この害虫は、牡丹の花から滴り落ちる夜露にあたると死ぬといいます。そこで獅子は、夜は牡丹の花の下で休みます。獅子にとって、牡丹の下は安住の処であるというわけです。

余談のついでにもう一つ。襖絵などの図柄に、竹に虎があります。虎も獅子に負けず劣らず猛獣ですが、巨大な象にはさすがに敵いません。そこで、象が侵入できにくい竹藪に逃げ込めば安全というわけです。つまり、虎にとって、竹林は安全な居場所ということになります。

寺院の襖絵に唐獅子牡丹や竹に虎の文様がよく描かれます。これは、それを見る人々に、獅子にとっては牡丹が拠（よりどころ）であり、虎にとっては竹林が拠であるということを知らしめて、「あなたにとっての拠は何か？」と問いかけているというのです。そして、それはお金でも地位や権力でもなく、暗に、「仏法こそがその拠とすべきである」と示しているというのです。

では次に、仏典に表現される獅子ということで、『無量寿経』を紐解（ひもと）いてみましょう。無量寿仏、つまり阿弥陀仏が、まだ法蔵比丘として修行の身であったときに、師である世自在王仏（せじざいおうぶつ）に対し、衆生救済を誓う四十八の願をたて終わり、改めてこれらの願が悩めるあらゆる衆生を救わんがためのものであるということを重ねて述べ、その意気込み、気概を熱く語るというくだりがあります。その一節に「衆（もろもろ）の為に法蔵を開き、広く功徳の宝を施し、常に大衆の中に於（お）いて、説法師子吼せん」とあります。

獅子吼は、岩波『仏教辞典』には、次のように説明されております。

仏陀の説法、漢訳仏典では、多く《師子吼》と書かれている。仏陀が大衆にむかって堂々と教えを説き、邪説を排して異教の徒を怖れさせるのを、獅子が咆哮（ほうこう）して他の獣を怖れさせるさまに例えた語。転じて、雄弁をふるうことをいう。「師子吼といふは、自（みずか）ら大理を宣（の）ぶるに怖畏（ふい）する所無し。義（よ）い、師子の衆狩（しゅしゅ）を畏（おそ）りざるに同なり。故に師子吼と云ふ」〔勝鬘経義疏〕

ときに、「吼」は「ほえる」と読みます。人間の場合は、話すとか喋（しゃべ）るといいます。虫や鳥や獣の場合は、鳴く・囀（さえず）る・吠（ほ）える・吼（ほ）える・唸（うな）る・嘶（いなな）くのように表現します。以前、飼っていたシーズー犬は

小型犬でしたが、無駄吠えということをほとんどしませんでした。何か主張や要求したいときには、低い声で一言「ワン」というだけでしたが、なかなか説得力あるものでした。獅子吼というのは、大きな声を出すということではありません。自分勝手な主張を大きな声を張り上げて、威圧的にがなり立てるのは獅子吼とはいいません。聖徳太子が、『勝鬘経義疏』の中で「大理を宣ぶる」「義い」という言葉を用いておられますが、正しいこと、倫理や道徳、道理にかなっていることを、威厳を持って話すということです。

仏教では、釈尊最後の教えとして「自灯明」「法灯明」ということをいいます（2020 年 6 月の法話）。仏法を拠とし、世界の道理を理解し、自らが拠となり得れば、その人の話す言葉一つ一つは、輝きのある威厳のある言葉となって放たれます。その姿こそを「獅子吼」というのです。

65　随喜（ずいき）(2022/8/01)

一昨年、ある財団法人の立ち上げに、縁あって関わらせていただきました。この法人の目的と事業は、経済的に困窮し、学業に専念できない小学校児童の学業を援助するために、奨学金を支給するというものです。基金の提供者は九十才を超える高齢の方で、ご自身が亡くなられた後も、遺した財産をそのような事業に運用してほしいという、強いご意志によるものです。

もちろん、資金が湯水のようにあるわけではありませんから、その範囲や期間も限定的なものにはなります。しかし、限られた子ども、限られた金額であったとしても、たとえ一人でも喜ぶものがあったとすれば、それはとても尊いことであるに違いありません。自分が蓄えたお金を、他に分け与えるということは、誰もができることではありません。

どのような人間の心にも、善い心と悪い心がありますが、仏教では仏さまのような他を利する善い心を**無量心**といい、四つあるといいます。**慈**（マイトリー　maitrī）・**悲**（カルナ　karunā）・**喜**（ムディター　muditā）・**捨**（ウペークシャー　upekṣā）の四つです。カッコ部はサンスクリット（梵語）です。

慈というのは、友愛の心という意味を持つことばです。たとえば、本当に親しい人が、「腹が減っている」といえば、何かおごってやろうと思いますし、お金に不自由しているようだと思えば、なにがしかの金品を渡してやろうと思うものです。また、元気がなく落ち込んでいるようなときには、励ましの言葉をかけてあげようと思うものです。このように、物なり、お金なり、言葉なりによって、他を楽にしてあげようという利他の心をいいます。ですから、そのような意味を踏まえて、**与楽**ということばに置き換えることもあります。

悲というのは、他者の苦しみに対する同情という意味を持つことばで、他者に寄り添い、その苦しみから救ってあげようとする心をいいます。人間には、物なり、お金なり、励ましの言葉をもらったとしても、癒やされない苦しみもあります。たとえば、最愛の人を亡くしたとか、重い病になったとか、いじめられたとか、大事な試験に落ちたとか、深い絶望感に襲われるときです。そんな時は、ただ、自分と同じように悲しみ、同じように苦しんでくれる人が寄り添ってくれることによってのみ救われるものです。このような、同悲・同苦の心のことを、前述の慈の与楽に対して**抜苦**といいます。

父親のことを**慈父**、母親のことを**悲母**というのは、そのような意味がこめられているのです。そして、この二つを併せると**慈悲**ということばになります。仏・菩薩が隔てなく衆生をあわれみ、いつくしむ心をいうのですが、冒頭でお話した、困窮している子どもたちを救ってあげたいという気持ちは、正にこの慈悲の心です。我々衆生は、どうしても自分中心に生きており、自利のことばかりで、利他のことまでは考える余裕がなく、慈も悲も、まして二つを併せ持つことはとても難しいことです。

そこで、仏教では、**喜**の心を説きます。自分にはまだ力不足で出来ない他人の善行、慈善事業、ボランティアなどに対して、応援し共に喜ぶことは、自分で行うと同じくらいに尊いことであると説いています。しかし、了見の狭い我々衆生は、とかく他人の善い行いに対して、羨んだり妬んだり、さらにはケチを付けたりしがちです。仏教者は、善行に限らず、他人が立派な家を建てた、昇進をした、業績を上げたといった幸福を掴んだときには、同じように喜んであげることが大切で、これを**随喜**（ずいき）の心といいます。

そして、**捨**というのは、すべてのこだわりを捨てるということです。好きだから、嫌いだからというこだわりや、温情をかけてやったのにというこだわりを捨てて、他者の幸せを喜び、他者を差別しない平らかな心を**喜捨**（きしゃ）といいます。人間、あげたとなるとこだわりが残りますが、捨てたものには執着しません。ですから、財を施す布施にしても、喜捨と考えればスッキリと落ち着くのです。

以上、四つのはかりしれない慈悲喜捨という利他の心は、仏教者として、いつも胸のポケットに入れて持っていたいものです。ただ、注意が必要なのは、使い方を違えると、「小さな親切、大きなお世話」となってしまい、自分では善いことをしているつもりが、かえって迷惑をかけていることがあるものです。特に、悲の心で接すべきところ、慈を押しつけていることがままありますので、気を付けたいところです。

66　念々不捨者（ねんねんふしゃしゃ）(2022/9/01)

いきなりの質問で恐縮ですが、ご身のことをどのようにおっしゃってるでしょうか？

私の場合は、幼少期、父親のまねをしていたのでしょう、ワシといっていました。物心がつくようになってからは、ワシというような友だちは一人もいませんでしたので、ボク、あるいはときによってオレ、というようになりました。それから、社会人になってから、何時の頃であったか記憶がありませんが、ワタシというようになり、現在に至っております。しかし、実のところ白状しますと、家内に対してはボク、わが子に対してはオトウサン、孫にはオジイチャンと使い分けております。皆さまはいかがでしょうか。

日本語には、自称する言葉（一人称）として、ワタシ、ワタクシ、ボク、オレ、ワシ、アタシ、ワレ、ジブン、古風なものでは、セッシャ、ソレガシ、オイラ、アチキ、アタイ等々、ずいぶんとあるものです。詳しいことは知りませんが、英語では「I」だけですし、独語、仏語でも同様だということです。日本人の場合、私を含め、状況に応じて、自称の言葉を使い分けているようです

当方には二才違いの二人の孫がいます。下の子が三才の頃は、自分のことを、まだ、自分の顔に指さすことでしか表現できませんでしたが、上の子は、自分の名前であるミチアキと言っていました。幼児の場合、親に依存している存在であり、その世間の範囲は狭く、親が〇〇チャンと呼んでいれば、自分のことは、〇〇チャンなわけです。ところが、成長するに従って、自我の意識が芽生えてくると、自分、そして自分の身近にいる人間だけではなく、多くの他人が存在しているものであるということが分かってきます。そこにおいて、ボクなのか、ワタシなのか、オレなのか、あるいは〇〇チャンのままなのか、結構重要なことのように思います。

人間というものは、不完全な存在ですが、それでも世間に対して、一人前の大人として認めてもらうということは、本人はもちろんのこと、周りの人間もそれを望んでいます。では、どんな人間が一人前といえるかというと、普通一般的には「自立していること」と考えられているのではないでしょうか。ならば、自立するためには、その反対である依存することをやめれば良いと考えても不自然なことで

はありません。

そこで、親・兄弟姉妹・親類・友人たちの繋がりを断つことが自立することだと考えてやり始めると、これが意に反して、だんだん孤立するばかりで、自立とはほど遠いものとなってしまいます。つまり、人間は、一人だけでは生きられず、その意味で、依存なしには生きられない存在なわけです。ゆえに、自立している人間とは、そういう世の中の仕組みが解って、自分を支えてくれている人やものに、感謝し共存できる人間であるということになります。

このことは、信仰と深い関わりを持っています。法然上人は、善導大師の『散善義』にある「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住座臥に時節の久近を問わず、**念々に捨てざるもの**、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に」の文を引用して、浄土宗を開かれました。しかし、弟子たちの多くが、その中の一節「念々不捨者」を、ただ念仏だけをしていれば弥陀に救われると、解釈していたのです。ところが、これでは、他との関わりを断って、孤立化を深めることになり、一人前の念仏者とはいえなくなってしまいます。

一方、法然上人に十四才のとき弟子となり、以後二十三年間、師の下で学ばれた西山上人は、実信房蓮生との問答『述誠』において、「一念十念も機の功に仍らず、唯仏体の外に別の功を論ずる事なき所を、『念々不捨者是名正定業』という。即ち此を他力の至極とするなり」と、すなわち「念々不捨者」はわれわれではなく、阿弥陀仏の方であり、そのように念じてくださっている他力に気付くことこそ肝要であると述べておられます。

しかし、経文にあるからといって、阿弥陀仏の存在そのものが信じられないのがわれわれ現代人であります。そこで、釈尊が説かれるところの諸行無常・諸法無我・涅槃寂静、縁起、空といった法によって、世界は成り立っていることは紛れもない事実であり、その法こそが仏体であり、なかでも、善意と慈悲に特化された存在こそが阿弥陀仏であると理解すれば、その輪郭が見えてくるのではないでしょうか。

「仏道をならうというは、自己をならうなり」は 道元禅師の言葉です。何気なく、「私」「俺」といっている自分でありますが、大きな他力に支えられているのだという自覚で裏打ちされた「私」であり「俺」でありたいものです。そうして、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

67　悉有仏性（しつうぶっしょう）（2022/10/01）

こだまでしょうか　　金子みすゞ

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「ばか」っていうと
「ばか」っていう。
「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、だれでも。

この詩は、東日本大震災の後、ACジャパン（旧・公共広告機構）が、テレビCMで繰り返し放送していましたので、よくご存知かと思います。あのような悲惨な体験をされた方々に対して、励ましは必ずしも癒やしとはなりえず、相手の気持ちに寄り添うことでしか、傷ついた心と通じ合うことはできない……、この詩が選ばれた意図は、そんなところにあるのかと思います。

仏教では、そのような心を**同事**（どうじ）、あるいは**同悲同苦**（どうひどうく）といいます。作者の金子みすゞは、童謡詩人といわれます。その作品は、悲しいまでに切なく優しいのです。大正末期から昭和初期にかけて、五百余編もの詩を残していますが、その一生は、二十六才という若さで、我が娘を実母に託して服毒自殺をせねばならなかったという、悲しいものでした。

金子みすゞの詩の原点は、**鯨墓**（くじらはか）にあるといいます。その故郷、山口県大津郡仙崎村（現・長門市仙崎）は、古くから捕鯨が行われていました。この鯨と海に生きるすべての命に対して、**鯨法会**（くじらほうえ）と呼ばれる法要が営まれ、捕った鯨のお腹の中にいた胎児のために鯨墓を建て、**鯨鯢過去帳**（げいげい）には戒名を記し、今もその供養は続けられているといいます。金子みすゞは『鯨法会』という作品で、

村の漁師が羽織（はおり）着て、
浜のお寺へいそぐとき、
沖で鯨の子がひとり、
そのなる鐘をききながら、
死んだ父さま、母さまを、
こいし、こいし、と泣いてます。

と綴っています。おそらく、三才で父と死別した自分自身と重なり合うのでしょう、同悲同苦の心が、切なく伝わってまいります。

金子みすゞの生涯がそうであったように、我々の住んでいる世界は、つらく悲しいことでいっぱいです。仏教では、この世、俗世間のことを「**娑婆**（しゃば）」といいますが、それは、サンスクリット語（梵語）のサハーを音写したもので、堪え忍ぶという意味です。ですから「**忍土**」と漢訳される場合もあります。たしかに、個人的な些細な悩み事から、戦争や環境破壊といった大きなものまで、自分にとっては不要なもの、嫌なものがあまりに多いというのが実感であり現実です。

ところが、一方、仏教では、あらゆるものに存在価値を認め、**一切衆生悉有仏性**（いっさいしゅじょうしつうぶっしょう）、あるいは、**草木国土悉皆成仏**（そうぼくこくどしっかいじょうぶつ）といって、人はもちろん、心を持たない草木国土に至るまで、すべてのものに仏となる種があり、成仏の対象と成り得ると説いています。娑婆という忍土に生き、つらい思いをいっぱい抱えていたであろう、金子みすゞですが、その作品は、悉有仏性の心そのままに、すべてを包み込む優しさにあふれています。次の詩は、教科書の多くに取り上げられている作品です。

私と小鳥と鈴と　　金子みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面(じべた)を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

ただ、我々は、敵対関係にある相手には、地獄に行ってほしいと思うし、敦賀の高速増殖炉に「もんじゅ」なる菩薩の名がついていますが、福島の事故からして、とても、原発に仏性があるとは、正直思えません。金子みすゞは、そのあまりに優しすぎる心と、現実との落差に耐えきれず、短い生涯を終えねばならなかった……、そのような評価も、ある意味正しいのかもしれません。だが、しかし、その作品を読んで、胸を痛め、感動する心だけは忘れないでいたいのです。

68　真味只是淡（しんみただこれたん）(2022/11/01)

枯木鳴鵙図　宮本武蔵画（和泉市久保惣記念美術館蔵）

食欲の秋になりました。ここ久しくマツタケにはお目にかかりませんが、きのこ類、根菜類、果物類、新米など秋の食材が出回り、いろいろと食べてみたくなります。

ところで、味覚の嗜好というものは、地域性もあれば、それぞれの家庭の味というものもあり、個人的なものももちろんあり、しかも、個人々々年齢によっても、大きく変遷するものでもあります。

たとえば、日本では珍重されているマツタケですが、欧米では、靴下の臭いや汗の臭いがする臭いキノコとして、嫌われているのだそうです。また、同じ素材にしても、調理法や味付けによって、ずいぶんその味覚は違ったものとなります。マツタケご飯にお吸い物、土瓶蒸し、ホイル焼き、シンプルに焼きマツタケ等々ありますが、出汁加減、味付け加減によっても、その味わいは変わります。皆さまは、どんなマツタケ料理がお好みでしょうか？

中国明代末期、洪自誠(こうじせい)の随筆『菜根譚(さいこんたん)』に、次なる記述があります。

醲肥辛甘非真味　真味只是淡
神奇卓異非至人　至人只是常

書き下すと、「醲肥辛甘(じょうひしんかん)ハ真味ニ非ズ。真味ハ只是淡(ただこれたん)ナリ。神奇卓異(しんきたくい)ハ至人(しじん)ニ非ズ。至人ハ只(ただ)

是常ナリ」となります。

つまり、濃い酒や脂のよくのった肉、辛すぎるもの、甘すぎるものは、本物の美味しさではないというのです。一流レストラン、料亭の料理は確かに旨いです。しかし、毎日しかも毎食そのような食事を繰り返していたのではたまりません。しばらくはいいかもしれませんが、そのうち飽きてきて、茶漬けでさらりといきたくなるものです。また、そうしなければ、病気の心配も出てきて、健康にも良くないでしょう。お腹が減ったときにいただく、白ご飯ほどおいしいものはありません。本物の味とは、そのような淡白なものであるというのです。

そうしてみると、マツタケも、バターなんぞで調理するのは邪道で、淡い味であっさりいただくのが、通人の目指す王道というところでしょうか。

そして、このようなことは、味覚だけに限ったことではなく、同様に、度肝を抜くようなことをする天才とおぼしき人物は、本来道を修める人間ではなく、真に道を極めている人間は、平々凡々としているものだというのです。

とかく世間の人々は、何か神がかったことをやったり、常識をこえた、不可思議で奇異なことをする人を、すぐれた人物、道を極めた至人だと思いがちでありますが、実際は、奇人・変人、あるいは、ペテン師だったりするものです。

結局のところ、偽物はごてごてと飾り物や味付けをしてごまかしているが、本物は、無駄を一切排除しているがゆえに、シンプルかつノーマルな体をなしているということでありましょう。それを別の言葉で表すとすれば、淡白、枯淡、簡素、単純、平凡、尋常といったところでしょうか。

こんなエピソードがあります。デザイナー亀倉雄策氏（1915 － 97）が、電電公社の民営化にあたり、皆さまご存じのＮＴＴのロゴマークを発表したときのことです。記者会見の席で、「『こんなのオレでも描ける』っていわれるんだな」といって、苦笑いをしておられたことを思い出します。白状しますと、当初、私もそう思った内のひとりです。しかし、世間にはあまたのシンボルマークがありますが、このロゴほどシンプルで目を引くものはないように思います。平凡と見えて、その実平凡ではないものが本物であるということを証明する、ひとつの見本のような気がいたします。

もうひとつ、『荘子』に、「君子の交わりは淡きこと水の若し、小人の交わりは甘きこと醴（甘酒）の若し」とあり、人間関係においても、同様なことがいえるというのです。「オマエとオレとは一心同体だ」などと、たいそうなことを普段いっている人ほど、いざとなると、さっさと逃げていってしまうものです。夫婦関係でも、互いが水や空気のような存在になってこそ、本物といえましょう。

文頭に掲げた絵画は、あの宮本武蔵の筆になる枯木鳴鵙図（和泉市久保惣記念美術館デジタルミュージアムからの引用）です。枯れ木に留まる鵙と幹を這う虫を中央に配し、背景はすべて省略されています。まさに、日本刀の抜身のような緊張感が伝わってきます。簡素・枯淡は仏教においても究極とするところです。日常、心していきたいものです。

69　如愚如魯（にょぐにょろ）（2022/12/01）

好ましくないとは知りつつ、罵ったり、中傷したり、あるいは、茶化したり揶揄ったりするとき、相手に対して「馬鹿」と言ってしまうことは、日常結構よくあることです。他にも、阿呆・間抜け・愚か者・凡暗・たわけ・木偶の坊・いかれぽんち・頓馬・唐変木・低能・無能・愚鈍・魯鈍等々、言われた方としては、当然のこととして、かりに冗談としても、あまり気持ちのいいものではありません。

この「馬鹿」という言葉、語源を調べてみましたら、諸説あるようです。一番有力なのは、無知とか

迷妄を意味するサンスクリット語 moha に相当する音写語というものです。ただ、その場合「莫迦」と表記された確かな文献はあるようですが、それが何時からどうして「馬鹿」となったのかとなると、今一つはっきりとしておりません。漢語の「破家」（家産を破る意）の転義という説もありますが、いずれにしても、愚かさを意味していることに変わりはありません。

その他の語の語源については、およそ見当がつきますので省きますが、愚かさを意味するこれら、どれ一つとっても、自分がそうであると認めることは、なかなか辛いものがあります。

『景徳伝灯録』巻五に、次のような公案（禅の問答）があります。

修行僧であった馬祖道一（ばそどういつ）が、毎日座禅をして励んでおりました。そこへ、師匠の南嶽懐譲（なんがくえじょう）がやってきて尋ねました。

「何のため座禅をしているか？」

「仏になるためです」

すると南嶽は、庭に降り、落ちていた瓦を拾って、石で磨き始めました。

「師よ、何をなさっているのですか？」

「瓦を磨いて、鏡にしようとしておるのだ」

「瓦を磨いても、鏡になるわけないではありませんか」

「ならば、座禅をして仏になれるのか？」

道一はがく然とします。これほど強烈な言葉はありません。私どもも、先生、あるいは上司や先輩から、無能さを突きつけられて、意気消沈してしまったという、これと似たような体験をされている方は多いと思います。では、どうすればよいのでありましょう。

法然上人の遺言とも言われる『**一枚起請文**』によれば、「**たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし**」とあります。

つまり、鏡には成り得ない瓦のような愚かしい存在であることを認めるがよい。そうして、自力ではなく、阿弥陀仏の他力にすがるがよいというのがその教えです。しかし、この他力にお任せをするということは、愚の自覚が大前提です。これが、易しそうで、実は難しいのです。道一がそうであったように、努力精進すれば、何某（なにがし）かの成果が期待できるのではないかと、小賢（こざか）しく生きようとしているのが、われわれ凡夫です。

そこで、懐譲は打ちひしがれている道一に「牛車が動かないとき、車を打つか、牛を打つかどちらだ？」と問います。

当然、自分が乗っているのは車ですが、動かすのは牛でありますから、打つのは牛でなくてはなりません。ところが、往々にして、座禅ならば座禅、念仏なら念仏をすることだけにとらわれて、大事な牛のことを忘れ、動かぬ車を打つばかりで、それでは悟りや安心は望めません。

そこで懐譲はさらに、「お前は、座禅を学ぼうとしているのか。それとも、仏になることを学ぼうとしているのか。座るだけが座禅ではない。また、仏には決まった形や相があるわけではない」と諭します。

つまり、方法と目的を分けるなということをいっているのです。禅門でいう座禅と仏を二つに分けて考えるなということです。浄土門でいうところの念仏と安心も、同様です。座禅が仏であり、仏が座禅、念仏が安心であり、安心が念仏であるということです。

ということは、鏡に成り得ない瓦を磨くという行為は、けして愚行とはいえないということです。

何にもならない無所得ということ、凡夫がする座禅、念仏はそうしたものです。だから、ただ、座禅を

する、ただ、念仏をするだけです。そして、日常の行為すべてが、念仏であり座禅となったその姿を、法然上人は「一文不知の愚鈍の身」、洞山良介禅師は「愚の如く、魯の如し」といっておられるのです。われわれ凡夫が目指すは、何事にもとらわれない、この「如愚如魯」と心得て、肩の力を抜いていこうではありませんか。

70　五色雲（ごしきうん）（2023/1/01）

新しい年を迎えます。平和で希望に満ちたものであって欲しいという願いから、「五色雲」を表題といたしました。色の付いた雲のことを彩雲といい、瑞雲（ずいうん）、慶雲（けいうん）、景雲（けいうん）、紫雲（しうん）などとも呼ばれ、昔から瑞相（ずいそう）の一つであるとされ、これが現れることは吉兆とされてきました。仏教においても、五色の彩雲は、重要な際に発生する現象としてとらえられてきました。

西方極楽浄土から、阿弥陀如来が、多くの菩薩を随えてやってくる聖衆来迎図（しょうじゅらいごうず）などにも、この五色の雲が描かれております。先年、宇治の平等院に参詣した折、鳳凰堂には、阿弥陀如来を囲むように、今は、千年という長い時が、彩色を薄れさせていますが、五色雲に乗った五十二躯もの雲中供養菩薩等の像が躍動している姿を見ると、正に極楽に遊ぶがごとく、圧巻というほかありません。この世に、極楽世界を具現化しようとした、時の関白藤原頼通の思いが、熱く伝わってまいります。

さて、我々現代人においても、自分の居場所が、極楽のような環境であって欲しいと願うのは、誰しも同じです。しかし、現実はそうはいきません。世界を見渡せば、戦火に日々おびえ、家族と引き裂かれ逃げ惑っているウクライナの人々にとっては、正にこの世は地獄に違いありません。この世は、仏教でいうところの、苦しみ多き世界、娑婆（しゃば）（忍土（にんど））という認識が、正しいといわざるをえません。

さらに、近年、世界各国において、極右政党の台頭が目立ち、将来の展望に焦臭（きなくさ）さを感ずるのは、私だけではないでしょう。平和は、人類の共通の願いですが、人類の歴史は、戦いの歴史でもあったという現実があります。もし、戦争という危機に直面した場合、どう対処すべきか、仏典には、どのように説かれているか調べてみました。『仏教聖典』（典拠『大薩遮尼乾子所説経』）から引用します。

正しい教えを守る王に対して逆らう賊が起こるか、あるいは外国から攻め侵すものがあるときは、正しい教えの王は三種の思いを持たなければならない。

それは、第一には、逆賊また外敵は、ただ人を損ない人民を虐（しいた）げることばかりを考えている。自分は武力をもって、民の苦しみを救おう。

第二は、もし方法があるなら、刃を動かさないで、逆賊や外敵を平らげよう。

第三には、敵をできるだけ生け捕りにして、殺さないようにし、そしてその武力をそごう。

王はこの三つの心を起こして、それから後に部署を定め訓令を与えて戦いにつかせる。

このようにするとき、兵はおのずから王の威徳をおそれ敬ってよくその恩になずき、また戦いの性質をさとって王を助け、そして王の慈悲が後顧の憂いをなくすことを喜びながら、王の恩に報いるために戦い従うから、その戦いはついに勝利を得るだけでなく、戦いもかえって功徳となるであろう。

――以上であります。ただ、釈尊ご自身は、その祖国が隣のコーサラ国から攻撃を受けたことがありますが、武力という手段を使われませんでした。ご承知のように、釈尊はシャカ国の王子であったわけですが、出家して国を出て、修行者となり、悟りを開かれブッダとなられた後は、大きな僧団が形成され、帰依者も多くでき、コーサラ国のパセーナディ王もその有力な一人でありました。

では、なぜは、シャカ国は攻撃を受けるようなことになったかというと、次のような経緯があったといいます。コーサラ国はシャカ国を属国扱いしていて、妃を差し出すよう要請しました。ところが、快く思わなかった当時のシャカ国は、奴隷の娘を王女と偽ってコーサラ国へ送りました。王妃となった娘は、ルリ王子を生みます。成長した王子は、後に自分の出生の秘密を知り、それで、パセーナディ王から王位を奪うと、報復すべく、シャカ国に侵攻したというのです。

釈尊は一本の枯れ木の下で端座して、軍を進める王を待ち、王は「世尊よ、なぜ枯れ木にお座りか？」と尋ねると、「王よ、親族の陰は涼しい」と答えられ、釈尊の意中を察した王は、軍を引き返させました。

同じことが三度繰り返されたといいます。しかし、四度目には「シャカ族の宿縁は熟した。報いを受けねばならぬ」といい、シャカ国の消滅を受け容れられたというのです。

釈尊であれば、他国の協力を得て、コーサラ国の侵攻を防げたかもしれません。しかし、あえて祖国は滅びても、もっと大事なものを残そうとされたのだと思います。すなわち、人間として正しく生きる教え「仏法」です。そう、私どもは五色雲に乗せて、正しい教え、仏法を伝えていく義務があるのです。

71　主人公（2023/2/01）

今の時代には好ましくない表現ですが、「群盲象を評（ひょう）す（撫（な）でる）」という成句があります。もともとは、インドの寓話であったようですが、仏典にも度々引用があります。たくさんの盲人に大象を示して、それぞれに象の鼻・耳・身体・足・背・尾などを触さわらせて、象とはどんなものかを批評させると、それぞれ自分が触さわって知ったことだけで判断して、象はこれこれであると主張して譲らなかったといいます。

別の表現では「木を見て森を見ず」となりましょうか、このようなことは、学問全般についていえることかもしれません。特に仏教においては、経典の数は膨大ですから、ある学者は、仏教を学ぶということは、「砂漠を彷徨（さまよ）うが如し」と評されたといいます。確かに私自身、初学の頃は、自分が今どこにいて、どの方向を向き、どちらに進めばよいか、全く見当がつきませんでした。

私どもは、浄土宗西山禅林寺派という一宗派に所属しているわけですが、もちろん、これが仏教の全部ではありません。先ほどの譬えからすれば、象の鼻か尾か分かりませんが、一部分でしかないということです。寺報や法話を始めたのも、象の全体、仏教の全体像をつかみたいという思いがあったからです。そんな中、これこそ象の全体を支える骨格ではないかと感じ取れるものがありました。

それは、先ず「因縁生起（いんねんしょうき）」、そして「自灯明（じとうみょう）・法灯明（ほうとうみょう）」の教えです。前者は略して因縁とも縁起ともいい、空の教えに通じます。ただ、今回は後者、特に自灯明に重きを置いて考えてみたいのです。

釈尊がいよいよ入滅間近というときに、長年身の回りのお世話をしていたお弟子のアーナンダ（阿難）は途方に暮くれて、「どうか入滅なさらないで下さい。私は、これからどうすればよいのです」と泣いて訴えました。その時釈尊がおっしゃったのは「自（みずか）らを拠（よりどころ）とせよ。法（ほう）を拠とせよ」ということでした。これを釈尊の遺言、「自灯明　・法灯明」の教えといいます。

注目すべきは、自らが先で法が後であるということです。『法句経』（中村元訳）においては、次のように説かれています。

・自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、天

の尊い処に至るであろう。（二三六番）

・自己こそ自分の主である。他人がどうして（自分の）主であろうか？自己をよくととのえたならば、得難き主 を得る。（一六〇番）

ここにおいて「灯明」「拠」「主（ぬし）」と表現は異なりますが、同じことであって「洲（す）」「島（しま）」とも訳されています。インドは、雨期にはしばしば洪水に見舞われます。安全なところは、唯一川の中洲です。つまり、「寄る辺」ということです。

われわれは、不安なときは何かに頼りたくなります。若年の時は親・先輩・教師に頼れば良いのでしょうが、いつまでもそういうわけにはいきません。また、人に頼って上手くいかなかった場合には、人の所為（せい）にしたり、恨（うら）むことになったりします。時に、いかがわしい占いや宗教に頼って一生を台無しにしてしまったという話は、世間でよく聞くところです。ですから、釈尊は他でもない、自分に頼れというのです。そのためには、頼りがいのある賢明な自己を作れといっておられるのです。

中国は唐代の禅僧、彦（げん）和尚の逸話が『無門関』第十二則にあります。

瑞巌寺（ずいがんじ）の師、彦和尚という方は、毎日自分自身に向かって「主人公」と呼びかけ、また自分で「ハイ」と返事をしていました。「はっきりと目を醒ましているか」「ハイ」「これから先も人に騙されなさんなや」「ハイ、ハイ」といって、毎日ひとり言をいっておられたというのです。

私という人間の一生は、私自身のものです。ですから、その私の人生劇場、物語といってもよいでしょうが、その主人公は、当然ながら私でなくてはなりません。しかも、脚本家、プロデューサー、監督も全部私自身です。

脚本はとても大事です。ハッピーな展開の物語を望みたいところですが、いかんせん、たとえ悲劇であったにせよ、己が監督の下、しっかり演じ切れば、自他共に感動を生むでしょう。『私の物語』、完結を見るまで心して演じねばなりません。

72　冷暖自知（2023/3/01）

最近驚いたというか、懸念に思うことがあります。それはスマートフォンのアプリです。私もあえて導入していなかったアプリに、他人の持っているスマートフォンの位置情報が分かるというものがあります。早い話、家族や仲間でそのアプリを入れて情報を共有すれば、誰が今どこに居るかが、刻々に分かり、そして、一ヶ月分の行動範囲や時刻等が記録されて、地図上に図式化されて閲覧できるというものです。

これは、例えば親御さんが子どもの安全のためとか、お互いが共通理解のもとに上手に使えば、実に便利なものです。しかし、いかんせん、プライバシーが丸裸にされるわけですから、今回、この種のアプリを導入してみて、少々背筋が寒く感じられた次第です。

このような情報は、セキュリティ機能があって保護されているとはいえ、完全ではありません。その気になれば、第三者にも筒抜けになるということです。私どものような一般人の個々の情報なぞ、そうたいしたことはないかもしれませんが、多く集めれば、何かしらの意味を持ってきます。また、企業や国のトップの情報が狙われる可能性も否定できません。今後、このような方面の技術革新は、どんどん進んでいくでしょうから、個人ユーザーである持つ側も、よほどの注意が必要であるということを痛感いたしました。

またスマホとは別のことになりますが、私が子どもであった前世紀半ばの頃、自動車を所有して自分が運転するとは、思ってもいませんでした。それが、あと十年もすれば自動車は自動運転が当た

り前となり、さらに近い将来、ドローン技術が進んで、自家用の空飛ぶ自動車の時代が間違いなく来るでしょう。科学技術の発展と相まって、このような物質文明の変遷は、瞬きしている間にも進化しているような感さえし、脅威を覚えます。

一方、精神文明は、そのような急速な物質文明の変化に対応し切れていないといえます。その結果、自殺・精神疾患・引きこもり等といった、いろいろな歪みとして出てきています。今後、ロボットや人工知能がどんどん人間の仕事を奪っていくことが予想されますから、識者から心配の声が上がっております。しかし、これはよくよく考えれば分かることなのですが、人間が機械や道具に合わせようとするから歪みが出てくるのであって、人間の方が確たる主体性を持っておれば何も問題は起きないということです。

孔子の『論語』には、次なる名言があります。

子曰(しいわ)く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順(したが)う。七十にして心の欲する所に従いて矩(のり)を踰(こ)えず。

【現代語訳】

先生がいわれた、「わたしは十五で学問を志し、三十にして独立した。四十で迷いが消え、五十で天命を知った。六十になると人の話に耳をかせるようになり、七十になってやっと、人の道を外れることなく自由に行動できるようになった」

また、釈尊は『法句経』(二七五番)において、仏道を説く意味を語っておられます。

「汝等、この道を往(ゆ)かば、くるしみの辺際(はて)に至らん。われすでに、くるしみの箭(や)を除(ぬ)きたれば、今こそ、爾(なんじ)らのために、道を説くなり」と。

これら二つのお言葉は、孔子にしても、釈尊にしても、物事の道理を悟られた、晩年に語られたものでしょう。ちょうど、山を登り極めた者が、これから登ってくる者たちに、余裕を持った心で、語られている言葉です。このような心境、悟りといってもよいかと思いますが、それは、いかにスマホや人工知能が進化したからといって、身につくものではありません。

人間というものは、いかに知識や情報を多く持っているからといって、それを使いこなす知恵がなくては、判断を誤ることになります。「冷暖自知」ということをいいます。亡母の思い出として、小さな子どもに、アイロンとかストーブは火傷をする危険があることを教えるのに、実際に少し触らせていましたが、そういうことなのでしょう。知恵は、自身の体験の一つ一つの積み重ねで、便利や安易とは対極にあるものです。

特に、仏の知恵として大切なのは慈悲心です。多くの失敗や苦難を経験した人でないと、他人の苦しみなぞ理解しえないものです。人工知能も、ただ人間を凌駕(りょうが)することばかりを目指すのではなく、鉄腕アトムのような優しさを持ったものであるよう、技術者の方々には願いたいものです。

73　安寧(2023/4/01)

東男(あずまおとこ)に京女とか、九州男児などと、いわば県民性が云々されたりするように、風土は、なにがしか、そこに住む住人の気質を特徴付けるものです。日本国内ですらそうですから、これが外国ともなればなおさらのことでしょう。

先日、近年の国際結婚事情という記事の見出しに、「三十組の内一組は外国人」とあって、少なからず驚かされました。日本の国際化は、私としては余り実感はないのですが、随分進んでいるようです。

しかし、その裏で、大変苦労されている方も多いようです。現実、離婚率は、日本人同士よりも倍以上高く、大雑把ですが、二組の内一組は破綻(はたん)していることになり、尋常な状況とはいえません。やはり、長年違った風土の中で育ったもの同士が、無事に暮らすためには、よほどの努力がいるということでしょう。

さて、風土が人間の気質を特徴付けると言いましたが、それは、宗教についても当てはまります。いや、むしろそこの風土で育った宗教が、人間の気質を形成すると言ってもよいという側面があります。そこで、そのような宗教について、実に興味深い指摘があります。

宗教を分類する上で、「一神教と多神教あるいは汎神論」「民族宗教と世界宗教」「伝統宗教と新宗教」「自然宗教と創唱宗教」などが考えられます。

この中で、一神教に分類できるものは、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三つです。そして、ユダヤ教は、ユダヤ民族だけの民族宗教ですが、キリスト教とイスラム教は、民族を超えて信仰されている世界宗教であるという違いはありますが、その元はユダヤ教で、『旧約聖書』を共通の聖典とし、砂漠という過酷な風土から生まれ育った宗教であるという共通性があります。よって、この三宗教は、親子・兄弟のような関係にある宗教であると言えます。

この一神教が生まれた土壌について、『「聖書」世界の構成論理』(谷泰(ゆたか)著)によると、羊の遊牧と関わりが深いというのです。これは、河合隼雄(はやお)氏からの又聞きですので、ひょっとして誤謬(ごびゅう)があるかもしれませんが、こういうことです。

羊を遊牧するにあたって、群れを上手くコントロールするためには、一頭の優秀な雄だけを残し、他の雄はすべて殺すというのです。そうしないと、羊の繁殖期に群れの収拾が付かなくなるといいます。この決断には、一切の温情とか哀れみというものを断ち切った厳しさが求められます。これこそ、絶対神、一神教の威厳であり、家庭にあっては、家長たる父にそれが求められます。厳しい環境風土の中では、余計な憐憫(れんびん)の情が一族の消滅に繋がりかねません。

時に、米国は世界の警察官ではないと言われて久しくなりますが、キリスト教徒が築いた米国のリーダーには、今でもこの選別決断能力が問われています。ノーベル平和賞を受賞した元オバマ大統領は、どういうわけか、国内評価が今一つでした。それは、弱者をばっさり捨て切れない優しさにあるのかもしれません。

一方、これと対極にある宗教が仏教です。前述のように、一神教においては、白か黒か、善か悪か、取か捨かの選別を決断する父性的厳格さこそが重要であるとするのに対し、白も黒も、善も悪も、相反するものは本来一つであって、分別するこだわりは捨てよというのが仏教です。それは、全部を丸抱えしてしまう母性的寛容、また、それは緩(ゆる)さと言ってもいいのかもしれません。

一つの事例として、揉事の解決法において、湾岸戦争の時に、ブッシュ大統領率いる米国以下多国籍軍は、すべてが一神教国で、暴力を使ってでも悪を叩くという方法を採りました。しかし、多神教国であるインド、仏教諸国、日本ももちろん、この戦いそのものには参加しておりません。それはたまたまとの指摘があるかもしれませんが、日本人の多くは、「この戦いは、明らかに米国同時多発テロに対する報復であり、どちらが善でどちらが悪とも言えない」と思っていたのではないでしょうか。

そのような、善悪をはっきりと選別しようとしない日本的緩さを、時に欧米諸国は優柔不断と非難します。では、湾岸戦争で中東情勢は治まったかというと、イスラム国の出現に見るとおり、むしろ酷くなっているのは周知のとおりです。

世界も家庭も、平和で安寧であることが切に望まれます。今日、世界の主流である欧米流の父性

的厳格さは分かりやすく、士気も高揚しますが、父だけでは子はなかなか育ちにくいのと同じで、黒を黒とせず、悪を悪とせずに包み込む母性的緩さもないと駄目なのではないでしょうか。我々日本人は、このような母性的な心情を煮え切らない国民性と卑下するのではなく、むしろ、大事にしていかねばなりません。

74　娑婆に生きる(2023/5/01)

連日、ロシアによるウクライナ侵攻の悲惨な報道を見るにつけ、人間は、どうしてこのような罪深いことを、反省もなく繰り返しているのかと思います。大国は自分の主張が正義であるとして、軍事力や経済力にものをいわせて自国の影響力を増やそうとしますし、一方では、国家の品格を疑うような国もあったりして、世界のどこかで揉め事が起こっています。人類の歴史は紛争の歴史といっても過言ではなさそうです。

かような焦臭いことは無論のこと、そこから波及する経済のこと、さらには、未だに終息が見えない感染症の問題等々、人間が住むこの世界は、悲しくて辛いことがさまざまあり、それに耐え忍んでいかなくてはなりません。人間が現実に住んでいるこの世界のことを、仏教では娑婆と言いますが、これは梵語のサハーを音写した言葉で、耐え忍ぶという意味を持ち、仏さまの世界が「浄土」であるのに対して、「忍土」と訳されたりします。確かに、徳川家康の遺訓にあるとおり「人の一生は、重荷を負うて遠き道をゆくがごとし」です。

仏教は釈尊によって開かれましたが、かような忍土にあって、辛くて苦しいことから解放されるにはどうすればよいか、思索を重ねられた結果生まれた教えです。それは、ご自身の体験によるところが大きく、仏伝から探ってみることにいたしましょう。

先ず、誕生間もなくして母を亡くされ、叔母に養育されています。そして、まだ幼い春祭りの際、父王に従って田園に出、農夫が耕すさまを見ているうち、鋤の先に掘り出された小虫を小鳥がついばみ去るのを見て、「あわれ、生きものは互いに殺しあう」とつぶやき、ひとり木陰に座って、静思されたと言います。太子の幼い心には早くも人生の苦悩が刻まれ、それは、若木につけられた傷のように、日とともに成長し、太子を暗い思いに沈ませたのです。

十九歳にして妃を迎えられますが、その美しく優しい愛も、何不自由ない宮殿での生活、歌舞管弦の宴も、太子を人生の疑惑から解放し、その苦悩を癒やすことはできませんでした。ある日、城の東門を出て老人に、他日、南門を出て病人に、またある日、西門を出て葬列に遇い、老・病・死の苦を切実に感じたが、一日、北門を出で、静かに歩を運ぶ一人の修行者に深く心を打たれ、出家する決意をされたということです。

また、釈尊成道後のことですが、釈迦一族はコーサラ国によって滅ぼされています。同胞が残虐に殺されるところを目の当たりにされておられるのです。コーサラ国は、あの有名な祇園精舎があったところで、釈尊の多くの説法はこの地でなされています。国王も熱心な仏教信者でしたが、なぜそのようなことが起きたのでしょうか。実はコーサラ国が、小国であった釈迦族に対して、姫を王妃に迎えたいと要請した際、それを快く思っていなかった釈迦族は、長老が侍女に産ませた子を偽って差し出したというのです。その後、生まれたヴィドゥーダバ王子がそのことを知り、父を母を釈迦族を憎み、釈迦族を滅ぼす決意をしたというのです。釈尊も、それを因縁として受け容れられたということです。

さてここで、コーサラ国のプラセーナジット（パセナーディ）王とマッリカー夫人との間に次なるエピ

ソードがあります。ただ、夫人が釈迦族から迎え入れた件(くだん)の方であるとの確証はありません。

王が宮殿の上で、夫人に「いちばん愛(いと)しい者は誰か」と問い、内心、「大王、あなたです」との答えを期待していたのですが、夫人は「私自身、自分がいちばん愛しい。大王さまはいかがですか」と逆に問い返され、「私にとっても、自分よりも愛しい他の者はいない」と答えざるを得ませんでした。そこで、王は宮殿を下りて、釈尊のところに赴(おもむ)き、教えを乞いました。釈尊は「どの方向に探し求めようとしても、自分よりもさらに愛しいものは見い出せない。そのように、他人にとっても、それぞれ自分が愛しいのである。それ故に、自分のために他人を害してはならない」と諭(さと)されたといいます。

そうです。我々は自分を中心にして物事を考えますから、他に対して不平不満をぶつけます。しかし、自分がして欲しいと思っていることは相手もして欲しいと思っており、自分がして欲しくないことは、相手もして欲しくないと思っているはずです。これは人間関係ばかりではなく、国と国の場合も同じです。紛争がなぜ起こるか、なぜ起こったかを考えてみると、相手を傷つけ害していることが、必ずあるはずです。

75　欣求浄土(2023/6/01)

自分という人間が、この世に生を受けて、何の苦しみを味わうことがなく、一生を終えることができたら、どれ程よいかと考える人は少くなくないでしょう。しかし、なかなかそう上手くはいきません。人間である限り、生老病死(しょうろうびょうし)の四苦、つまり、記憶にはない生まれ出るときの苦、そして、ある時期を境に刻々老いてゆく苦、また、さまざまな体や心の不調による病む苦、そして終には、死ぬ苦という避けては通ることの出来ない苦しみがあります。

ただ、最近の医療においては、たとえば末期ガンのような場合でも、緩和(かんわ)ケアを受けることによって、ずいぶん病気そのものの苦痛は軽減されるようになってきているようです。しかし、死という現実が目の前に突きつけられた場合、最新医療をもってしても取り去ることのできない痛みというものが、新たに出てくる場合があります。それは、スピリチュアルペイン（魂の痛み）と呼ばれ、そのような痛みを抱かかえる本人はもちろんのこと、その家族、あるいは終末医療や介護の現場においても、悩ましい問題として立ちはだかってきます。

日本における終末医療の先駆者として知られる、柏木哲夫氏がスピリチュアルペインを次のように分類されておられます。

◎生きる意義に対する問い

・「私は何のために生まれてきたのだろうか」

・「私にはどんな価値があるのか」

・「どうしてこんな病気になってしまったのだろうか。まだやりたいことがあったのに…」

◎苦しみに対する問い

・「私だけがなぜこんなにつらい思いをしなければならないのか」

◎希望がないという訴え

・「どうせ自分はもう長いことないのに、頑張っても仕方がない」

・「身の回りのことも片づいたし、もう何もすることがない」

◎孤独感の訴え

・「世間から自分だけ取り残されてしまい、寂しくてならない」

・「こんな私を誰も助けてはくれない」

◎罪悪感の表出

・「私が悪いことをしたから、こんな病気になったのか」

・「これはきっと天罰だ。許して欲しい」

◎別離への寂しさ

・「家族ともう二度と会えなくなるのか」

◎家族に迷惑をかけているという思い

・「こんなに迷惑をかけなければならないのなら、いっそ早く死んでしまいたい」

◎死後の問題

・「死んだら私はどうなるか。無になるのか」

どれもが切実なものばかりです。しかしが、先にも述べたごとく、これらの痛みを抑える特効薬があるわけではなく、本人自身が納得できる回答を見いだせない限り、死ぬ時まで痛みは続くということであり、なかなか辛いものがあります。

俳人、歌人でもある正岡子規は、壮絶な闘病生活を送り、三十五才という若さで亡くなっています。学生時代に肺結核に罹(かか)り、二十八才のときに脊椎カリエスと診断されて以降は寝た切りになり、病巣からは膿が流れ出すという、そんな地獄のような苦しみの中にあって、日本の近代文学界に大きな足跡を残した方です。 晩年、新聞に連載した随筆『病床六尺』には、次のような記述があります。

「余は今迄(いままで)禅宗の所謂(いわゆる)悟りという事を誤解して居(い)た。悟りという事は如何(いか)なる場合にも平気で死ぬる事かと思って居たのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった」

仏教において四苦というのは、「思うがままにならない」ということで、ならば、諦(あきら)めるしかないというのがその教えです。ずいぶん冷たい教えのようですが、どうにもならないことを、どうにかしようとすれば、余計に苦しむことになります。諦めるは明らめるということ、本当のことを明らかにすることで、匙を投げて断念することではありません。

つまり、たとい、どんな状況下にあっても、今あるここが自分の天地と心得、現状を他人の所為(せい)にすることなく、愚痴はいわず、あるがままを受け入れ、平気で生きる、それが悟りだというのです。また同時に、平気で生きることは、平気で死ぬることであり、「生」と「死」は、決して別物ではなく、不二の関係にあると説くのが仏教です。

しかし、このことだけでは解決しないのが死後の問題です。そこで、大切なのが欣求浄土。すなわち、浄土往生を願う気持ちです。人生の旅路の終着駅である目的地が定まると、到着までの車窓が楽しくなります。ガタゴト揺られながら、様々に現れる風景を、じっくり眺めていこうではありませんか。

76　夏雲多奇峰（2023/7/01）

中国史において、春秋時代（前 770～前 403）末期から戦国時代（前 403～前 221）にかけて輩出した多数の思想家のことを諸子百家(しょしひゃっか)といいます。「子」とは先生、「家」とは学派ということです。「百」というのは多くのという意味で、『漢書』によれば、実際は一八九家もの学派があげられているということです。

学　派　主な学者・思想家

・儒家　孔子　曾子　子思　孟子　荀子
・道家　老子　列子　荘子　関尹子
・墨家　墨子　胡非子　随巣子
・法家　申不害　商鞅　慎到　韓非
・名家　公孫竜　恵施　尹文子　鄧析
・農家　「神農・野老・宰氏」
・縦横家　蘇秦　張儀
・陰陽家　鄒衍　公孫発
・兵家　孫武（孫子）　孫臏　呉起（呉子）
・小説家　鬻子　青史子　師曠
・雑家　呂不韋　淮南子　東方朔

特に儒家（儒教）と道家（道教）は後の時代に大きな影響を与え、法家は秦の政治に採用されて、中国統一に重要な役割を果たしました。今回は、名家はなぜ本流とはなり得なかったかを、考えてみようと思います。

名家の主張は、名実（名称と実体）を正すべきだというものです。名称と実体との異同を正し、名の中に含まれている概念のようなものを、論理的に分析しようとするものでした。その代表的命題としてよく知られているものに、公孫竜（前 320 頃～前 250 頃）の「堅白同異」と「白馬非馬」があります。

前者「堅白同異」の場合、堅く白い石があるとき、目で見るとその白いことはわかるが堅いことがわからず、手で触れると堅いことはわかるが白いことはわからない。だから堅石と白石とは異なる物で、同一の物ではないと説くものです。後者「白馬非馬」の場合、白とは色の概念であり、馬とは動物の概念である。よって、この二つが結びついた白馬という概念は、馬という概念とは異なると説くものです。

要は、共にこの二つの説は、具象の実体と抽象の概念とを混同してはならないと主張しているわけです。しかし、「白馬非馬」を例に取れば、白馬と馬との概念は「不同」というべきところを「非」という語を用いて人の意表をつき、言葉を弄して人を欺く態度がそこには見え隠れしていることは否めません。つまり、詭弁であるとの評価を免れないでしょう。

法家の『韓非子』においては、「兒説（戦国時代の思想家、生没不詳）が白馬に乗って関所を通る時、馬には通行税がかけられていたため、役人は税を取ろうとした。しかし、兒説は白馬非馬説を唱えて税を免除されようとしたが、結局役人の方が引かず、税を取られてしまった」という話を引いて皮肉っています。

公孫竜は、兒説より時代はやや遅く、弁論が立つところから、趙国のブレーンとして厚遇されますが、彼が唱える白馬非馬説は、「そんな論理など在っても役に立たない」と否定されるところとなり、その末路は不幸であったといいます。

さて、これは今から二千何百年も前の中国での話ですが、このところの日本の国会答弁でも、「忖度不同指示（忖度と指示は同じものではない）」というべきところを、「忖度非指示（忖度は指示に非ず）」として、不正を詭弁でもって煙に巻まく議員がいたことは記憶に新しいところです。どうも政治家には、公孫竜の信奉者が結構いるようです。

『法句経』三〇四番の一節に、「善き人は、げに雪山のごとく、遠き国よりも見ゆるなり（友松圓諦訳）」とあります。釈尊はもちろん。孔子のような公平で優れた方は、誰の目から見ても、どこから見

ても歴然としてそびえ立つ、気高いヒマラヤのようだというのです。

一方、梅雨が終わり、本格的な夏がやってくると、夏空には、入道雲がもくもくと湧き上がり、雄大な景色を見せてくれます。隠遁詩人といわれた陶淵明(とうえんめい)はそのような光景を『四時詩』で、「夏雲多奇峰」(夏雲奇峰多し)と表現しました。入道雲は、ときに巨大な山と紛うほどの存在感がありますが、刻々にその形状を変え、やがては無くなってしまいます。つまり、奇峰のように見えていて、その実体は水蒸気に過ぎません。この世の中には、尊敬すべき崇高な山のごとき立派な方もいれば、山のように見えても、入道雲のごとき幻影を見せて、単に脅(おど)し驚ろかしているに過ぎない輩(やから)もいます。仏教や儒教が、民族を越えて、今日なお信仰され、学ばれているのに対して、名家がそのような本流になれなかったのは、なるべくしてなったというほかありません。

77　共に生きる(2023/8/01)

蓮花は、この世の花とは思えないほど神秘性を醸(かも)し出しています。極楽に行ったならば、きっと咲いていそうです。そんな雰囲気を身近で味わえたらという思いで、昨年一念発起して、種から蓮を育ててみようと思い立ちました。

ところが、蓮の栽培はなかなか一筋縄ではいきません。発芽までは上手くいったのですが、やはり、田んぼのような環境を作ってやらないと、もやし状態からちっとも成育しません。そこで、蓮栽培専用の土を購入して、植え替えてみましたら、少し茎がしっかりしましたが、開花は望むべくもありませんでした。

そこで、せっかく蓮鉢を用意したので、睡蓮と何種かの水草を植えて、ついでに、メダカも飼うことにしました。そうしたら、直ぐにメダカの子がいっぱい孵(かえ)るは、水草の花が咲くはで、最近、ビオトープを楽しんでいる方が結構多いというのも、分かるような気がいたしました。ソーラーの噴水装置で水流を作り、針子(はりこ)(メダカの子)が一生懸命泳いでいるのを見ていると、時間を忘れてしまうほどでした。

しかし、ある日、ウドンが水槽の中に投げ込まれていて、メダカが二匹死んでしまいました。しばらくすると、今度は魚のアラが投げ込まれていました。一体誰がこんな酷(ひど)いことをしていくのか、防犯カメラで確かめようと試みたものの、屋外ということで、これが結構大変でした。それでなんとか確かめ分かった犯人は、なんとカラス。

カラスの生態を調べてみましたら、六月七月は、子育てをする時期なのだそうです。防犯カメラの映像を見ると、父親らしきカラスがカーポートの屋根で見張っていて、母親と覚しきカラスが咥えてきたコッペパンを水槽の中に投入して、柔らかくなったそのパンを、親とほとんど大きさの変わらない二羽の子ガラスに口移しで食べさせているではありませんか。きっと、子ガラスが巣立ちするにあたって、餌の見つけ方や、どうすれば美味しく食べられるかといった、生きていく上での知恵を授けているのでしょう。その後も、何度か餌が投げ込まれていたり、咲いたばかりの睡蓮の花がもぎ取られたりと、被害甚大ではありましたが、カラスの親子の情愛には感動させられた次第です。

われわれはどうしても、自分にとって不都合なことが起きると、短絡的にそれを排除しようとします。今回の件でも当初、蓮鉢を荒らすのがカラスと分からず、いたずらを止めて欲しい旨の貼り紙を出してみたものの、カラスに読めるはずがありませんので、見えない相手にずいぶん憤慨していたのです。喧嘩や訴訟は、見えていない部分を、勝手に増幅させて、疑心暗鬼に陥ることが原因となる場合が往々にしてあるものです。個対個の小競り合いから、国対国の戦争に至るまで、その根っこは

同じです。

善導大師の『往生礼讃』に「願共諸衆生、往生安楽国（願わくば、もろもろの衆生と共に、安楽国に往生せん）」という一節があります。つまり、生きとし生けるもの全て、共に、阿弥陀仏の極楽浄土に往生できますようにということです。早い話、極楽という世界は、自分にとって、この世での命が果てた後においても、最愛の人、親友、可愛いペットとも再会できる、無くてはならない仏さまの世界であると同時に、あの顔を見るのも嫌な喧嘩相手、横暴な上司、子どもの頃のいじめっ子、自分にとって不都合なものも全て、自分が極楽に往生したときには、もう既に私が来るのを待っているか、いずれやって来ると言います。そんな極楽なら、行きたくないと思うかもしれません。

たいていの人は、自分はさほど悪いことをしていないから、極楽往生は間違いないと思っています。一方、自分にとって嫌な相手は、きっと地獄に堕ちるだろうから、けして遇うことはないと思っていますが、どっこい、仏教はそのような自分だけに都合のいい教えではありません。生きとし生けるもの全て、どのような悪人といえども、この世に権利を与えられて生存しています。いな、無くてはならない存在なのであります。人間ばかりではなく、野獣にしても、いたずらをするカラスにしても、バイ菌やウィルスをも含め、共に生きていかねばならないのです。

ですから、自分にとって不都合と思う相手を排除しようとするのではなく、相手の立場になって考えてみれば、共感できることが必ず見出せるはずです。そこで、これまでの狭量な己の心を懺悔し、共に生きていこうという思いを持つことはとても大切です。つまり、「寛容と懺悔そして共生」この三つの心を備えたものが集う世界、そこが「極楽」なのです。

78　厭離穢土（2023/9/01）

昔、江戸時代には江戸、大坂、京都などに遊郭があって、遊び人の旦那衆にとって、金さえあれば、そこは極楽世界と思えるところでしたが、一歩遊郭の門の外に出れば、強欲と紛糾とが渦巻く娑婆現実世界へと逆戻りです。一方、遊郭に囲われの身である遊女たちの側からすれば、そこは正に地獄であって、過酷な日々から逃れて遊郭の外、つまり、遊び人が娑婆と呼んでいる、俗世間へ解き放たれることを、一心に望んでいたに違いないのです。

そこで、よく任侠映画などで描かれる、拘束を強いられる刑務所からの出所シーンで、「娑婆の空気はうめえな」というセリフが生まれたということです。

本来、娑婆とは仏教語で、サンスクリット語の「sahā」を音写したものです。我々が住んでいる世界のことをいいます。「忍耐」を意味し、西方極楽世界や東方浄瑠璃世界という「浄土」と違って、娑婆世界は、汚辱と苦しみに満ちた「穢土」であるとの認識から、「忍土」などとも漢訳されます。

確かに、我々が住んでいるこの世界は、地震はあるは、台風は来るは、戦争はなくならないは、病魔から逃れることは出来ないはで、「忍土」であることに間違いありません。特に近年、自然災害も頻繁に起きておりますし、連日のように世界の各地で耳を疑うような事件が勃発しております。中でも、七年前に起きた、津久井やまゆり園で元職員が、十九人もの入所者を刺殺した事件は、あまりに衝撃的でした。なぜこのような事件が起きたかを検証することは、再発を防ぐために大切なことで、いろいろな方面の方々が、これからも時間を掛けて調査研究されるかとは思いますが、私には、思い当たるような事例を以前聞いたことがあります。

ある家出非行少年が、保護をされたといいます。凶悪な罪を犯したというわけではありませんでしたが、偽名を使って自分を明かさず、当初は頑なな態度であったといいます。しかし、調査員の地

道な説得によって次第に自分について語り始め、次のようなことを打ち明けたといいます。

父親は高校の教師であったが、自分は出来が悪く、学校で悪い成績を取ってくると、「お前のような奴は、俺の子ではない！」といって、全人格を否定されたというのです。やまゆり園の加害者の青年も、親と同じ教員になる夢を持っていたようですが、叶わなかったそうです。人生の過程で、挫折はつきものです。大切なことは、周りがその時どう支えるかです。

『阿弥陀経』に、極楽の蓮池には、「青い華は青い光、黄色の華は黄色い光、赤い華は赤い光、白い華は純白の光を放って、それぞれ清らかな香気をただよわせている」とあります。つまり、極楽世界では、それぞれが、それぞれにあるがまま光り輝いているというのです。ところが娑婆世界では、それぞれを色分けして差別をし、ランク付けをします。優等生と劣等生、健常者と障がい者、金持ちと貧乏人といったように差別をし、弱者の方は切り捨てられるという、悲しい現実があることを否定することはできません。ただ、そのことを不当と憤れば、この世が、穢土としか見ることが出来なくなってしまいます。

前述の事件にしても、多くの犯罪も、世界各地で頻発しているテロにしても、貧困・差別・コンプレックスといったものが、その根っこにはあります。しかし、「泥中の白蓮華」というように、たとえ今在るところが、泥のような堪え忍ばなくてはならないところであったとしても、その泥の中にこそ、自分色の蓮華を美しく輝き咲かせる養分があるのです。

「厭離穢土、欣求浄土」という言葉があります。苦悩多い穢れたこの娑婆世界を厭い離れたいと願い、安楽な世界である極楽浄土に生れたいと切望することをいいますが、なにも、それは死んでからのことではありません。『維摩経』の仏国品に「浄土を得んと欲せば、まさにその心を浄むべし。その心の浄きに随って、すなわち浄土浄し」と説かれています。つまり、地獄極楽、穢土浄土といいますが、けして二つの世界が対立してあるというわけではありません。自分の心が穢れていると、この現実世界が「穢土」として現れ、心が浄らかになれば、同じ世界が「浄土」として示顕され、それは、見る者の心の鏡に映し出された有り様にほかならないのです。

宮沢賢治は「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」といっています。浄土への道程は遥かですが、「その心を浄むべし」こそがその鍵であることは確かです。

79　回光返照（2023/10/01）

平和であるということは、万人の希望ではありますが、人類の歴史は、悲しいことに、戦いの歴史でもあったという現実があります。さらに申せば、「家を出れば七人の敵あり」という諺があるとおり、砲弾が飛び交うところだけが戦場ではなく、この娑婆世界そのものが戦いの場であるという見方もできます。事実、企業・芸術・スポーツといったライバル同士の戦い、さまざまな場面での人間関係から生まれる戦いというのもあります。取るに足らないほどの小競り合いならばまだしも、一生の内には、死を意識するような戦いに巻き込まれる事態になることも、まれなことではありません。

そこで今回、中国の戦乱の時代（紀元前 403～221)、七大強国、すなわち燕・斉・韓・魏・趙・秦・楚がしのぎを削っていた時代、詩人であり、政治家でもあった楚の**屈原**という人物にスポットを当ててみましょう。

屈原は、楚の王族の出身で、初め楚の懐王に深く信任され、内政外交に活躍していました。しかし、諸国の併呑をもくろむ秦が、謀略家の張儀を遣って秦・楚の連合を説かせたとき、秦よりも斉と結ぶべきだと主張した屈原は、彼の才能をねたむ者たちの讒言により、王のかたわらから遠ざけら

れてしまいます。そして、屈原が心配したとおり、秦の罠にかかり、戦いとなり楚軍は大敗し、屈原は左遷され、政権から遠ざけられてしまいます。

その後、懐王は秦の口車に乗って秦に入り、監禁されてしまい、次いで即位した頃襄王も、弟の子蘭らの讒言を聴いて、屈原を疎んじたため、洞庭湖周辺の江南の荒野を放浪し、やがて、秦軍により楚の都の郢が陥落するや、絶望した屈原は、汨羅の淵に身を投じたといいます。このように、高潔で憂国の詩人、屈原の人柄を最もよく表しているといわれる詩に『**漁夫辞**』があり、和訳で紹介いたしましょう。

屈原は追放されて、湘江の淵や岸をさまよい、詩を口ずさみつつ歩いていた。顔はやつれはて、見る影もなく痩せ衰えている。ひとりの漁夫が彼を見つけ、尋ねた。

「あなたは三閭大夫（屈原）様ではございませんか。どうしてまたこのようなところにいらっしゃるのですか？」

屈原は言った。

「世の中はすべて濁っている中で、私ひとりが澄んでいる。人々すべて酔っている中で、私ひとりが醒めている。それゆえ追放されたのだ」

漁夫は言った。

「聖人は物事にこだわらず、世と共に移り変わると申します。世人がすべて濁っているならば、なぜご自分も一緒に泥をかき乱し、波をたてようとなされないのです。人々がみな酔っているなら、なぜ、ご自分もその酒糟を食らって、その汁をすすろうとなさらないのです。なんでまたそのように深刻に思い悩み、高尚に振舞って、自ら追放を招くようなことをなさったのです」

屈原は言った。

「このように聞いたことがある。『髪を洗ったばかりの者は、必ず冠の塵を払ってから被り、入浴したばかりの者は、必ず衣服をふるってから着るものだ』と。どうしてこの潔癖の身に、汚らわしきものを受けられよう。いっそこの湘江の流れに身を投げて、魚の餌食となろうとも、どうして清廉潔白なこの身を世俗の塵にまみれさせようぞ」

漁夫はにっこりと笑い、船縁を叩いて歌いながら漕ぎ去っていった。

「滄浪の水が澄んだのなら、冠の紐を洗うがよい、滄浪の水が濁ったのならば、自分の泥足を洗うがよい」

そのまま姿を消して、彼らは再び語り合うことがなかった。――

これは紀元前の中国でのお話ですが、いつの時代にあっても、このような人はおられます。もしかして、あなた自身も今の世を憤り、嘆いてはおられませんでしょうか。

回光返照という禅語があります。自己を明らめずに、いたずらに外に向かって真理を追い求めることを警告する語で、心のあり方を切り替えて、自分自身の心に光を当てて、照らし返してみると、今まで見えていなかったものが、見えてくるということです。

漁夫が言うよう「川の水が澄んだら、冠の紐を洗えばよい。濁ったなら、自分の汚れた足を洗えばよい」も、ひとつの生き方です。障害や係争が起きたときに、ただ正論や正義を振りかざすだけでは解決しないものです。視点を、外から自分の内に移し変えれば、足下が明るくなり、踏み出すべき道の方向が、自おのずと定まってくるというものです。

80　施無畏（2023/11/01）

日本でいちばん古い巡礼霊場は、西国三十三所観音霊場です。和歌山県の那智山青岸渡寺に始まり、近畿2府4県、そして満願所として岐阜県の谷汲山華厳寺と、広域に渡って点在しています。伝承によると起源は、養老2（718）年ということですが、実際には、三十三所が固定化し、民衆化するのは 15 世紀半ばのことのようです。ともあれ、ずいぶん古い歴史のある観音霊場です。

他にも、坂東三十三観音・秩父三十四観音など、観音霊場は日本全国数え切れないくらいにあり、観音菩薩は地蔵菩薩と共に、日本で最も親しみをもたれている菩薩様です。そんな観音菩薩（観世音菩薩）には、次のようなお話が伝わっております。

むかし、インドに長那というバラモンがいました。早離　、速離という男の子がいましたが、その二人の子を残して、母親は死んでしまいます。旅に出ることが多い長那は、再婚し継母を迎えます。しかし、その継母は、父親が居るときは、子ども達に優しく振る舞うのですが、居ないときには、何かにつけて二人に辛くあたるのでした。

しばらくして、インドに飢饉が襲います。継母は、食べ物に困り、この二人の子供を捨てようと考え、小さな舟を借りてきて、「今から、お父様が待っている所に連れて行ってあげるから、さあお乗り」と二人を騙して、孤島に置き去りにしてしまいました。

二人は、お父さんを捜し回りますが、見つかるはずがありません。弟の速離は、「兄ちゃん、僕らは騙されたんだ。何でこんな辛い目に遭わなくてはならないのかな。お腹なかが空いた。このまま死ぬのかな。僕はあの鬼のような継母を恨んで死んでやる」とおいおい泣くのでした。

「なあ速離、そんな心をおこしてはいけない。僕らは、辛い経験をいっぱいしたが、それは僕らの貴重な財産なのだ。死んで生まれ変わったら、この経験を生かして、僕らと同じような苦しみや悲しみを抱えている人たちの力になれるようにと願おうではないか。」

「そうか、兄ちゃんわかった。僕も生まれ変わったら、きっとそうするよ」と、けなげな二人の兄弟は、手をつないで、従容として死んでいったのでした。その後、二人はその誓願を果たし、兄の早離は観音菩薩に、弟の速離は勢至菩薩になりました。……

このお話は、もちろん事実ではありません。偽経といわれる『観世音菩薩往生浄土本縁経』を元に、脚色されたもので、いくつかのヴァージョンがありますが、大きな差異はありません。観音菩薩が、どのような菩薩であるかを実にうまく表現していると思います。

『妙法蓮華経』の普門品には、「是の観世音菩薩摩訶薩は怖畏急難の中に於て能く無畏を施す。是の故に此の娑婆世界は皆之を号して施無畏者と為す」とあります。さらには、「念彼観音力」、一心に念ずる者があるならば、三十三の姿に身を変じて、あらゆる苦しみから救済すると説かれています。

つまり、あるときは、仏の身をもって、またあるときは夜叉となり、長者・長者婦女・比丘（男の僧）・比丘尼（女の僧）・優婆塞（男の信者）・優婆夷（女の信者）・童男・童女など、ありとあらゆる姿に変身して、われわれが災難や困難に陥ったときに、おそれを取り除き、救ってくださるというのです。ですから、代表的な聖観音・千手観音・十一面観音・如意輪観音・准胝観音・馬頭観音・不空羂索観音の七観音のほか、衆生の求めに応じて、延命観音とか水子観音のような方もおられますから、実際には、三十三では足りないくらいの観音菩薩がおいでになります。

しかし、安易に観音菩薩の本質が、悩めるわれわれの畏怖を無くしてくださる「施無畏者」だからといって、棚ぼた式や、童謡『待ちぼうけ』の兎を待つ農夫のような守株方式で臨むのであれば、け

して、本物の観音菩薩と見まみえることはないでありましょう。否、夜叉や鬼のように、今自分の前に立ちはだかって、災難の元凶と思っているその者こそが、実は、心の弱い私に観音菩薩が姿を変えて働きかけてくださっているのかもしれません。

考えてみてください。苦悩や災難の原因を外に求め、不平不満をやたらぶつけてはいませんか。憎っくき夜叉や鬼は、苦渋の形相をしていますが、ひょっとして、今の自分自身の形相こそ、まさにその夜叉や鬼そのものではありませんか。なれば、本当にもがき苦しんでいるのは、むしろ自分の眼前にいる、夜叉や鬼と思っている相手の方なのかもしれません。

「ただ救われたい」と思う心は、時に図らずも夜叉や鬼のようにしてしまいます。苦悩する者の「畏れの心を無くして差し上げたい」と思う心があれば、施無畏者となり、その人こそが観音菩薩に違いありません。

81　冬日可愛（冬日愛すべし）（2023/12/01）

私が、まだ五十代の頃だったと思います。宗派の教団で一目置かれていて、範となるような、私も尊敬していた先輩僧が、「仏教を漢字一字で表すとすれば、それは恩だ」とおっしゃいました。しかし、その頃の私は、それにどうも合点がいかず、「いや空だ」と、反駁して譲れなかったことがありました。

ところが、今年七十も半ばという年齢になって、「空」という概念は、仏教が説く世界観、道理であって、それは単に、学問として仏教を理解することに過ぎないのではないかと、遅まきながら思うようになってきたのです。というのも、仏教の空（因縁生起）という教えからは、平等心、慈悲心といった仏教精神がにじみ出てまいります。恩という感謝の心もその一つで、それらを自分のものとして実践することこそ、宗教にとっては最重要であると気づいたからです。

そもそも恩という字は、「因」と「心」との会意文字です。「自分が今現在生きていることの因縁を尋ねる」という意味に解することが出来ます。すなわち、両親、先生、友人、同胞等、さまざまな関わりや縁を頂いて、自分という人間がこれまで支えられてきたこと、また、生きるためとはいえ、多くの食材の命の犠牲を強いてきたことなどを考えたとき、懺悔の心と感謝の思いが出てこなければ嘘でしょう。

ところが、私どもは、何でも「当たり前」のようにして生きています。自分が人間であることも当たり前、食事を摂ることも当たり前、学校へ、会社に行くことも当たり前、寝ることも、何でもかんでも当たり前のことだと思って生活しています。

そして、時に当たり前でない事態が生じると、ぶつぶつ文句を言って、「誰それが悪い」「世間が悪い」などと不平不満をぶつけます。しかし、自分が当たり前だと思っていることを、陰で支えてくれてきた人が、必ず数多くいたはずなのです。

釈尊の教え、『法句経』の一八二番の「ひとの生をうくるはかたく、やがて死すべきものの、いま生命あるはありがたし（友松圓諦訳）」に示されているのは、自分が人間として、今現在生きているということを、よくよく考えてみると、実に、有ることが難い、滅多にないということを知らなくてはならないということです。けして当たり前のことではなく、さまざまな条件が整い、縁を頂いたお陰であって、正に有り難いことなのです。

「恩」という字が「思」と似ているのは、そういうことを思い、考えないといけないということに違いありません。英語でも thanks（感謝）と think（考える）、ドイツ語でも dank（感謝）と denken（考える）

が似ているということは、けして偶然ではないと思われます。

話変わって、表題の「冬日可愛」は、冬の太陽は暖かく、愛おしく有り難いものであるという意味ですが、「温和で恵み深い人」という意味を併せ持つ、中国の古典由来の四字熟語です。『春秋左氏伝』に次のような記述があります。

古代中国の春秋時代、魯の文公七年（BC620）、狄の部族が魯の西部に侵入しました。文公が晋に訴えると、晋の趙宣子（趙盾）は賈季に命じて、狄の酆舒を問い質し諫めました。

【原文】

酆舒、賈季に問いて曰く、「趙衰と趙盾と、孰れか賢なる」と。

賈季對えて曰く、「趙衰は冬日の日」。「趙盾は夏日の日」。

【現代語訳】

酆舒が賈季に問いました。「父の趙衰と、子の趙盾とでは、どちらが優れた人物ですか」と。

賈季が答えました。「趙衰は冬の太陽と言ってよかろう」。「趙盾は夏の太陽と言ってよかろう」。

この『春秋左氏伝』に注釈を加えた杜預が『春秋経伝集解』において、「冬日可愛、夏日可畏（冬日は愛すべく、夏日は畏るべし）」と評釈したことに由来するものです。

さて、これは中国の古い話ですが、「冬日は愛すべく、夏日は畏るべし」は、実に言い得て妙です。時に、近くに寄り添うと、冬日があたる縁側にでもいるような、快い心地にさせてくれる人が、周りもおられるのではないでしょうか。そのような人こそ、「知恩」の人に相違ありません。恩を知れば、平等心、慈悲心といった利他の心が、自然と身に付いてくるからです。

しかし、世間の指導者と言われるような人の中に、夏の太陽のような畏るべき人が、何と多いことでしょう。配下の者や大衆がいかに困っていようが、容赦なしに、暑苦しいパワーで迫ってくるから堪りません。これから世界は、政治も経済も冬の時代の到来が予測されます。今こそ「冬日可愛」の指導者の出現が待たれます。

82　誓願を立てる（2024/1/01）

私どもには、「こうしたい」「ああなりたい」といった願望が、誰にでもあるかと思います。しかし、その多くは欲望を満たすためのもので、仮にかなったとしても、すぐさらなる欲望が出てきて、その充足感は一時的なもので終わってしまいます。それは、いわば小さな幸福の追求の繰り返しに過ぎないといわねばなりません。

一方、人間ですから、当然のこととして、我欲を満たしたいという心があるにしても、自分が願い、そして行ったことが、他の人を喜こばせ、社会になにがしか貢献出来たとしたら、それはとても嬉しく、大きな幸福が得られるものです。私事で恐縮ですが、梵字フォントなるものを、自分のインターネット上のホームページに公開しています。たとえば　𑖀𑖩𑖽𑖨𑖿𑖥　のような文字をワープロ等で表記できるソフトです。梵字は特殊な文字で、市販のものもなかったので、自作して無料で公開したわけです。そうしたら、学芸員・作家・漫画家・出版社・仏具関係者等、中には、刺青師のような方からも礼状が届き、驚かされたりもしましたが、少しは役に立っていると思うと嬉しいものです。

これなぞは、ほんの些細なことでお恥ずかしい限りですが、世の中には、世のため人のため、骨身を惜しまず、私財をなげうって、大きな仕事を成し遂げられる方がおられます。仏教では、そのようなことを行いたいという願いを誓願といい、そのような行いのことを菩薩行といいます。

そこで、生身の人間でありながら、二人の菩薩と呼ぶにふさわしい人を紹介し、随喜させていただ

くことにいたしましょう。先ずは、行基(ぎょうき)です。『ブリタニカ』には、次のように紹介されています。

奈良時代の僧(668 ～ 749)。諸国を遊歴して自行化他(けた)に励み、これに従うものは千人をこえたという。弟子を連れて各所に橋を造り、堤を築いた。瀬戸内海に五泊(ごとまり)(五ヵ所の港)を開いたのもその一例である。各地に布施屋(無料宿泊所)をつくり、摂津に田百五十町を開墾し、さらに各地に道場(僧尼院)を建て、畿内にあるものだけでも 49 ヵ所に及んだ(四十九院)。このような宗教活動は、朝廷によってきびしい弾圧が加えられた。しかし、朝廷は彼らの勢力を無視することができず、融和策をとることになった。さらに聖武天皇の東大寺大仏造営に際しては、絶大な民衆への影響力により、大仏造営費の勧進に起用され、それまで前例のない大僧正に任じられ、宗教上の最高の地位に立った。彼にまつわる多くの霊験譚(れいけんたん)が伝えられ、また当時の人々は、彼を行基菩薩と称したという。最古の日本全図は、彼が作ったと伝えられる。

どこからそのような大きな力が生まれたか不思議ですが、調べてみて納得がいきました。行基の師匠は道昭という方で、遣唐使の一員として入唐し、あの『西遊記』のモデルとなった玄奘三蔵に教えを受けたといい、日本に多くの経典類を持ち帰り、晩年には社会事業に腐心されたといいます。なるほど、行基の誓願は、筋金入りだったというわけです。

次いで紹介するのは、沼田恵範(えはん)(1897 ～ 1994)です。

彼は、世界平和のためには仏教を弘めることこそ必要と考え、その資金を生み出すために、三豊製作所(現・ミツトヨ)というマイクロメーターの会社を創業したという、異色の方であります。苦労の末事業を軌道に乗せ、仏教伝道協会を創設し、各国語に翻訳した『仏教聖典』を、世界中のホテルに頒布し、これまでに世界 56 ヶ国一万施設以上、総数は七百万部にものぼるとか。また、『大蔵経』の英訳を発願、仏教伝道文化賞の設立、米国各都市に仏教寺院を開設、バークレー仏教翻訳センターの開設やハーバード大学など主要大学に仏教講座を開講、ドイツデュッセルドルフ「恵光」日本文化センターの建設、龍谷大学、武蔵野大学に沼田奨学金を開設するなど、国内外の仏教普及・仏教徒交流に多大な業績を残されました。これらの活動は、氏亡き後、現在も継続しています。

ここで、『法句経』二九〇番にある「かしこき人のたのしみ」を味わってみましょう。

ささやかなる
たのしみを棄てて
若し　大きなる
たのしみを得んとせば
かしこき人は
彼岸(さとり)の大楽をのぞみて
小さきたのしみを
すてさるべし　(友松圓諦訳)

紹介した二人の誓願は、正にこの教えの実践です。我々、これらのまねは無理として、年相応、身の丈に合った誓願を立て、その実行を心掛けたいものです。

83　好時節(2024/2/01)

「春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえてすずしかりけり」

この和歌に初めて出会ったのは、確か高校生の頃だったと思います。『万葉集』や『百人一首』などの歌とは違った、何かしら心が爽やかになったような気がして、それがどこから来るものか、当時は分かりませんでした。

その後、曹洞宗の開祖の道元禅師が、「本来の面目」と題して詠じたものだということを知りました。『伊豆の踊子』『雪国』などの川端康成氏が、ノーベル文学賞を受賞されたときの記念講演の折に、冒頭でもってこの和歌を引用し、「四季の美を歌いながら、実は強く禅に通じたものである」ということを、世界に向けて発信されたということも知りました。

では、その禅の心とはいかなるものなのか、中国宋代の無門慧開の公案集『無門関』を繙いてみることにいたします。

唐代の禅僧趙州が、師の南泉に問います。「禅の道とはいかなるものでしょうか？」。すると南泉は、「平常の心が道である。特別にそのようなものがあると思って求めると、道からは外れてしまう。道は、知るとか知らないといった知識に属するものではない。知ったというのは妄想にすぎず、知らないというのは無記、つまり、答えようがないということだ。日常の起居動作、一言一行の精進の中から自ずと身につくのが道である。真に疑いようのない道に達するということは、それは澄みわたった大空のごとく、ああだのこうだのという分別を離れたカラッとしたものだ」と答えました。まだ若かった趙州ではあるが、その心をすぐさま悟ったといいます。

無門慧開は、次の頌（仏教の真理を詩の形で述べたもの）でもって、この問答にコメントしています。

春に百花あり　秋に月あり
夏に涼風あり　冬に雪あり
若し閑事の心頭に挂こと無くんば
すなわち是れ人間の好時節

【注釈】

春はさまざまな花が咲き、秋の冴えたる月は、実に美しい。夏には涼しい風が吹き、冬の雪景色は、またなんとも趣深い。

つまらぬことにあれこれ思い煩うことがなければ、いつでも、どんなときでも人間にとって好時節である。――

いかがでしょうか。道元の「春は花……」と無門慧開の「春に百花あり……」がいわんとしていることは同じです。それは、「**諸法実相**」という、『法華経』等の大乗仏教に一貫として流れている根本思想です。「一切存在のありのままの真実の姿。宇宙間のあらゆる事物がそのまま真実の姿であること」をいうのですが、ここでは、どんなものでも、どんなときでも「いいなあ！」あるいは「チャンス！」と受け取りなさいということです。

「えっ、そんな馬鹿なことがあるものか」と思われるかもしれません。春や秋は好いとして、最近は特に異常気象ですから、酷暑、極寒、さらには自然災害も多発しています。こともあろうにそれを、「好時節」「いいなあ！」と思うことは、とても考えられないと思われるかもしれません。また、季節ばかりではなく、人生の中で、経験したことのないような逆境に遭ったとき、たとえば、重い病気になった、事業に失敗した、最愛の人を失ったなど、我が身に災いが降りかかってきた場合、それこそ狼狽して、途方に暮くれるのが普通の人間です。

釈尊は、そこのところを「水の中の住処から引き出されて、陸の上に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる」と、『法句経』において、絶妙なる比喩でもっ

て表現をされておられます。そして、こういう状況に追い込まれますと、本人はもちろんのこと、周りの人間をも巻き込んで、さらなる悲劇を生んでしまうということも、よく耳にするところです。

陸に投げ出された魚は、九分九厘死ななくてはならないという現実が待っています。それでもなお残りの一厘に掛けて最善を尽くすことこそ大切ではないのかという考え方も勿論あります。しかし、今現在この災いは、自分に用心が足りなかったことに由来するものではなかったかを、とことん突き詰めて考えなくてはなりません。今のこの苦しみを他人や世間のせいにして、もがいている傲慢な我を、先ず以て自ら殺さなくてはなりません。そして、死んでもよし、生きてもよし、生死(しょうじ)を離れて、これからの体験が、自分にとって素晴らしい宝物となると受け止めたとき、平常心になれるのです。すなわち、これぞ、生まれ変わる好時節、絶好のチャンスなのです。

「俎(まないた)の鯉」という慣用句があります。自らの生死に選択の余地のない状況において、自分としてはやることはやったと達観して、じたばたしないことの意です。前述のごとく、傲慢な人間は、見るからに暑苦しいですが、生死を離れた人間は、いかにもすずしげであります。

84　心不可得（2024/3/01）

人間は、不安の中で生きています。コロナ禍ではその猛威に、世界中の人たちが不安な日々を送ってきました。また、病気はコロナばかりではありませんから、ちょっとした体調不良でも、重篤な病気ではないかと心配したり、人生のさまざまな場面で、僅かな支障が起きただけでも動揺して、心が安まることはなかなかありません。実際、昨年日本で自殺された方が、二万一千八百十八人（速報値）と報じられています。年齢や置かれた立場はそれぞれ違いましょうが、張り裂けんばかりに心を痛めた人々がこれほど多数おられたのです。

私どもに猫が三匹おり、時に喧嘩もし、老猫でもあり、体調は万全ではないでしょうが、不平をいったり、泣き言をいったりすることもなく、よほど人間よりも、達観した生き方をしているように見えます。しかしそれは、人間が、喜怒哀楽という豊かな心を持っているからに違いないわけで、それは同時に、不安という厄介な心も背負(しょ)い込んだということでしょう。

そこで仏教では、そんな揺れ動く心に惑わされないように、心というものは捉(とら)えがたいものと説きます。禅宗の祖といわれる達磨(だるま)大師と、後の二祖となる慧可(えか)とに、次のようなエピソードがあります。

面壁坐禅をしている達磨の元へ、慧可が参禅を請うたが許されず、彼は雪降る中に長く立ち、自ら左腕を切り落として決意のほどを示し、達磨に差し出して切なる思いを訴えます。

「私は、心が不安で落ち着きません。何としても安心(あんじん)が得たいのです」

「では、おまえさんの不安な心をここへ持ってくるがよい。安心を得させてあげよう」

「何処にその不安な心があるか探してみても、見つけることができません」

「不安な心が見つからなければ、ないということだ。ならば、安心はもう得られたということだ」……

さて、この問答には典拠がありまして、『金剛経(こんごうきょう)』に「**過去心不可得(しんふかとく)、現在心不可得、未来心不可得**」と説かれています。「不可得」とは、得られない、つまり、心は存在しないというのです。過去の心は既になく、現在の心もすぐさま過去のものとなり、未来の心なぞ、ましてあろうはずがないということです。この「心不可得」に関して、道元禅師が『正法眼蔵』において、次なるエピソードを挙げて、解説をされています。

『金剛経』の権威を自認する徳山宣鑑禅師が、経書を携えて論戦すべく旅に出たその途中、ある老婆と出会います。

「あんたはどういう人かね」
「私は餅売りの婆だよ」
「わしに餅を売ってくれんか」
「餅を買ってどうするんだね」
「おやつにしようと思う」
「和尚、そのたくさん携えているものは何だね」
「わしは金剛経の権威といわれておる。知らないことはない。これはその注釈書だ」
「それでは一つ、和尚に質問してもいいかね」
「許そう。何でも聞くがよい」
「金剛経に『過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得』とあると聞いたが、和尚は今、どの心でもって、腹の足しにしようとなさるのかね。答えられたら餅を売ってもいいが、答えられなかったら売らないよ」
徳山は、茫然として応答できなかった。老婆は袖を払って行ってしまい、餅を売らなかったという……。
如何でしょうか。ただ、実のところ、『正法眼蔵』を読んでも難解すぎてよく分かりません。そこで、違った視点から、考察をしてみることにします。
仏法には薬となるいろいろな教えがありますが、「心不可得」は頓服（とんぷく）のようなもので、うまく処方されれば、劇的によく効きますが、間違った使い方をしますと、効果がないばかりか副反応が出て、かえってよくありません。慧可のように、生死ぎりぎりの問題で、血流を滞らせていた場合、達磨が、さらりとその血栓の塊を融解させて、効果絶大でありましたが、徳山の場合は、病むでもなく、小腹（こばら）が空いただけで、劇薬ともなる頓服を飲ませようとした婆さんに、まず、素人療法の非は免れないでありましょう。さらに、それに気づかず飲んでしまった、自称薬剤師の徳山自身は、後世までも嘲笑の対象になってしまいました。
その後徳山は、「画（え）に描いた餅は、飢えを満たすことができない」と猛省をしたといいます。不安の中で生きている我々、独りよがりにならず、よき師から適切な教えを受けることは、とても大切なことです。

85　三心四修（2024/4/01）

人間が生きていく上で、必要不可欠なものはいくつかあります。たとえば、酸素や水がなくては駄目でしょう。これは、他の生き物でも同じですが、それとは別に、人間だけに必要なものはないかと考えたときは、いかがでしょうか。
これには人によって、多少意見が分かれるかもしれませんが、もし、道徳や宗教がなかったら、他の生物とは違って我欲が極端に強い人間は、もうとっくの昔に滅びていたのではないでしょうか。「腹を満たしたライオンは狩りをしない」といいます。ところが、欲の深い人間は、
明日の分まで、いや、何年も先までも、食料やお金を貯めておこうとします。これでは、当然ながら奪い合いが起こり、喧嘩をし、果ては互いが殺し合い、人間の歴史は、戦いの歴史といっても過言ではありません。
ところが、人類が滅びるところまで行かなかったのは、人間には道徳心と宗教心が備わっていたからであると考えられます。道徳は、人間の利己的、本能的欲求から起こる軋轢（あつれき）を包括している現実

と、正義・真理・友愛・平等などといった理想との相剋を調整し、社会的成員にふさわしい行為を選択するようにしむけるものです。

一方、宗教は、神仏など、人間を超越した存在を信じることによって、合理的には解決できない問題から生じる知的、情的な緊張を解消し、人間に生きがい、安心や幸福を与える役割を果たすものです。そして同時に、非道徳的行為を自ずから抑制しようとする力を与えるものでもあります。

ただ、宗教は、火にたとえられる場合があります。人間が生きていく上で、火もなくてはならないものであり、人間しか扱えないものです。ところが、この火というものは扱い方を間違えると、火傷をする怖れがあります。宗教も、正しい指導者がついて、うまく機能すればいいのですが、時に、人の不安につけいり金集めをする邪教もありますから注意が必要です。

では、宗教を信仰するということはどういうことなのかを考えてみます。宗教により考え方は異なると思いますが、私どもは浄土宗なので、とりあえず、その伝統に則って説明をいたします。

『観無量寿経』に、「もし衆生あってかの国（極楽）に生ぜんと願せば、三種の心を発すべし。すなわち往生す。何等をか三とす。一つには**至誠心**（身口意が一体となった信仰）、二つには**深心**（疑心なき信仰）、三つには**回向発願心**（一切の行いを浄土往生に振り向けていこうという信仰）なり。**三心**を具する者は、必ずかの国に生ず」とあります。

つまり、阿弥陀仏へのこの三つの信仰心が備われば、浄土往生への心が確かなものとなり、思い悩む心から解放されて、**安心**が得られるというのです。

そして、その安心を得たならば、自ずと**起行**、《読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養》といった身口意の三業での実践行を修し、さらに**作業**、《恭敬修・無余修・無間修・長時修　》という四つの修行態度（**四修**）が必要とされます。

① 恭敬修　阿弥陀仏とその聖衆（観音などの聖なる者）を恭敬礼拝すること
② 無余修　専ら仏の名を称え他の行いを雑えないこと
③ 無間修　行を間断させず、また煩悩をまじえないこと
④ 長時修　恭敬修・無余修・無間修を生涯修め続けること

以上、学問として、念仏信仰を細かく理論づけていくとこのようになるわけです。しかし、法然上人の遺訓とされる『**一枚起請文**』には、「往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく、往生するぞと思いとりて申す外には別の子さい候そうらわず。但し三心四修と申す事の候は皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思う内に籠り候也。（中略）ちしゃのふるまいをせずして、只一こうに念仏すべし」とあります。つまり、「極楽往生のためには、“念仏で必ず往生できるのだ”と思い定めて申す、それだけである。三心や四修も念仏する内に自然と具わる。智者ぶった振る舞いをすることなく、ただ一筋に念仏をするがよい」というのです。

人間にとって、酸素や水はなくてはなりません。なくてはならないものだからこそ、水も空気も汚さないということの方が大切です。宗教も、自分自身においては安心を、また世界は平和であることを目指すものであるという信念さえぶれなければ、小難しいことはいりません。南無阿弥陀仏、ただそれだけでよいのです。

86　魚化龍（うおりゅうとかす）(2024/5/01)

五月五日はこどもの日、端午の節句です。因みに節句は、節供ともいい、元来は、特定な日に食

物を供えて神々や祖先の霊を祀り、それを人々も分け合って食することで、神霊と人々相互の間に一体感を得ようとしたものです。

したがって、節供の語意は、**節**の日の神**供**ということで、後に、そういう供え物をする節の日そのものを節供と呼ぶようになったと考えられます。その意味では、節句ではなく、節供と書くほうが本義的な表記といえます。よく知られている五節供は、それぞれ、人日（一月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、重陽（九月九日）と呼ばれます。これらは中国伝来の習俗が、宮中や貴族社会に取り入れられ、その後、江戸時代に幕府の式日ともなり、民間にも普及しました。

端午の「端」は、初めという意味で、十二支の寅を正月とする古い中国暦の中で漢代に伝わった夏暦では、五月は午の月にあたり、また「午」は「五」と音が同じということで、五月五日を端午ともいいます。

古来より、夏場の厳しい季節に向けて邪気を払うため、菖蒲や蓬を軒に挿し、粽や柏餅を食べるといった風習がありました。また、菖蒲は尚武（武道をとうとぶ）と音が通ずるということもあって、江戸時代から男子の節句とされ、甲冑や武者人形などを飾り、庭先に幟旗や鯉幟を立てて男子の出世や健康を祝うということが、今日まで続いています。

では、次になぜ鯉幟なのかということについて考えてみます。

中国の黄河に、「竜門」と呼ばれる急流があり、ここを登り切った鯉は、竜となるという言い伝えが古くからありました。中国最初の伝説上の王朝、夏を開いた禹が、黄河の治水をした際、上流の竜門山を三段に切り落としたため三段の瀑布ができ、これを「禹門（竜門）三級」と称し、毎年三月三日桃の花が開く頃に、多くの魚が黄河を上り、竜門山下に群集し、竜門三級を登り、登りきった魚は頭上に角が生え尾を昂げ、竜となって雲を起し天に昇るというのです。

この伝承をもとに、二世紀、後漢王朝の時代、李膺という政治家は、当時の乱れた風潮の中で、正しい政治を守り名声が高く、その李膺の眼鏡に適った者を「登竜門」、すなわち、急流を登り切った鯉に譬えたということが、『後漢書』の記述にみられます。

以上のようなことから、難しい官吏登用試験「科挙」の試験会場の正門を竜門と呼び、及第した者、さらに転じて、出世の糸口を「登竜門」というようになったということです。つまり、鯉幟というのは、竜門を登る鯉を表したものであり、生まれたわが子が、元気で世の中の激流を登りきって、出世して欲しいという親の切なる願いがこめられているということです。

禅宗の語録『碧巌録』の第七則頌には、「江国の春風吹きたたず。鷓鴣啼いて深花裏にあり。三級浪高うして魚龍と化す。癡人なお辱む夜塘の水」とあります。これは、慧超が法眼に「仏とはどんなものか？」と問うたとき、「君は慧超だね」と答えたその真意を解説したものです。

考えようによっては、これはなんともピント外れの答えのように思われますが、仮に、「魚化龍」つまり、悟りを得て仏と成ることを、身近な問題としてとらえ、野球に置き換えてみましょう。投手かつ打者として、MLB で二刀流で大活躍している大谷翔平選手は、正に魚龍と化した存在といって間違いありません。そこで、〇〇君という高校球児が監督に、「大谷選手のようになるにはどうすればよいか？」と質問したとします。その時監督は「君は〇〇君だね」と答えたというのです。

つまり、「君は〇〇のままでよい」、裏を返せば、「大谷選手にはなれない」ということです。自分では目にし、聞くことがなくとも、季節になれば鳥は啼き、花は深山に咲いているように、自分には悟りというものが見えずとも、隠れているだけで、自身の中にはあるということです。それを、他人のまねをして、同じものを得ようといくら努力しようが、それは徒労に過ぎないというのです。道元禅師が言

う「仏道を習うというは、自己を習うなり」ということは、そういうことです。

かように、自分自身のことはもちろん、親御さんが、子どもの出世を願うにしても、あこがれと模倣だけでは、三級浪高うして魚龍と化すことは、けして叶うことはないといわねばなりません。

87　忘筌(筌を忘る)（2024/6/01）

「**得魚忘筌**」という、四字熟語があります。訓読みすると、「魚を得て筌を忘る」となります。漢字検定では、難易度の高い一級対象ということですので、普段の日常会話の中で使われるような言葉ではありませんが、少々、お付き合いください。。

「筌」は、竹で編んだ漁具のことで、水中に沈めて魚を捕るために使います。魚を捕ってしまうと、使っていた道具のことは忘れてしまい、顧みられなくなることをいっています。

このことから、目的を達成してしまえば、その功や手段を忘れてしまうことをいい、たとえば、「魚を得て筌を忘れたような処置では、恩義を欠くことになる」のようにして用いられています。辞典等には、類語として、次のようなものが掲載されています。

・**鳥尽弓蔵**（鳥尽き弓蔵められる）

鳥を射尽くしてしまうと、不必要となった弓が、しまわれてしまう。

・**兎死狗烹**（兎死して狗烹られる）

兎が死んでしまえば、捕らえるのに用いられた猟犬は不要となって、煮て食べられてしまう。

・**忘恩負義**（恩を忘れて義に負く）

恩義を忘れて、義理に背く。

ただし、これらの語の意味は、忘恩、不義理という点で、類語として挙げられているわけですが、**得魚忘筌**は、『荘子』の外物篇に由来する言葉で、実は、忘恩、不義理を諫めるような意味には使われておりません。以下に訳文を示します。

筌（うえ・うけ）は、魚を捕らえるためのものであるが、魚が捕れたら、筌のことは忘れてしまう。蹄（わな）は、兎を捕るためのものだが、兎が捕まったら、蹄のことは忘れてしまう。言葉は、人の意図を相手に通じさせるためのものだが、意図するところが伝われば、言葉は忘れてしまうものである。

私はどうにかしてこのように、言葉を忘れ去った人と共に語り合いたいものだ。

以上のように、荘子が、ここで言おうとしていることは、饒舌で博識ぶるような人間ではなく、言葉を尽くして説明しなくては分からぬような相手でもなく、世の中の道理を全て知り得ているが故に、もう言葉というものの必要性がなく、言葉を忘れ去ったかのような理想の人物と出合い、そして、共に語り合いたいということであり、「筌を忘る」ことが善くないと言っているわけではありません。

京都にある臨済宗の大本山大徳寺の塔頭に、孤篷庵というお寺があります。ここの茶室には「忘筌」という名が付いています。安土桃山時代から江戸時代前期にかけての大名であり、茶人であり、建築、庭園、陶芸の巨匠といわれている、小堀遠州が最晩年に造ったものだということです。では、小堀遠州が、どういう思いで「忘筌」と名付けたか、考えてみましょう。

禅画に、「指月布袋」という画題があります。文字どおり、布袋様が、月を指さしている図であります。ここで、月は真理を意味し、その真理をわれわれ凡夫に見届けさせるために、布袋様が指で、つまり、経論でもって、真理である月を指し示しているというものです。江戸期の仙厓和尚の「指月布袋画賛」は、子供たちと戯れる布袋様のほのぼのとした情景を描いています。

ところが、人間くさい布袋様の指先の向こうに、月は描かれておらず、的が定まっておりません。

凡夫には、月を見届けることは甚だ難しいといえます。つまり、それは、経論により確かに真理は見届けることができるということを、ただ示唆しているのであって、その方向付けさえ出来れば、布袋様の役目は終わりということになります。それで、禅家では、月のある方向が分かった後には「指を切れ！」、つまり、いつまでも経論に執着すべきではないと教えています。

さて、茶室とは、言葉を必要としない空間です。どこの経文には何が、あの論説には何が、政治のこと、経済のこと、芸術のこと、趣味のこと、そんなことは何も言わずとも、以心伝心、分かり合える二人、亭主である小堀遠州が、そんな客を迎え、共に茶の湯で語り合える場としたい、そんな思いで、「忘筌」と名付けられたのではないでしょうか。

われわれ、人生において目標を立て、何だかだ、いろいろな手段、工夫算段企てますが、そんな「筌」や「蹄」、「指」にばかり目が向いているようでは、まだまだ本物ではないということでしょう。

88　暢（ちょう）（2024/7/01）

以前、「暢気（のんき）」という看板の架（か）かった居酒屋さんを見つけたことがあります。私は下戸なので、そこに立ち寄ったわけではありませんが、その屋号がいかにも飲み屋さんらしく、会ったこともない大将の顔を想像して、楽しくなったことを覚えています。

「のんき」といいますと、気分や性格がのんびりしていて、楽天的な人を形容していう場合が多いですが、一方では、気楽・安易・不注意・無神経といったことを揶揄（やゆ）するといった側面もあります。頑張る・努力・精進・奮闘・粉骨砕身といった精神とは無縁の世界にいるということで、批判の対象になることもまれなことではありません。仏教においても、しかりであります。仏典に「黒白二鼠（こくびゃくにそ）の喩（たと）え」という、お話があります。

一人の旅人が広野を歩いていきますと、突然恐ろしい狂象が現れて迫ってきました。旅人は驚いて一目散に逃げました。幸い古井戸があり、その中に一筋のふじ蔓（つる）が垂れ下がっています。天の助けと、彼はふじ蔓をつたって井戸の中へ隠れました。一安心して下の方を見ますと、恐ろしいことに、その井戸の底には、大蛇が大きな口をあけて、旅人の落ちて来るのを、今か今かと待ち受けています。上には狂象、下には大蛇、まさに絶体絶命、命の綱はふじ蔓一本です。やむなく足を井戸の側面に突っ張ろうとしたところ、四匹の大きな毒蛇が今にも噛み付こうと鎌首をもたげてきます。

さらに、耳を澄ますと、そのふじ蔓の根元のところで、なにやらガリガリという音がしています。よく見ると、横穴から一匹の白鼠が顔を出して、ふじ蔓をかじっているではありませんか。白鼠が穴に引っ込むと、今度は、黒鼠が顔を出してかじっています。「もう駄目だ。助からない」と天を仰ぐと、ポタリポタリと甘い蜜が、五滴口の中に入ってきました。ふじ蔓の根元に蜜蜂の巣があって、そこから甘い蜂蜜が垂れてきたのです。旅人は、その蜜の甘さにそれまでの恐怖はどこへやら、また蜜が落ちてこないものかと、口を開けて待っているのであった――というものです。

この比喩は、次のように解釈されています。

旅人とは、人生を旅をしている私たちのこと。狂象とは時間の流れのこと。私たちは、毎日毎日、時間に追われて暮らしています。逃げることはできません。井戸の底の大蛇は死の影、今すぐにでもと待ち構えています。四匹の毒蛇とは、人間の体を構成している四大（地水火風）、どこに毒が回っても命はありません。一本のふじ蔓は命の綱、すなわち、人間の寿命です。その寿命の根をかじっている白と黒の鼠は、昼夜のこと。昼夜は繰り返され、私どもの命は一日一日と縮まっていきま

す。五滴の蜂蜜とは、五欲のこと。食欲・色欲・睡眠欲・名誉欲・財欲、どれもが、人間にとって甘く魅惑的です。

以上、この比喩はとても示唆に富んでいます。かのロシアの文豪トルストイも、その著『わが懺悔』で「古い東方の寓話」として紹介しています。川柳に、「いつまでも生きている気の顔ばかり」というのがあります。芭蕉の句にも、「やがて死ぬけしきは見えず蝉の声」というのがあります。ここには、「人間も蝉も、明日の命か分からぬのに、まあのんきなもんだ」といった気持ちが込められているのだと思います。ならば翻って、彼の旅人、私たち、蝉はどうすればよいのでしょうか。

われわれは、努力精進すればなんとかなると思っている節があります。うまくいかないのは、努力が足りないというわけです。しかし、世の中そう単純ではないようです。心理学者の河合隼雄が、ジッドゥ・クリシュナムルティの「物事は努力によって解決しない」という言葉を紹介しておられます。確かに、彼の旅人は、どんなに努力しようが、危機的状況が改善されるとは思えません。

もちろん、努力しなくてもよいということではありません。河合氏は、「道草」「遊び」の必要性を説いておられます。つまり、しゃかりきになるだけでは駄目なんで、視点を変え、心に余裕を持ちなさいということだと思います。そうしてみると、彼の旅人が、「蜜が落ちてくるのをボーッと待っている」、それもありということです。落ち込むでなく、「いつまでも生きている気の顔ばかり」「やがて死ぬけしきは見えず蝉の声」、それがいいのです。

仏教では、「色即是空」といって「空即是色」、「生滅」するといって「不生不滅」であるといいます。矛盾するようですが、こうしないと本当のことが分からないのです。「精進」も大切ですが、「暢気」も捨てたもんではありません。頑張りすぎている人に、「暢（のびのび）」の一字を贈ります。

89　愚痴に還る（2024/8/01）

当派の青年会員の手になる版画カレンダーは、月毎に替わる味わい深い版画と蘊蓄ある標語でとても好評です。ただ、その標語の内容については、得心できるものもあれば、理解に苦しむというものもあります。そのひとつ「愚痴に還りて往生す」も難解の部類に属するようなので、ここで、その意を考察いたします。

まず、日常会話の中で愚痴という場合、「愚痴をいう」「愚痴っぽい」などのように使い、いっても仕方のないことをくどくどと嘆き、益のない行為をいいますが、仏教においては、三毒煩悩、つまり、貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚痴（おろか）の一つとしてとらえられているものです。煩悩の中でももっとも基本的なもので、愚かでものの道理を解さないことをいいます。物事に暗いことから無明ともいわれます。

確かに、世の中のことが見えていないと、人生に起こり得るいろいろな問題に対し、適切な対処が出来ませんから、当然失敗も多くなります。この「無明の闇」は、なかなか明けることがありませんので「無明長夜」、「無明の眠り」あるいは「無明の酔」などといわれ、はなはだやっかいな煩悩なのです。

ところが、今回の標語である「愚痴に還りて往生す」は、あえてそのやっかいな「愚痴に還りなさい」というのですから、意味が分からないといわれても当然でしょう。ちなみに、往生というのは、極楽往生のことですが、何も死後のことをいっているわけではありません。分かり易くいえば、「愚痴に還れば、自分がいる今ここが極楽浄土になる」ということです。そんな馬鹿なことはないと思われるかもしれません。でも、こんな話が、仏典に伝わっております。

釈尊のお弟子であった、チューダ・パンタカ（周利槃特（しゅりはんどく））は、自分の名前も覚えられぬほど愚鈍でした。利発な兄と共に出家しましたが、さすがの兄もそんな弟に愛想をつかし追い出そうとしました。ある日、門の外で泣いているパンタカに、「なにを悲しむのか」と釈尊は、おたずねになりました。パンタカは正直に、「どうして私は、こんな馬鹿に生まれたのでしょうか」とさめざめと泣くのでした。

「悲しむことはない。おまえは自分の愚かさを知っている。世の中には、賢いと思っている愚か者が多い。もしも、愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である」と釈尊は、やさしくなぐさめられて、一本の箒（ほうき）と「塵を払わん、垢を除かん」の言葉を授けられました。

パンタカは、それから毎日清掃しながら、与えられた「塵を払わん、垢を除かん」を必死に覚えようとするものの、「塵を払わん」を覚えると「垢を除かん」を忘れ、「垢を除かん」を覚えると「塵を払わん」を忘れてしまうのでした。

しかし、彼はそれを二十年間、もくもくと続けました。そして、「おまえは、何年掃除しても上達しないが、上達しないことに腐らず、よく同じことを続ける。上達することも大切だが、根気よく同じことを続けることは、もっと大事なことだ。これは他の弟子にみられぬ殊勝なことだ」と、釈尊は彼の、ひたむきな精進をお褒めになられたのです。

そしてやがて彼は、落すべき塵や垢といった汚れは、貪・瞋・痴　という、心の汚れだと悟り、ついに、阿羅漢という位を得て、悟りが開けたといわれています。

この仏伝は、日頃小賢（こざか）しく生きている我々に、とても大切な示唆を与えてくれているように思えます。私どもは、学び、努力して段階を経て順に上を目指せば、いずれ完成された自分が待っているくらいに思っていますが、実はそれは妄想です。

我々生身の人間は、生きているだけで、塵や垢でまわりを汚しています。だから、掃除をするのです。心の掃除も同じことです。掃除をすれば、また新たな汚れが見つかったりします。チューダ・パンタカは、そのことに気付いたのだと思います。

親鸞聖人に、「善し悪しという文字を知らない人はみな、真の心を持っている。善悪の文字を知ったかぶりして使うものは、大嘘の姿をしている」という和讃があります。法然上人は、「一文不知の愚鈍の身になして、知者の振る舞いをせずして、ただ一向に念仏すべし」「愚痴にかえりて極楽に生る」とおっしゃっています。

「善だ」「悪だ」「正義だ」「平和だ」といって、小賢しい人間ほど、自分を主張して争っています。愚痴をいうは無益ですが、愚痴に還り、我が身を全て弥陀にあずければ、そこに安心という救いが生まれるのです。

90　竹一竿（2024/9/01）

パリ・オリンピックが開催されました。コロナ禍で観客なしの東京オリンピックと異なり、大いに盛り上がった大会でした。私ども高齢者から見れば伝統的スポーツ観を覆すようなパーフォマンスを見せるブレークダンス、スケートボード、スポーツクライミングなどの種目もあり、これらの競技でも日本選手が活躍し、獲得した金メダルは国外開催で過去最多。メダルラッシュだったのはうれしい限りです。一方で、あの華麗な演出や警備対策にどれほどの費用がかかったのかと少々気になるところです。

記憶に残っているオリンピックがあります。私が小学６年の時、エチオピアのアベベというマラソンの選手が、裸足で走って優勝した 1960 年のローマ大会です。日本は、体操競技で活躍し、大変

盛り上がりました。あの頃はまだ、スポーツをするにも、運営するにも、そんなにもお金は掛からなかったのではないでしょうか。

ところが、1984年のロサンゼルス大会を契機に、オリンピックがショービジネス化されて、2004年のアテネ大会では、運営費が回収できず、いわゆる「ギリシャ危機」が起きています。2014年のソチ冬季大会では、史上最高額の約5兆円が投入されたといいます。東京大会は、当初、コンパクトな運営を目指し、予算7千億円とされていましたが、開催の一年延期などもあり、最終的に関連経費は3.7兆円に膨れ上がりました。手柄は吹聴するも責任は取らない政治家が関与する事業は、どうしてもこうなってしまいます。

また、スポーツをする側、国際大会で通用するアスリートになるためには、大変な費用が掛かるといいます。種目によって当然違いはありましょうが、年間に数千万円を十数年間は用意しておかないといけないでしょうから、個人で賄える金額ではなくなってきています。確かに、人類の能力の限界を極めるための努力を讃(たた)え、応援したくはなりますが、近代オリンピックが、政治的、経済的、あるいは賄賂やドーピングのような問題も含め、いろいろなところで歪みが起きていることは否めないところです。文字通り、「平和の祭典」であるための努力は、今後より一層していかなくてはならないでしょう。

ところで、オリンピックのような世界の檜舞台に上がる、ある意味晴れがましい生き方は、スポーツの分野だけではなく、事業、芸能や学問の分野などでもあります。ただ、そのためには、潤沢な経費とさまざまな困難やリスクを背負うということになり、能力の見極めの問題も当然あり、夢を実現するためには、相応な覚悟が必要ということです。

では、仏教では、このような問題をどうとらえるのでしょうか。物事に精進して、スキルを磨いて向上を目指すことは、もちろん奨励されますし、特に大乗仏教においては、それによって、お金儲けをすることも敢えて否定はしません。しかし、それはあくまでも自己の問題としてとらえた場合であって、他と争って勝ちを得ようという考えは否定されます。

こんな話を聞いたことがあります。どこの国か忘れましたが、市場で三人の男が、一尾だけ魚を売っているので、「他の魚はないか？」と聞くと「この一尾を売れば、今日三人の食い扶持(ぶち)になるから、必要ない」といったそうです。おそらく普通の商人でしたら、少しでも多く捕ってきて、儲けようと思うのではないでしょうか。さらに大きな資本があれば、遠くの海まで出て行って、網で大量の魚を捕って、直ぐにその船の中で冷凍にして、何年か先の分まで捕ってしまおうと考えるのではないでしょうか。

より多く、より速くといった、他よりも少しでも一歩先を目指そうという競争社会は、人類に進歩繁栄をもたらすという一面も確かにありますが、どこかで破綻を生み、弊害が出てくるものです。そして、より高みを獲得した者を「勝ち組」、そうでない者は「負け組」のように差別化してしまうのではないでしょうか。日本の教育、あるいは会社の営業現場のようなところでも、五段階評価ごとき基準が設けられ、他と競わせて、最低基準でもとろうものなら、「落伍者」のレッテルを貼られてしまいかねません。

「漁夫生涯竹一竿(ぎょふはしょうがいたけいっかん)」という禅語があります。漁夫（漁師）は、生計を立てるのに、釣り竿が一本だけあれば一生涯生きていけるというのです。「あいつには負けたくない」という競争意識を持つと、沖に出て儲けてやろうと船が欲しくなります。しかし、前述の市場の三人の男のように、「その日の食い扶持だけ捕れればそれで十分」という達観があれば、釣り竿が一本あればいいということです。

このような生き方をする人は、決して負け組でも、落伍者でもありません。ギスギスした競争社会か

ら距離を置き、心に余裕を持って生きている人だといえます。「竹一竿！」他と競って、挫折感を味わったときなどには、ぜひ思い出していただきたい言葉です。

91　諸法無我（2024/10/01）

宗教は、危なくて怖いものであるととらえている方がいます。宗教は、人間にとって必要と思われる水・空気・火の中で、火に譬えられることがあります。確かに、火を扱えるのは人間だけで、火を上手に使いこなせば、質の高い生活をすることが可能で、他の動植物とは違った、人間が人間らしく生きていくために不可欠なものである反面、扱い方を誤ると、火傷をしてしまい、命に関わる場合もあり、危険で怖いという一面があるといえます。

『現代国語辞典』に、宗教とは「神・仏・キリストなど、人間をこえたものを信じることによって、安心・幸福などを得ようとすること。また、そのための教え」と、実に明瞭に解説されていますが、結局のところ、科学的には実証することが難しい範疇の分野を扱うものであるが故、奇想天外・荒唐無稽・絵空事、さらには、幸福を希求するものとしながら、真逆の方向に進んでいても、当事者は全く気づいていないといった、傍から見ると滑稽であったり、悲劇さえ招いていることも、結構あったりするわけです。そこのあたりを、宗教は胡散臭く、危険なものとしてとらえられているのでしょう。

しかし、「群盲象を撫でる」という諺があります。今では差別的な表現にあたりますが、お許しいただくとして、目の見えない方達が、象の頭・足・鼻などそれぞれを触って、その部分だけの判断で象というものはこのようなものだと決めつけて互いに譲らなかったということです。つまり、どのような物事、宗教においても、いろいろな側面があって、一面だけとらえて評価するのは賢明であるとは言えません。

仏教においても、大別すれば大乗と小乗、また日本仏教に限ってみても、いろいろな宗派が存在し、それぞれがそれぞれの特徴や側面をもっています。中にはそれこそ安易に近づくと火傷をしそうなものも存在しますので、その見極めはとても大切です。そこで先程の象の話に戻しますと、象は頭から尻尾まで、それぞれの部位は違った役割を持っていて、見た目も違いますが、それらは、骨格によって支えられています。同様に、我々が念仏、題目、座禅といっている仏教の教えは、象の各部位のようなもので、それらを屋台骨のようにして支えている教えに、「諸法無我」があります。

「我思う、故に我あり」は、フランスの哲学者デカルトの有名な言葉です。私どもは、我という存在を疑うことなく、我を中心において、「損だ」「得だ」と言って生きております。しかし、仏教哲学「諸法無我」では、全てのものは、互いに影響し合い、因と縁によって常に変化しつつ成り立っており、我を含め全てのものに実体はないというのです。これは、『般若心経』の「色即是空　空即是色」に説くところの「空」の教えと共に考えると分かり易いです。

自分という人間で考えてみましょう。影も形もなかった、正に空であった自分が、父と母がある時出合い、それが因となり、その後さまざまな縁をいただいき、今の自分が、「俺が」「私が」と主張して生きています。それはちょうど、雪が降って積もった後、雪を固めてゴロゴロ転がしていくと大きな球体となります。そして、それよりは少し小振りのものを作って、上に重ねて目鼻を付ければ、雪だるまが出来上がります。作り手によって、いや、作り手が同じであっても、一つとして同じものは出来ませんし、雪質や天候によっても、他さまざまな条件、それ等「縁」によって、個性豊かな雪だるまが出来上がります。そして、いずれ気温が高くなれば、融けて無くなってしまいます。すなわち、因縁生起、諸法無我、空即是色、色即是空ということです。

話は換わりますが、実業家の故稲盛和夫氏は、誠に希有な経営者であると同時に、すばらしい人格者でありました。事を起こすときには、自身の動機に利己的な心、「私心」がないかと自問自答し、動機が善であり、実行過程が善であれば、結果は問う必要がなく、必ず成功するという信念をもっておられました。また、人のため、世のために役立つことを常に心掛けていれば、必ず善い縁が導かれて、善い成果がもたらされ、すばらしい運命が開けてくるという、「諸法無我」の教えを具現化し、自ら実践して証明して見せてこられました。氏の薫陶を受けた人たちが、日本のみならず、世界に広がりを見せています。稲盛氏が釈尊より受け継がれた「諸法無我」の法灯は、氏亡き後も我々が、大事に、大事に引き継いでいかねばなりません。

92　如是我聞（是の如く我は聞きけり）(2024/11/01)

私どもの宗派では、檀家の方々にお読みいただけるようにと編集された『浄土宗西山勤行式（せいざんごんぎょうしき）』という経本があります。当然のことながら、ここにはお経が記載されています。ただ、その全てが厳密な意味でのお経かというと、必ずしもそうとは言えない面があります。なぜ、そうなのかを説明する上で、知っておいていただきたいことがありますので、しばらくお付き合い下さい。

あの孫悟空で有名な『西遊記』に出てくるお坊さんのことを三蔵法師といいますが、実は、三蔵法師というのは、「三蔵に精通した法師」という意味で、本来、固有名詞ではありません。たとえば、日本で、天皇から高僧への諡号（しごう）である「大師」は、固有名詞ではありませんが、お大師様というと、弘法大師を指すと同じように、三蔵法師といえば、インドから、大変な苦労の末にたくさんの梵語の経典を持ち帰り、中国語に翻訳された玄奘三蔵を指すことが多いようです。『西遊記』の三蔵法師は、玄奘三蔵がモデルになっているということからすれば、もっともなことかもしれません。

では、その三蔵とは何かというと、「三種の篋（かご）」というのが梵語での元の意味です。ここでいうところの篋は、単なる容れ物という意味ではなく、仏教の経典（経蔵）、戒律書（律蔵）、注釈書（論蔵）の三種は、仏教の意義内容を包蔵しているということから、三蔵と呼ぶわけです。つまり、仏教の典籍をひっくるめたものと考えていただければよろしいかと思います。そして、それら全てをまとめ上げたものを、『大蔵経（だいぞうきょう）』あるいは、『一切経（いっさいきょう）』といったりします。ただし、意外に思われるかもしれませんが、釈尊ご存命中も、入滅された当初も、三蔵はありませんでした。そのころの釈尊の教えは口伝で、釈尊ご自身では、典籍をひとつも著されなかったのです。伝承によると、釈尊の滅後まもなく、異論が広がるのをおそれ、教団を統一するために、五百人の比丘（びく）たちが集まり、最初の編集会議が開かれたといいます。これを第一結集（けっじゅう）と呼び、長老であった摩訶迦葉（まかかしょう）が座長となり、阿難（あなん）と優波離（うばり）がそれぞれ、経（教法）と律（戒律）の編集主任を担当したとされ、このとき初めて、経典と戒律のテキスト、二蔵が成立したのです。

その後、経蔵と律蔵の注釈書である論蔵が加わり、ここに三蔵が成立し、その編集会議である結集は、今日までに、つごう六回行われました。六回目の結集は、仏誕二千五百年を記念して、一九五四年にビルマ（ミャンマー）のラングーンで開催されています。

このような経緯から、時代を経る毎に三蔵の量は増え続け、これまでにパーリ語・中国語・チベット語・モンゴル語等による大蔵経が、いにしえの時代より、それぞれの国の先人たちの血のにじむような努力によって作られてきました。『大正新脩大蔵経（たいしょうしんしゅうだいぞうきょう）』(1922 ～ 34 年）は、全 85 巻 3053 部 11970 巻のほかに、図像と総目録を加えて 100 巻よりなり、正に日本人の手による、誇るべきその集大成といえましょう。そして近年、その英訳作業が、仏教伝道協会創立者で

ある沼田惠範氏の発願によって始められ、これからおそらく何十年、いや何百年かかるか分かりませんが、『英訳大蔵経』が完成を見たとき、世界平和に大きな影響を与えてくれるのではないか、そんな期待と願望をいだかせてくれます。

さて、『大正新脩大蔵経』には、三蔵の他に、中国及び日本の高僧方の著作も、多数収められています。ですから、冒頭で申し上げた、『浄土宗西山勤行式』は、『大正新脩大蔵経』の中から、我が宗派に必要とするものだけを選び取った、大蔵経　の一部分であるということです。広い意味でのお経　であるといっても間違いではありません。

しかし、狭い意味というか、厳密な意味からすれば、三蔵、すなわち経蔵・律蔵・論蔵の内の経蔵のみが、経であるといわねばなりません。この経は、先に述べたとおり、第一結集の折に、釈尊に長年仕えてきた阿難によって、まとめ上げられたことが起源となっています。ですから、その書き出しが、「如是我聞」、つまり、阿難が「私は、世尊からこのように聞きました」といって、その教えを語り始めるという形式になっているわけです。

これまで、日本仏教の各宗派が読誦してきた経典は、『阿弥陀経』・『法華経』・『般若経』等、ほとんどが大乗経典です。これらは、歴史的に見れば、釈尊入滅後、何百年も経ってから成立した経典です。もちろん、阿難はもういないはずですが、「如是我聞」で始まります。それでいいのです。経典を読誦するときは、「今、阿難尊者から、世尊の教えを聞かせていただくのだ」という真摯な気持ちこそが、大切なのであります。

93　三輪清浄 (2024/12/01)

近年、ギニアから始まったエボラ出血熱の流行、中国から世界中に広まったコロナなど、致死率の高い感染症の流行が大きな国際問題となりました。世界をあげてウィルスの解明や治療薬の開発が行われ、危機を乗り越えてきました。当初はワクチンの奪い合いの様相がありましたが、アフリカなど医療施設の未整備な場所であっても、国連のような公的機関が支援活動を展開し、国際協力は本当に頼もしく、ありがたいこと実感させてくれました。

一方、民間においては「国境なき医師団」の存在が大きな力となっています。どのような団体であるか、詳しいことは調べておりませんが、その精神に賛同し、私もその都度、ささやかながら、寄付をさせていただいております。ちなみに、そのスローガンというか、憲章を次に引用させていただきます。

憲章

国境なき医師団は苦境にある人びと、天災、人災、武力紛争の被災者に対し人種、宗教、信条、政治的な関わりを超えて差別することなく援助を提供する。

国境なき医師団は普遍的な「医の倫理」と人道援助の名のもとに、中立性と不偏性を遵守し完全かつ妨げられることのない自由をもって任務を遂行する。

国境なき医師団のボランティアはその職業倫理を尊び、すべての政治的、経済的、宗教的権力から完全な独立性を保つ。

国境なき医師団のボランティアはその任務の危険を認識し国境なき医師団が提供できる以外には自らに対していかなる補償も求めない。

以上

人間というものは、戦争ともなりますと、神のため、正義のためと大義名分をかかげ、殺戮（さつりく）を正当

化し、多くの犠牲者を出し、後には悲嘆と恨みだけが残ります。その一方で、我が身の危険を顧みず、そのような戦地に赴いて、傷病者の看護に従事したり、あるいは、伝染病が蔓延(まんえん)する所で献身する「国境なき医師団」のような方々もおられるということで、人間とは、実に不可解な存在であるともいえます。

人間における美しく崇高な行為であるボランティア(volunteer)の原義は、志願兵(対語が draft―徴集兵)で、歴史的には騎士団や十字軍などの宗教的意味を持つ団体にまで遡(さかのぼ)ることができるということです。現在では、一般的に、自主的に無償で社会活動などに参加し、奉仕活動をする人を指しますが、やはり、その根底には、宗教的道徳観があると思います。これらのボランティア行為は、キリスト教での位置づけはよく知りませんが、仏教では六波羅蜜(大乗仏教の求道者が実践すべき六つの徳目)の第一に挙げられている布施行がこれにあたります。

布施は、施す側と、それを受け取る側があって初めて成り立ちます。その関係は「三輪清浄(さんりんしょうじょう)」でなければなりません。三輪清浄とは、施す人、受け取る人、施す物が、いずれも清浄でなければならないというものです。施す物は、お金、品　物、労　力、笑　顔、愛語、安　心、健康等々、相手にとって有益となるもの、しかも、それが清浄であることが肝心で、盗んだ物や、欲得に汚れた物でなければ何でもよいわけです。

ですから、国境なき医師団のような活動は、正に布施であります。ただ、医療関係の方でないとこの活動はできません。ならば、この活動に参加できないかといえば、そうではなく、寄付金を団体に送らせていただく、これも、りっぱな布施になるわけです。

そして、布施のことを喜捨(きしゃ)ともいいます。つまり、喜んで捨てることだというのです。布施をした、布施を受けた人、施した物、その三つを瞬時にお互いが忘れること、これが布施の極意であり、最上の布施であるというのです。

ところが、我々は、「つまらものですが」といって、自分が要らなくなった、貰もらっても困るような物をあげたり、「海老で鯛を釣つる」ではありませんが、あげた以上の見返りを期待しての行為であっては、とても布施とはいえません。

つい先頃も、政治と金ということで、自民党が多くの議席を失いました。政治といわず、人間の行動は、どうしても損得勘定に左右されてしまいます。あげる立場、貰う立場、どちらの立場にあっても、この三輪清浄の精神を忘れないように、肝に銘じておきたいものであります。

94　乾坤輝く (2025/1/01)

令和 7 年の干支は乙巳(きのと・み)ということで、巳年の方にはたいへん失礼かとは存じますが、十二支の中で、おそらくいちばん人気のない動物ではないでしょうか。しかし、蛇は洋の東西を問わず、古来より神の使い、あるいは、神そのものとして崇められたり、畏れられたりしてきました。日本では、神話に登場するあの八岐大蛇(やまたのおろち)がそうですし、山口県の岩国の白蛇は、天然記念物として大切に保護されていて、岩国白蛇神社にも祀られ、福運金運をもたらしてくれるということで信仰を集めています。また、白蛇に限らず、その抜け殻を財布に入れておくとお金が貯まるといって、お守りにする方も多いようです。

旧約聖書の創世記に出てくる蛇は、イブをそそのかして、神から決して食べてはいけないといわれていた「善悪を知る木」からその実、いわゆる「禁断の実」を採って食べさせます。ここでは、蛇は悪魔(サタン)の使いとして登場します。

ギリシャ神話においては、医術の神アスクレピオスの持っている、蛇が巻きついた杖を「アスクレピオスの杖」と呼び、欧米では医療・医学を象徴するマークとしてよく使われ、救急車の車体に描かれたり、世界保健機関のマークにもなっております。

ところで、十二支には、蛇に似ている想像上の動物、竜（旧字体では龍）がいますが、その起源は、インド神話に登場する、ナーガであるといわれます。それは、インドコブラが神格化されたもので、大海あるいは地底の世界に住むとされる人面蛇身の半神です。彼等の長である竜王は、巨大で猛毒をもつものとして恐れられた半面、降雨を招き大地に豊穣の恩恵をもたらすとして信仰の対象となっていました。仏伝にもたびたび登場し、仏法の守護神、八部衆の中にも入っています。特に法華経の会座に列した八大竜王がよく知られています。

中国には、古来、鱗虫（りんちゅう）（蛇など鱗のあるもの）の長として竜というものが考えられていたということですが、梵語経典を中国語に翻訳するとき、ナーガを竜と訳したため、融合が起こり、現在われわれが知っているような竜の姿となったようです。ですから、仏典に出てくる竜は、本来は蛇と言うべきなのかもしれません。ただ、水神として信仰されている点では共通性があります。

他に、仏典に登場する蛇としては、釈尊の言葉を収録した最古の聖典『スッタニパータ』の第一が「蛇の章」となっています。全部で十七偈ありますが、二偈のみを紹介します。

①蛇の毒が（身体に）ひろがるのを薬で制するように、怒りが起こったのを制する修行者（比丘）は、この世とかの世とをともに捨て去る。あたかも蛇が旧（ふる）い皮を脱皮して捨てるようなものである。

②走っても疾過ぎることなく、また遅れることもなく、「世間における一切のものは虚妄である」と知っている修行者は、この世とかの世とをともに捨て去る。あたかも蛇が旧い皮を脱皮して捨てるようなものである。

ここでは、蛇が脱皮して成長するように、仏道を修行する者は、煩悩の殻（から）を脱ぎ捨てなくてはならないと諭（さと）しています。慣用句に「一皮むける」という表現がありますが、おそらく、ここらあたりから来ているのではないでしょうか。

またもう一つ、「四蛇（しだ）の譬喩（ひゆ）」というのが、『金光明経』や『北本涅槃経』に見えます。仏教的世界観である、万物の構成素とされる四大（地・水・火・風）が相剋しせめぎ合って安定を得ないさまを、一つの箱の中の四匹の蛇が互いに殺傷し合うのにたとえたものです。つまり、四大からなる人間の身体も、四大の相剋によって病苦を生じるというわけです。たしかに、自分自身を顧みても、一時安定したかと思うと、何かしらまた不安定なことが出て来て悩まされ、人生そんな繰り返しのように思われるのは、体内で四匹の蛇が暴れているからかもしれません。

さて、新たな一年のスタートです。元日にふさわしい禅語として「日出乾坤輝（ひいでてけんこんかがやく）」があります。乾坤（けんこん）とは天地のことで、日の出の生気に満ちた景色をいい、それは、新しく迎える年への希望と期待でもあります。ここで忘れてならない大事なことは、自分自身が輝やいていないかぎり、天地宇宙は、決して輝いて見えることはないということです。体内の四蛇をなだめすかし、どうか、皆様にとって、一皮むけた輝ける佳き年になりますよう、心より祈念いたします。

95　日々是好日（にちにちこれこうにち）(2025/2/01)

女優樹木希林の最晩年の映画作品で、茶道の先生役として重要な役割を果たしている「日日是好日（にちにちこれこうじつ）」という映画を観ました。主人公は黒木華（はる）が演じる、自分に自信が持てない女子大生で、卒業後も決まった就職もできず、結婚もままならないのではあるが、茶道を通して、女性として、人

間としての生き甲斐のようなものを、確たるものではないが、何かを掴みながら、成長していく物語です。

エッセイスト森下典子の自伝を映画化したもののようですが、スーパーヒロインとは言えない、ごくありふれた主人公が、若い頃に誰もが抱くような劣等感を少しずつ克服していく様を、何気ない日常を描く中で展開していきます。冒頭で、「イタリア映画のフェリーニ監督の『道』を十歳の時、親に連れられて観たことがあるが、何がいいのかさっぱり分からなかった」という語りから始まりますが、これが重要な伏線となっています。

私自身を振り返ってみますに、成長過程において、どうしても他人と比べて、体力、知力、精神力、財力、容貌等々に負い目を感じ、時には、何で自分というものが生まれてきたんだろうと思うことがありました。しかし、幸いにも、多くの人がそうであると思うのですが、そこそこに折り合いを付けて、何となく生きてきたというのが、実態のような気がいたします。

しかし、中には、それこそ死ぬ程に思い詰めて、自ら命を縮めてしまう人がいることも事実です。冒頭の語りにあるイタリア映画、「道」の主人公ジェルソミーナは、ただ同然で身売りされた、頭は弱いが純真無垢な女旅芸人です。粗野で暴力を振るう親方のザンパノに嫌気が差し逃げ出すのですが、そこで陽気な綱渡り芸人イル・マットに出会います。彼から、「石ころにも価値がある。この世に価値のないものはない」と励まされ、前を向いて生きようとするのですが、彼は、からかわれた仕返しということで、ザンパノに目の前で撲殺されてしまいます。放心状態なったジェルソミーナは、芸人として役に立たなくなったとして、置き去りにされ捨てられてしまいます。そして数年後、ザンパノは彼女が、ひとり寂しく死んでいったことを知り、自分にとって、彼女は大切な存在であったことに初めて気づき、砂浜で泣き崩れてもだえ苦しむところでこの映画は終わります。

さて、我々の多くは、ジェルソミーナが味わったような疎外感、絶望感は体験していないでしょうが、「日日是好日」の主人公典子のような悩みは、「そう言えば自分もそうだった」と共感できるところが多いのではないでしょうか。端（はた）から見れば、取るに足らないようなものかもしれませんが、自分にとっては、捨ててはおけない重大な問題であったはずです。

そこで「日日是好日」の映画を通して作者の意図するものは何であるか考えてみると、原作の副題として―「お茶」が教えてくれた 15 のしあわせ―がそのまま答えになろうかと思います。詳しい一つ一つには触れませんが、第十三章に「雨の日は、雨を聴くこと」とあります。茶道と仏教とは、密接な関係にあります。茶室に掲げられる書は、禅語が多く、「日日是好日」という映画の題名もそうです。表記の仕方が「日々是好日」であったり、読み方も何通りもありますが、「毎日毎日がすばらしい」ということです。雨を通して、しあわせ（好日）になる方策を考えてみましょう。

普通、出かける時に雨が降っていようものなら、舌打ちして文句の一つも言いたくなります。しかし、雨は自分に意地悪をするために降っているわけではありません。自分が今直面している悩みや障害にしても、自分だけを苦しめるために降りかかっているわけではありません。慈雨というのは、日照りつづきのあとに降る雨のことを言うのですが、雨は作物を育てるために必要不可欠なものだからです。自分に直面している障害も、実は、未熟な自分を成長させてくれる慈雨となり得るもののはずです。雨を嫌って、家の中に閉じこもっていては、雨の本質は分からないでしょう。時には、土砂降りの中に飛び込み、時には、雨音に聴き耳をたてて、外の景色を眺めていると、今まで気づかなかった雨の本当の良さが見えてくるものです。

『碧巌録（へきがんろく）』には、雲門文偃（うんもんぶんえん）が、弟子たちに「ここまでの 15 日間のことは問わないが、これからの 15 日間をどうするか一言で言ってみよ」と問い、それに自ら答えて「『日々是好日（にちにちこれこうにち）』と述べたというが、

これはどういうことか」とあります。つまり、過ぎたことはくよくよせず、これからのことは、自分勝手な物差しで善し悪しを判断することを止め、思いがけない災いにも、新鮮な出遭いと受け止めれば、「日々是好日」になるということでしょう。

96　俱会一処（くえいっしょ）　(2025/3/01)

七年くらい前でしょうか、右脚全体に神経痛が走り、難儀したことがあります。腰骨がぐらついていることから来る症状とのことです。いわゆる老化現象によるものですから、仕方のない病気といえばそれまでですが、そうもいっておられません。人間にとって、痛みというものは、思考回路を停滞させ、生活全般にも影響が及びますので、何らかの対策を考えないといけません。

ところで、われわれは死ぬ身であり、そのことは誰でも認識しております。しかし、十七世紀のフランスのモラリスト文学者のラ・ロシュフーコーが『箴言集』において、「太陽と死は直視できない」と指摘しているように、自分の死というものは、眩しすぎてあえて見ようとはしません。むしろ、若い頃は特に、自分には死は当分やってこないと高をくくって生きておりますが、どっこい、私のように死ぬまで続きそうな痛みに突然出くわしたりすると、狼狽するんですね。

近年、スピリチュアルペインという言葉をよく耳にします。この「キーワード」の解説には、次のようにあります。

終末期患者の人生の意味や罪悪感、死への恐れなど死生観に対する悩みに伴う苦痛のこと。「魂の痛み」とも訳される。世界保健機関（WHO)は、肉体的（フィジカル）、精神的（メンタル）、社会的（ソーシャル）の三つの面から健康を定義してきた。しかし、一時期、人間の尊厳などを視野にスピリチュアル（霊、魂）を加えた議論があったことで広く知られるようになった。緩和ケアの領域では、薬や社会制度などで取り除けないこの痛みを癒やすことが重要な役割とされる。

ということですが、スピリチュアルに対する宗教観の影響を避けるためか、健康の定義はなかなか理解しにくい面があります。

以下は、祖父江省念師という有名な説教師から聞いた話です。

いつも説教を聞きに通っていたお婆さんが来なくなったので、電話をすると、「脚が痛くて行けなくなった」というのです。そこで「いよいよ、あんたも**リョウマチ**になったか」というと「リョウマチではありません」という。そこですかさず、「役に立たなくなった婆さんは、家族に嫌われ、嫁はあんたが死ぬのを待っとる。地獄では、鬼がおみゃさんが来るのを、手ぐすね引いて待っとる。両方で待っとる。それなら、リョウマチ（両待ち）ではないのか」といったというのです。

これは落語のような話ですが、かのお婆さんにとっては、脚の痛さもさることながら、両待ちされているとの思いがスピリチュアルペインとなって、笑い事では済まされぬ痛みにさいなまれていたに相違ありません。

仏教においても、生老病死は、自らでは思うがままにならない、四つの苦しみであると説きます。それをどうにかしようと思うと余計に苦しみが増幅することになり、何ともならないものであれば、そこから脱却する方法は、ただ諦める外ないというのです。冷たく突き放すようではありますが、現実を見極め、本当のことが分かって明らかになったときを、諦めるというのだと教えています。

さらに、浄土教においては、この世での命果てた先の安心について説いています。『阿弥陀経』には、極楽浄土への往生を願えば、仏・菩薩・親しかった人たちとも、**俱に一つの処で出会うことができる（俱会一処）**とあります。胸が張り裂ける思いで、最愛の人との離別を余儀なくされる者にとっ

て、これほど有り難いことはなく、それは、唯一の救いとなるものです。

法然上人には、素晴らしい歌がいくつもあります。その一つに、上人が七十五歳の高齢で流罪になられたときに、庇護者であった九条兼実が、自身の力が及ばず今生の別れともなりかねない、悲しい別離の思いを歌に詠まれたとき、そのお返えしとして、逆に兼実公を慰められた歌があります。

露の身はここかしこにて消えぬとも　心は同じ花のうてなぞ

（露のようなはかないこの命、いつどこで尽きようと、念仏する者の思いは一つ、極楽浄土の同じ蓮華の座で再びまた会える）

このような法然上人でありましたから、八十歳になられて、病に伏せられたときには、「浄土を願う行人は、病患をえて偏にこれを楽しむ」と仰おおせられたといいます。人間には、さまざまな一生があります。そんな中、自分と同じような思いで難儀されている方や乗り越えられた方が必ずいるものです。ですから、わたしたちは謙虚に「子供叱るな来た道じゃ、年寄り笑うな行く道じゃ」の心掛けと、いよいよというときには「倶会一処」を心の支えとしたいものです。

97　念彼観音力（ねんぴかんのんりき）（2025/4/01）

私どもの寺には、開基由来の「江崎十一面観音」が本堂に、「安心（聖）観音」が大通りに面した駐車場内に安置されていて、近所や通行人の方々がよく手を合わせて行かれます。観音菩薩は、地蔵菩薩と並んで馴染みのある菩薩です。正しくは観世音菩薩といい、『般若心経』では、観自在菩薩という名称で登場します。衆生の救いを求める声を聞くと、ただちに救済をする求道者という意味からの命名です。観音菩薩は救う相手に応じて千変万化の相となるということで、さまざまな形で表現されていますが、代表的な七観音を次に紹介いたします。

◎ 聖観音

すべての変化観音の原形です。一面二臂（一つの顔と二本の腕）という、普通の人間の姿をしています。そして多くの場合、悟りを開く前を象徴する蓮華（未開敷蓮華）を左手に持っています。右手でその花弁を開こうとする姿の作例も多くあります。

◎ 十一面観音

頭上に十、または十一の面を乗せています。この十一面というのは、あらゆる方向に顔を向けているという意味です。人間的な親しみからか、自然な二臂像が圧倒的に多く、水瓶に蓮華をさして左手の持物としています。

◎ 不空羂索観音

不空は徒労ではないこと、羂索は鳥獣を捕らえる「わな」で、大悲心で衆生を済度して漏らさないという意味になります。像容は一面、あるいは三面で、四臂・六臂・八臂などもあるが、多くは一面三目八臂に表され、手に羂索などを持ち、肩には鹿皮を着けています。

◎千手観音

千手千眼観音ともいわれ、千の手を持ち、その掌にそれぞれ眼があります。千手は大慈悲、千眼は智慧が円満自在であることを表わします。実際に千本前後の手を表現した仏像もいくつか現存するが、一般的には十一面四十二臂が多いです。

◎ 馬頭観音

慈悲相で知られる観音菩薩の中では、異例の分怒相をしています。怒りの顔で、魔障や煩悩を食い尽くして衆生を救うのです。ただ実際には、馬や牛などの家畜の守護仏、旅行の安全の守護

仏として、庶民の信仰を集めました。

◎如意輪観音

財宝を富ませ、福徳や智慧を授けて、苦悩する衆生を救うといいます。像容の多くは一面六臂で、如意宝珠と宝輪などを持ち、右膝は立てて、両足裏を合わせて座り、頭を右に傾けて頬に指を添える、思惟の相を示しています。

◎准胝観音

仏の母とも説かれ、この准胝仏母の真言と印契（印相）の密法を修すれば、一切の重い罪をも滅せられて、速やかに心の清浄を得るといいます。その像容は、三目十八臂に表されることが多いです。

観音菩薩に関する経典は何種かありますが、一般に『観音経』と呼ばれているのは、『法華経』の中の第 25 章「観世音菩薩普門品」を別出して一巻としたものです。後半の「普門品偈」には、**念彼観音力**、かの観音の力を念ずれば、「火の穴におし落とされようとも、それは池となる。大海原に漂流し、龍や鬼神の難にあおうと、浪に沈むことはない。高山より落とされようと、太陽の如く虚空にとどまる。悪人に追われ金剛山より落ちようとも、髪の毛一本損なわれない。刀を持った賊どもに囲まれようとも、賊はみな慈悲心をおこす。王の迫害にあい、刑場で命が尽きようとするとき、刃は折れてしまう。手かせ足かせに囚われようとも、その鎖より解き放たれる。呪いや毒薬で損なおうとする者があろうと、災いはかえって本人に向かう。悪鬼や毒龍、様々な鬼神にあおうとも、あえて害をなさない。もし獣に囲まれ牙や爪に襲われようとも遠く走り去る。……（以下略）」とあります。

まさに、絶大なる効験です。しかし、にわかには信じがたく、現実的には、そのようなことはありえないと思うやもしれません。観音菩薩が、自動販売機のように、お賽銭を入れて念ずれば何でも思いどおりのものを出してくれると考えている人には、そのような奇跡は当然起こりえないでしょう。

『法華経』により日蓮宗を開いた日蓮は、為政者から睨まれ殺されそうになったとき、「念彼観音力」とその気迫で刀を下ろさせなかったといいます。つまり、観音菩薩の御利益は、棚ぼた式の受動的なものではありません。先ずは我欲を捨て、それが他を利するものであるかを自問し、全身全霊、その慈悲にすがり、我が身を委ねることによってのみ与れるものなのです。

98　自帰依（じきえ）(2025/5/01)

子どもの頃、かくれんぼをしていて、ふと自分を意識したという記憶はありませんか？　多くの人が、だいたい十才頃にこのような体験をするのだそうです。つまり、自分は、母とも父とも、兄弟とも、友人とも違う存在であるということを、いわゆる思春期に入る前の段階で意識するというのです。よって、そのような意識の表れとして、幼児期は自分のことを、親がいうとおりに「〇〇ちゃん」といっていたのが、「わたし」とか「ぼく」「おれ」というようになるというのだそうです。

さて、そのような自分、成長していく過程は、ただ単に、身長と体重が増えるだけではありません。昆虫は、脱皮を何度か繰り返し、さらに変態することによって成虫となります。たとえば、幼虫の芋虫からサナギ、そしてチョウという具合です。それぞれ全く違った形態の変化の末に、きれいな羽の生えた成虫となります。人間の場合も、おそらく、外見上の大きな変化はなくとも、内面では、脱皮やサナギのような大変革の末に、大人になっていると思われます。自分自身振り返ってみますと、確かに、あのときは脱皮、あのときがサナギであったのではないかという、思い当たる節があるものです。

ところで、自分の「自」という漢字の成り立ちは、鼻の形にかたどり、ハナの意を表すのだそうです。自分のことを示すのに、鼻を指さす動作から来るものといいます。この自分、出来れば能力をフルに活用して、自信満々で、肩で風切っていきたいものですが、いかんせん、意気消沈して、消え入りたいと思うことがなんと多いことでしょう。自分のことなら何でも分かっていそうなものですが、実のところ、何ら分かっておらず、思いどおりにはいかないものです。動物たちを見ていると、人間であればそれこそ大変な苦労するであろうと思われる状況でも、取り乱すこともなく平然と生きているように見えます。人間はなぜ、悩み苦しむのでしょう?

仏伝に、こんな話があります。コーサラ国の王であったパセナディ王が、マッリカー夫人に「この世でいちばん愛(いと)しいのは誰か？」と問いました。「それは自分自身です」という夫人の答えに疑問を抱くも、「王様はいかがですか？」と問われてみれば、自分とて否定しがたいものがあり、そのことを釈尊に尋ねたところ、「その通り、他の人々にとっても自己は、誰よりもいちばんに愛しい。それゆえに、自分と同じように自己を愛しく思っている他を害してはならない」と説かれたといいます。

自分というものは、己(おのれ)を中心に物事を考えますから、「こんなにも愛してやっているのに、我が身が可愛とは何事か！」となったら、喧嘩(けんか)になります。しかし、自身を振り返ってみれば、我が身をいちばん可愛がっている自分を発見いたします。つまり、この「己(おのれ)が」という「我(が)」が、障(さわ)りとなって、さまざまな悩みや苦しみが生じてくるのです。

道元禅師が『正法眼蔵(しょうぼうげんぞう)』で、「**仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふというは、自己をわするるなり。……**」といっておられるのはこのことです。人間が苦悩するのは、自分のことが分かっていないからであり、釈尊の教えである仏法を学ぶということは、真理を探究するということですが、畢竟(ひっきょう)、自己を知るということに他なりません。

自分という人間が、この世にひとり存在し、幼児期、思春期、青年期、壮年期、老年期というそれぞれの過程において、悩み苦しみ生きていかねばなりません。自分のことや世の中の仕組みに疎いと、不安から解放されることがなく、常に迷い悩まなくてはなりません。幼児期の時のように、いつまでも親や他人に依存しているわけにはいきません。しかし、自己を知り、世の中の法を知ることが出来れば、そんな自分を信頼することが出来るようになります。最古の経典といわれる『法句経(ダンマパダ)』には次のように書かれています。

『法句経』一六〇番

おのれこそ　おのれのよるべ
おのれを措(お)いて　誰によるべぞ
よくととのえし　おのれにこそ
まことえがたき　よるべをぞ獲(え)ん

『法句経』二三六番

爾(なんじ)　おのれの燈(あかし)となれ
すみやかにいそしみて
賢き者となるべし
けがれをはらい　著(まよい)をはなれて
とうとき
聖地(さかい)にいたるべし

（友松圓諦訳）

これが、有名な「**自灯明・法灯明**」の教えです。法に裏打ちされた自己こそが、よるべ（頼り）となり

得るというのです。ただ、自己を知ることは、己の愚かさを知ることでもあります。そんな自分を帰依できるまで、ひたすら精進することが仏道なのです。

99 欣求浄土 (2025/6/01)

先般、右図のような掛け軸を入手しました。初めて見る方ですと、「これはいったい何をしているの？」と思われるかもしれません。昭和の作家によるものですが、「東行逆馬（とうこうさかうま）」という逸話をモチーフとして描かれたものです。

馬上の人物は、法力房蓮生（ほうりきぼうれんせい）といいます。俗名は熊谷直実（くまがいなおざね）といい、平安時代末期から鎌倉時代初期の武蔵国熊谷の出身の武士です。源頼朝挙兵の当初には、平氏軍の一員として戦い、その後頼朝の家人となり、源義仲との戦い、一ノ谷の戦いなどに活躍して一騎当千（ずば抜けて強い勇者のこと）と称せられました。

一ノ谷の戦いで平敦盛（たいらのあつもり）を斬ったことは特に有名で、『平家物語』や謡曲の『敦盛』にも感銘深く語られているところです。ところが、自分の息子ほどの敦盛の首を取らねばならなかったということに無常を感じ、また、一族との領地紛争にも巻き込まれ、俗世に嫌気をなして鎌倉を去り、京都で法然上人の下で出家したという経歴の持ち主ですが、豪快一途な人だっただけに、いくつもの逸話が語り伝えられております。

直実五十三歳のとき、法然上人の草庵を訪ね、「今までに大勢の人を殺してきた。このような者でも救われる道はあるのか」と、法然上人に真剣に問うたところ、「罪の多少にかかわらず、南無阿弥陀仏と念仏を申せば誰でも往生できる」とお答えになりました。刀を研いで切腹するか、手足の一本も切り落とそうとまで思っていた直実は、その場で号泣して法然の弟子となり、泥中にあっても、清らかな花を咲かせる蓮のごとく生きるようにと、蓮生という名を与えられました。

出家して翌々年、この弥陀の御慈悲を、ぜひとも一族同輩とも分かち合いたいと熊谷に向かいます。その時の逸話が、この「東行逆馬」です。東に向かうにあたり、弥陀の在（ましま）す西方極楽浄土に背を向けてはならないと、馬の鞍を逆さまに置かせ、馬の頭の方に背を向けて乗り、馬子に引かせて下向したといいます。

またその途中、小夜ノ中山で盗賊に遇い、 取り押さえることは雑作のないことでしたが、それでは短気がなおらんと、盗賊に旅銭、 法衣らすべてを与えてしまったといいます。

しかし、路銀に困り、藤枝宿の富豪、福井憲順に借用を申し出ますが、当然渋ります。ならばと、南無阿弥陀仏と称える蓮生の口からは、まばゆい金色の化仏が現れ、憲順の体中に移り、さらに南無阿弥陀仏と九遍称えると、十体の阿弥陀仏が憲順の体中に収まりました。これには憲順夫婦大いに驚き、蓮生に銭と必要なものを与えたといいます。

翌年、蓮生は帰洛の途、路銀返済のため憲順の屋敷を訪ね、憲順に南無阿弥陀仏と称えさせると、口から阿弥陀仏が一体一体出てきて、蓮生の体中に戻っていったといいます。しかし、最後の一体だけは、憲順の願いで体中に留め置いたということです。

憲順は夫婦共々この教化により念仏に帰依し、福井家をそのまま念仏の寺とし、蓮生を開山となし、それが今日まで続く熊谷山蓮生寺ということです。これは「念仏質入れ」の逸話と呼ばれています。蓮生が開基とされる寺は、この蓮生寺の他、岡山の誕生寺（法然上人生誕地）を始めとして十

ヶ寺、縁(ゆかり)の寺を含めると二十ヶ寺にもなり、その行動力と魅力はたいしたものであったといわざるを得ません。

そして、蓮生の最期がこれまた見事でした。承元二(1208)年二月八日に自分は往生すると宣言します。その当日、群衆に囲まれた蓮生は礼盤(らいばん)上に座して、高声で念仏を称えながら往生を待つも、突然、念仏をやめてしまい、半年先に延期するといい放ちます。群衆の中には嘲(あざけ)り笑う者もいたが、弥陀のはからいと、悪びれる様子もなかったといいます。それから半年後の九月十四日(四日とも)、 蓮生は、沐浴し袈裟を着け端座合掌して念仏し、群衆見守る中、蓮生の息は絶え、その場に立ち会った人々は、「法力房は、自ら願った上品上生(じょうぼんじょうしょう)の往生を果たした」と讃えたといいます。蓮生享年六十八歳、無骨で実直で頑固者、そんな念仏者の見事な最期でした。

さて、われわれの人生、そうは思い通りになるものではありません。だからといって、旅するときには目的地を定めるように、人生の旅路も、目標は定めておかねばなりますまい。蓮生は、欣求浄土、終着目的地を西方極楽浄土と決めてからは、法然上人の教えどおり、智者のふるまいをせずして、ただ愚直に浄土往生を願い、自分自身が思い描いたとおりに、人生を全(まっと)うしたといえるのではないでしょうか。このような人生を誰もが出来る訳ではありません。故に、蓮生の生き様、死に様にわれわれは感動するのでありましょう。

100　処処全真(2025/7/01)

釈尊には多くの弟子たちがいましたが、特に十大弟子は、ぬきんでた才能を発揮された代表格の方々で、中でもその筆頭は、智慧第一といわれた舎利弗(しゃりほつ)(舎利子(しゃりし)、シャーリプトラ)でした。多くの経典にも、その名は度々登場します。あの短い『般若心経』でさえ二度、『阿弥陀経』にいたっては、さほど長い経典ではないにもかかわらず、釈尊は舎利弗の名を何度も呼びかけ、三十八回も出てまいります。

彼は、釈尊より年長であったといわれます。若いころから学問に優れ、当時もっとも有名な論客の一人で、徹底した懐疑論者サンジャヤの弟子でありましたが、親しかった目連(もくれん)と一緒に釈尊に帰依し、サンジャヤの弟子二百五十人を引き連れて集団改宗したということです。それには、こんなエピソードが伝わっております。

釈尊の最初の弟子は、出家後、苦行をともにした五人の比丘たちです。釈尊が、六年間に及んだ苦行は、身を苦しめるだけで菩提への道ではないと、村娘から乳粥を得たのを見て、彼らはいったんは離れていきました。しかし、釈尊が悟りを得た後、その説法を聞いて、最初の仏弟子となり、ここに初めて仏教教団が成立することとなりました。

その中の一人であった阿説示(あせつじ)(馬勝、アッサジ)が、ある時、王舎城(ラージャグリハ)で托鉢していたところ、その凛とした姿や所作を見て感じ入った舎利弗は、阿説示の後を追い「あなたの師は誰で、どのような教えを説かれるか」と問いました。阿説示は「釈迦牟尼で、『諸法は因より生ず。また、それら諸法の滅をも』と説かれます」と答えました。

舎利弗は、その仏陀の教えの一端を聞いただけで預流果(よるか)(悟りの最初の段階)に達し、親友であった目連と共に仏弟子となったといいます。そのため、舎利弗は阿説示に死ぬまで恩義を感じ、夜に寝る時も彼がいる方向には足を向けなかったとも伝えられています。

つまり、舎利弗は、阿説示と出会う以前においても、既に、二百五十人もの弟子を抱えるひとかどの権威であったのすが、その人をして、たちまちに釈尊の下に馳せ参じさせたものは、その教えで

ある**因縁の法**（**ダルマ**）でした。

『般若心経』において、「舎利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。舎利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨不増不減。……

（舎利子よ。色は空に異ならず、空は色に異ならず。色はすなわちこれ空、空はこれすなわち色なり。受想行識もまたまたかくのごとし。舎利子よ。この諸法は空相にして、生ぜず、滅せず、垢つかず、浄からず、増さず、減ぜず……）」の件は、まさに、舎利弗に対して、**因縁の法**、あるいは**因縁生起**（いんねんしょうき）（**縁起**（えんぎ））といっても同じことですが、それを空（くう）という概念で補講されている場面であるということです。

経典を読むに当たって大切なことは、この『般若心経』の場合、「舎利子（舎利弗）よ」と呼びかけていますが、それは他でもない、私に釈尊が呼びかけて下さっていると感じ取ることです。当然のことながら、はじめは理解できないことも多いかと思いますが、舎利弗に近づく努力を惜しんではなりません。

やがて、「此（これ）があれば彼（かれ）があり、此がなければ彼がない。此が生ずれば彼が生じ、此が滅すれば彼が滅す。（小部経典『自説経』）の意味するところが理解できるようになると、世界観が大きく変わります。

すなわち、それまでは自分を中心とした利害関係や損得勘定から、事の善悪や真偽を判断していたことが、実は、自分という存在は、宇宙の大きな法則の中で、因縁の法に基づいて一つの現象としてあるのだということに気付かされます。そうすると、これまで「こんな理不尽なことはない！」と怒っていたことが、結局は、自分が知らず知らず蒔いた種が、原因であったということはよくあることです。

ただ、昨日の行いが即、今日の果報というものではありませんし、共業共果（ぐうごうぐうか） といって、他人と共有しうる結果をもたらす力が働く場合もあり、時空にずれが生じ、人知の及ばない面が当然あります。また、「縁起が悪い」「因縁を付ける」「親の因果が子に報う」「自業自得」といった

ことばは、どうも悪い意味合いで使われることが多く、暗いという印象も否めません。しかし、自然科学における万有引力の法則が、動かしがたい真理であると同様、因縁の法は仏教における核心であり、宇宙の真理であることに間違いはありません。

すなわち、いかなる場所においても、いかなる場面にあっても、すべてが仏法発露の場であり、たといそれが不合理、あるいは理不尽だと思えたとしても、すべてが、因縁生起の道理にかなった真実を具現しているということです。『碧巌録（へきがんろく）』にある「**処処全真**（至るところ、すべてが真実）」は、そこのところをずばり端的に表現しています。因を正しく見つめる眼と、縁に感謝する心を養っていきたいものです。